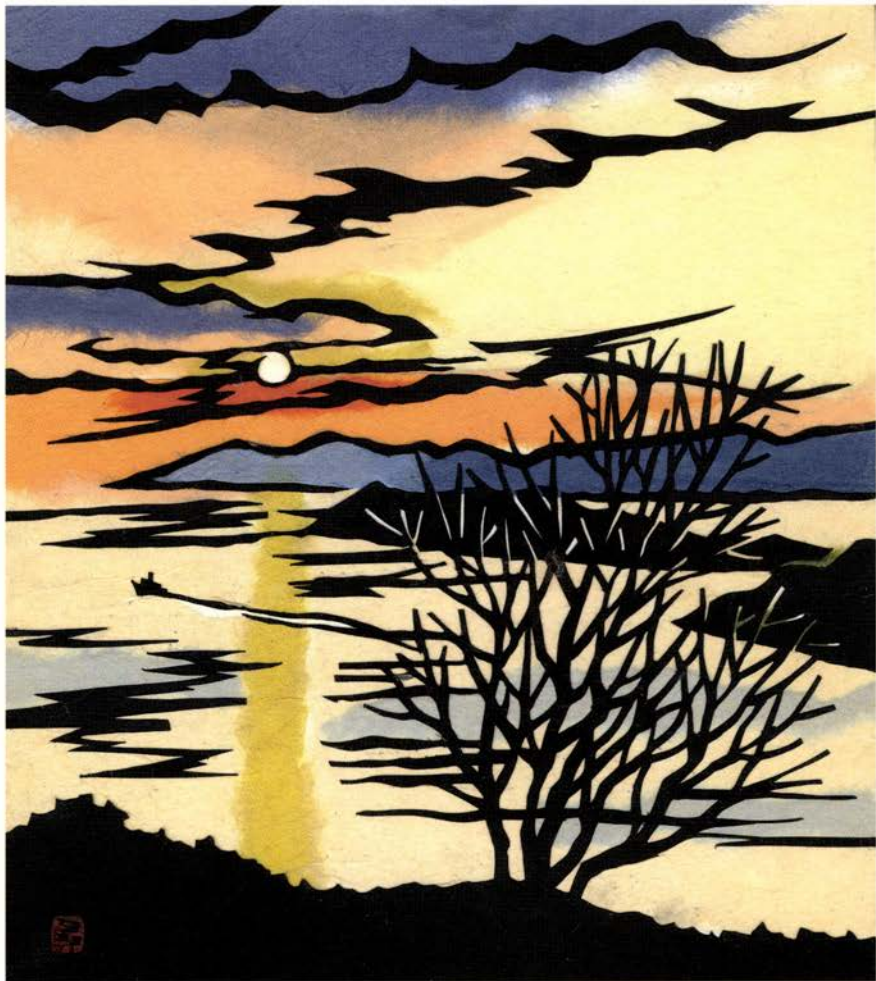


川柳塔



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三十年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九七九号

日川協加盟

No. 979

十二月号

寒中見舞募集

○本誌平成21年2月号掲載

○締切 12月23日

川柳塔社事務所宛

平成21年大会予告

日川協北海道大会

平成21年6月28日(日)

京王プラザホテル札幌

第15回川柳塔まつり

平成21年10月12日(祭)

アウイーナ大阪

国民文化祭静岡大会

平成21年11月1日(日)

長泉町文化会館

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

伊藤正哲さん

「命をいただいたて」を有難う

河内 天笑

「三步進んで二歩さがる」は往年の水前寺清子のヒット曲だが、「三つ覚えて五・六忘れる」このごろの私となりました。

十月の二十日を過ぎた頃から首が回らなくなり、クルマの運転もままならずという日が続いたが、やっとひと月近くで八割程回復。以前なら三日もすれば回復したものを。接骨院では「初診料こみ二千円です」と言われ窓口のうしろから事務員が「間違いました、後期高齢なので四百円です。次回より二百円です」と一年早く「後期」と認定された。

ことし五月から七月にかけて十キロの減量には成功したものの、それ以後も同じ食生活ながら一向に目方が減りません。来年五月迄にあと五キロ減を目標の日が続きます。

十一月七日、本社句会での「命をいただいたて」と題しての伊藤正哲氏のお話は実に見事に皆さんのハ

ートを掴まれた様に思われます。私は選句をしながら盛り上がった際のお話ぶりを時たま耳にしながらですが、「人間は必ず死ぬ」からいいので「あんたいくつ」「わたし五百六十才」は考えも及ばぬところだとか、結婚して子が出来ればおじいちゃんおばあちゃんが二組いて四人。これを25代も遡れば（五〇〇年から六〇〇年）血のつながった先祖は三十三百五十万人を越えるなどとユーモアを混え、「裏を見せ表も見せて散るもみじ」の句を引いて命にかかわる内容の重い話を楽しく聴かせてくれるあたりは、大したエンターティナーぶりだと感服ひとしきりでした。また機会を設けてお聞かせ願いたいと望んでいる所です。その時は是非テープに録音して皆様にお聞かせしたいと思えます。二〇〇九年の本社句会でのお話をたのしみにして。

寝違うて普通が何よりの宝

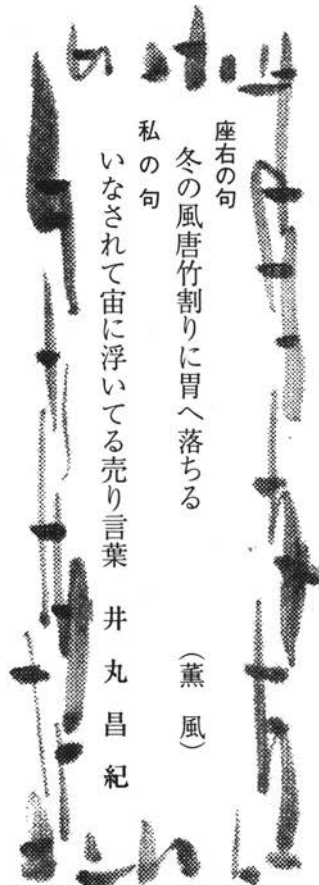
天笑

見渡せばみなケータイの虜たち

ギヤルたちが外国人に見える街

紙一重でもはつきりと勝ちと負け

あけすけに叱つてくれてありがとう



座右の句

冬の風唐竹割りに胃へ落ちる

(薫風)

私の句

いなされて宙に浮いてる売り言葉 井丸昌紀

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「加太夕照」

■巻頭言 伊藤正哲さん「命をいただいて」を有難う……	河内 天笑 ……(1)
この秋に思う……	奥田みつ子 ……(2)
川柳塔(同人吟)……	河内天笑選 ……(4)
温故知新……	木津川 計 ……(47)
川柳塔の川柳讃歌(48)……	
麻生路郎句抄……	計 ……(48)
自選集……	計 ……(49)
水煙抄……	小島蘭幸選 ……(54)
「川柳雜誌」より 苦闘四十年……	麻生路郎 ……(73)
愛染帖……	新家完司選 ……(74)
誹風柳多留一篇研究 41……	計 ……(78)

この秋に思う

奥田みつ子

今年の川柳塔まつりの記念品として柴原道夫編の改訂・増補『橋高薫風川柳句集』全索引を頂戴した。「橋高薫風川柳句集」は平成十三年秋に発刊され、その一年後、道夫氏によって全索引が完成し、その労作に感謝しつつ大いに活用させて頂いた。

そして、今回の改訂・増補版である。前回の九八ページから一六四ページと大幅に増え各句の初出から出典まで、懇切丁寧に記されている。また、補注にいたっては読み物としても充分読み応えがあり、楽しませてもらう力作に本当に頭が下がる思いである。

その川柳塔まつりの直前、九月末に国民文化祭いばらき2008の二次選者の会議があり水戸へ行ってきた。水戸は初めてだったので借楽園など観光したが、時間的に無理だったので諦めて、岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館に向かった。

同じ二次選者の佐藤岳俊さんが岩手県の方なので、一日に三本しかない仙台行きの特急を教えて頂き北上まで一緒にすることが出来た。途中、車窓には黄金色の田んぼに畦の彼岸花の真紅が映えていた。ところどころ稲刈

檸檬抄「去る」	高瀬霜石	木本朱夏共選	……	(80)
一路集	「終る」	永田俊子選	……	(82)
	「イベント」	井上森生選	……	(82)
初歩教室「終る」		西川和子選	……	(83)
		三宅保州	……	(84)
秀句鑑賞	同人吟	三島淞丘	……	(86)
	水煙抄	土橋 螢	……	(88)
各地句会だより	くろほこ川柳会とともに	鈴木公弘	……	(89)
追悼	長谷川春蘭氏	津守柳伸	……	(91)
十一月本社句会			……	(92)
各地柳壇(佳句地十選/多久和敬子)			……	(96)
第23回国民文化祭・いばらき2008			……	(111)
柳界展望			……	(112)
十二月各地句会案内			……	(114)
■編集後記(ひとこと/井上桂作)	希久子・富美子・光久		……	(116)

座右の句

よく笑う手鏡ひとつ懐に

私の句

ふるさとに私を癒す森がある

(みつ子)

小川 賀世子



りをしている所もあり、岳俊さんが「うちももう稲刈りをしてきましたよ」と話しておられた。刈り取った稲を一本の棒に円筒状に懸けて干す稲架(はさ)が珍しく、東北の抜けるような青空の下、刈り終えた田んぼに幾つもの稲架が立っているのは、童画を見るようでも暖かく楽しく感じられた。

日本現代詩歌文学館では四月二十二日から来年の三月八日まで「天体と詩歌展」があり短歌・俳句・川柳・詩の五十九名の自筆の色紙・原稿とコメント・写真が常設展示されている。短歌は篠弘館長はじめ十八名、俳句は稲畑汀子他十六名、川柳は辻晚穂他七名、詩は杉山平一他十三名で、私の色紙も恥ずかしそうに飾られていた。

この文学館の理事をしておられる柳都川柳社の大野風柳氏がかねてから「短歌・俳句などに比べて川柳が極端に少ない」と歎いておられるのも頷ける。まだこの場合は他分野の半分だが、ある出版社では短歌十三、俳句二十、川柳一、詩一と桁はずれのこともある。

サラリーマン川柳・企業川柳も川柳の分野には違いないが、もっと我々の文芸川柳が一般の人々の目に触れる機会を作り、川柳の良さを知って欲しいとつくづく思う。それこそが、麻生路郎先生が心血を注がれた川柳の社会化に通じるのではなからうか。



河内天笑選

藤井寺市 高田 美代子

阿呆やなあ馬鹿正直が嗤われる

まさかという坂に行く手を遮られ

焼き芋の笛が聞こえる秋の夜

二章目もやっぱりわたし流でいる

ポロポロと鱗剥がれていく寒さ

ゴミ出し王子だんだん板についてきた

大阪市 森田 明子

帽子脱ぐように私を捨てたい日

生涯をかけて仕上げたデスマスク

口紅にちよつと元気を借りている

還暦がある日突然やってきた

古傷が馴染み私のもものとなる

本心でぶぶ漬けでもと言うてます

八尾市 高杉 千歩

デフォルメをしてはいません老いの筆

エプロンの視野で政治を見てる秋

矢印の向うへ欲を潜ませる

引き算の果ては笑いが止らない

脳が先走って身体従いてこず

ポインセチア街に溢れて十二月

大洲市 中居 善信

雑草が生えているのも落ちつける

歩を一つあっさりくれるはずがない

夢も希望も持てなくなつたのでニート

悪者にされる私の腹回り

腹ん中晒す単純明快に

自惚れた顔かも知れぬブルドッグ

弘前市 高橋 岳水

充電も放電もある酒の量

昭和史に千人針という祈り

風の子が何処にも見えぬ風の町

暇だから疲れがたままる小商人

年寄りの日の年寄りが笑わない

健診を受けぬ本音は怖いから

一身上何て都合のいい言葉

高知市 小川 てるみ

ハンガーに明日着る服を掛けてみる

高からず低からずある志

この道と決めて一本 木を植える

あきらめているのに話蒸し返す

肩書きの驕りが口の端に出る

松山市 宮尾 みのり

肩の荷がさみしがりがりの身に余り

おおまかに事を運んでよく笑う

通院の出来る間は独り住む

カロリーはこの際言わぬバイキング

世話役としての徒労を積み重ね

まあまあが顔を揃える同期会

松江市 銭山 昌枝

凡人のミスは笑って誤魔化せる

お茶漬の好きな夫を信じよう

自惚れて思い違いに気づかない

土瓶蒸し味覚音痴も平らげる

背を曲げたわたしを映すウインドウ

知恵の輪に脳と指先しごかれる

堺市 加島 由一

着メロは恋女房の想夫恋

ビールから夏を引き継ぐ冬の酒

お月様から地球見て飲む近未来

河川敷里帰りした青テント

ソロバンを持つ母さんは騙されぬ

風と桶屋サブプライムとおこづかい

京都市 高島 啓子

秋暑し鍵の具合が悪くなる

クレインの下に出ている名月よ

なつとくの上で立秋やってくる

少しだけあれば良しとす菊繪

ミニラーメンの湯気秋の夜の長さ

秋がよく見えるようにとガラス拭く

松江市 三島 裕丘

主義主張捨てて流れに付いて行く

妻の吹くラッパに一家踊らされる

驕りなど捨てると稲の穂が垂れる

赤提灯トラもオカメも酔いつぶれ

秋晴れに胸のピアノがよく弾む

さわさわと耳をくすぐるいい噂

羽曳野市 三好 専平

雷に叱られている猫の恋

外人が増えて土俵が狭くなり

人間を苦しめ菩薩よい笑顔

ぼろぼろの国を支える胡錦涛

忘却の彼方に置かぬ核の惨

ほどほどを忘れていつも泥まみれ

ほどほどを忘れていつも泥まみれ

出雲市 持田 多輝子

古里に母の姿がある絆

蟬しぐれワイングラスに晩夏ゆく

恙なく生きる喜び福笑い

ほほえみを絶やさぬ友も早や傘寿

もみ消しでやつと分かつた医療ミス

五欲みな捨てて仏と向い合う

西宮市 片山 忠

当事者でないから好きな事を言う

マヨネーズ秘伝の味をおちこわす

占いが好きで彼氏に恵まれぬ

老妻を抱いて重さを確かめる

男なら手荷物ぐらい持ってやれ

丈夫だけ取柄が今や貴重品

高槻市 左右田 泰雄

迷ったら下手に動かぬ方がよい

信号が青になるのを待ついたらち

笑わせておいてこっそり席外す

のど飴もゆっくり溶ける星月夜

いざという時の抜け道さがしとく

大過なく事をすませて缶ビール

羽曳野市 吉川 寿美

寒暖へ戸惑う老いの更衣

一寸いい気になり過ぎないか府知事どの

医者知らず過信していた松葉杖

あれもこれも早る心と鈍くささ

駄駄っ子で我が足ながら持て余す

忙中閑赤札市が呼び止める

和歌山市 古久保 和子

産直の店で柿栗さつまいも

コスモスの海で溺れている無邪気

湯上がりの鏡に掛ける自己暗示

中身より高価な財布持っている

喫煙席を見る冷やかな視線

刈り終えていつきに冬へ加速する

大阪市 中村 れんげ

修繕し良くぞここまで生きたもの

老々介護夫の入歯にブラシかけ

たそがれの夕陽ヶ丘に舞う落ち葉

背に秋を貼りつけ一人旅に出る

歩いたら歩いただけの秋がある

来る年の息吹き見せつつ黄葉散る

大阪市 西川 更紗

検査結果に鼻唄が出てしまい

順風にのる強運を持ち合せ

日本の今を築いた高齢者

ため息の数だけ皺も深くなり

懸命に生きて先行き見通せず

ダイエット我慢がまん秋が来る

鳥取市 春木圭一郎

何よりもまずは相手の話聞く
あくまでも相手の得を考える
摩擦から絆深まることもある
こちらから気楽に言おうありがとう
声かけるだけで心が通い合う
何げない言葉が人を打ちのめす

藤井寺市 鈴木いさお

余裕綽々妻には埋蔵金がある
よくもまあすらすら嘘が出る口だ
丁寧にていねいに今を生きる
呆ける前に金の在り場所聞いておく
誕生日過ぎて後期へ仲間入り
幸せを妻と演じているのです

鳥取県 石谷美恵子

秋に入り可も不可もない夫婦劇
あまり拒むな厄介な根が残る
拒みたい招待席に浅くかけ
傘寿坂もう主婦業はギブアップ
山びこを返せぬ森が泣いている
好きなこと言い合い喧嘩できる友

倉吉市 野口節子

二人三脚転びながらもフルムーン
ばーちゃんはバリアフリーでよく転ぶ
お泊りやすとその気にさせる京訛り

幸せを壊さぬように言葉選る
儲けすぎ所得隠しがして見たい
喧嘩するうちが華だと生き字引き

檀原市 安土理恵

遅咲きのひまわりがんばったんだね
コップ一杯かぶせてあげる誘い水
用済みの乳房だ癌にくれてやる
間仕切りをとって抜ける介護の目
鼻っ柱つよい夫の細い脛
おまじない効かぬ痛みは罰だろう

大阪市 伏見雅明

喪服にも流行り廃りがあるらしい
笛吹けど踊る人なし核家族
簡単に胃カメラ呑めと医者は言う
へそ曲がり裏技ばかり知りたがり
叱られて上の子いつも割りたがる
火の玉が飛んでお化けが腰抜かし

鳥取県 細田裕花

自画像の地下にしかと父母の色
いい頃のネガ捜し出し焼き直す
噂話時にツツコミ入れてみる
便利さとせめぎ合ってるエコ意識
一言が昔のけんか蒸し返す
約束を果たして紅葉いい色だ

高槻市 乙倉武史

アメリカが悪性不況風邪をひき

恐慌に慌てふためく世界中

資源ない裸日本に冬が来る

ノーベル賞繚乱日本人四人

悪玉のクラゲ脚光株をあけ

おばかさんブームテレビが火付け役

大阪市 板東倫子

ノーベル賞わからんけれどお目出度い

人里へ狸も猿も熊も寄る

秋は先ず菊見と決めたスケジュール

柿と栗買うて土塀の径を行く

朝寒や日経株は下げつづく

本当のお洒落若さの光る頬

西宮市 西口いわゑ

ノーベル賞暗いニュースの中に花

赤とんぼ秋のしらべをのせてくる

クレーンが我が物顔に天を突く

鏡にはどうする術もなく負ける

夫病みいのちの重さなど思う

大夕日今日一日をありがとう

堺市 矢倉五月

口止めをされなくなつてすぐ忘れ

五分五分が好きで友達たんといふ

老いて血が恋しくなつたといふ

相性が良いはわたしの片思い

寝不足が祟り一日無為に暮れ

プラスにはならない愚痴をついこぼし

大阪市 近藤正

農水省御用達です汚染米

株暴落お持ちの方は辛かろう

ノーベル賞四人まとめてふるまわれ

天引きで小遣いまでが引いてある

年越しのそばは日本製買いに行く

いただきます安全祈願して食べる

三田市 北野哲男

免許返納身分証明保険証

礼服の時だけ出会うのも絆

蛋白も糖もプラスでクスリ酒

信用はしないがいつも引くみくじ

大きな目のイヤリングした地獄耳

首輪せず犬と駈けっこ叱られる

大阪市 大川桃花

茄子一つ買うにも迷う主婦の性

明日のこと分らないから今日も飲む

海が見えるホームに降りて見たくなり

気位の高い魚をぶつ切りに

約束をしたことだけは覚えてる

同窓会誰が生徒か先生か

河内長野市 坂上淳司

政治ショー誰が踊ってやるものか
虎のV踊る紙面が見たかった

薄切りの松茸泳ぐお吸物

ストープの上でするめが踊り出す

ナースコールばかりしている甘ったれ

ナースの手いつまで握っている積り

松山市 古手川 光

汚染米食わず商魂逞しい

犯人はニンマリしてる毒ギョーザ

祭り前ひと時稼ぐ提灯屋

少子化対策笛を吹いても踊らない

すぐキレル日本へおしん甦れ

耳底に故郷を発った日の汽笛

熊本県 岩切康子

気ばかりで何も勧めぬ老いの刻

その都度に字引に頼るマイ記憶

佳い虫が付いておくれと母の愛

留守宅へ伺った訳メモを置く

愛情を込めた野菜がよく育ち

ハンカチを首に結んで少し洒落

堺市 和田つづや

風が出る不安見透かすかのように

咳が出る嘘をつくなう間のつなぎ

雑草も鉢に咲いたら愛しい

失恋がよぎる木犀香るたび

玉葱に柚子ドレッシングマイブーム

酒たばこやめてとてつも日がながい

和歌山市 木本朱夏

ジーパンを脱いで秋には秋の彩

秋の天スリーサイズはひみつです

鉛筆の削りかすにも秋匂う

ふっくらと秋を奏でる栗ごはん

スクリーンに銀の雨降る名画館

トラの牙折れて身に沁む秋の冷え

寝屋川市 籠島恵子

昼の月見つけた小さい小さい指

約束どおりキリンの前にいる家族

B面を見つめてばかり揺れている

矢印が消えたあたりが現在地

回り道紫苑が咲いているらしい

何だかんだあるものですねお互に

大阪狭山市 矢野 梓

ノーベル賞暗いニュースを吹っ飛ばす

街の中一回りして燕去り

たった一言短いスピーチ受けている

小骨ない魚が好きになつて

ぎりぎりの消費期限の晩ご飯

物忘れなくさめ合ってお茶にする

八尾市 宮崎 シマ子

口答え過ぎたと思う母に詫び
熱いめの狐うどんが欲しくなる
結婚記念日もう飽いた六十回
すかっと叱られてすかっと前進
夫病むと別なる愛が生れてき
豊作で肩たたかれている案山子

東かがわ市 伊勢 八重子

白菊の香りも添えて父母の墓
主婦の座を預けて旅の風に酔う
発明は不便が生んだ宝物
不機嫌な気配へ知らん振りをする
人に慣れ水になじんで根を下ろす
最後には妻の意見が皆通る

愛知県 早川 遯行

携帯を持たぬ私は異邦人
ライバルは今も女に持てている
お医者には内緒のくすり呑んでいる
先生と呼ばれ階段蹴つまずき
人生のムダを楽しむ凡夫婦
幼な友からの電話に背伸びする

鳥取市 奥谷 彩子

今を良しと少し悟った喜寿傘寿
いい今を発酵させて冬囲い
温かな風往き来さす垣根越し

うれしい日ピッチあげてる缶ビール
ジェラシーをゆっくり溶かす丸い月
木枯らしに銀杏かさこそラプソディー

香芝市 大内 朝子

ああ余生沈む夕日のごと燃える
泣き虫の天狗の鼻は折れやすい
やさしさに会うとわたしのあかたれ
美しく老いてゆきたいなあ心
直筆の癖字にぬくいお人柄
カマキリの威嚇ぐらいにやまだ負けぬ

豊中市 水野 黒兎

大食いを競うテレビの飢餓ニュース
沸点がそれぞれ違う妻とほく
日めくりの薄さに気付く花すすき
常備薬持って仕上がる旅支度
思い出を詰めて家宝の安い壺
帰り花見つけひと息農作業

尼崎市 山田 耕治

タンバリン鳴らしホームのポランティア
何しても時間に幅のあるお方
おもちゃ屋はじいじばあばと行くところ
病院の予約キャンセルして旅行
わが服を買うにも妻についていく
銀行がつぶれたそうなへえさよか

大阪市 升成 好

方円に従う水が人を呑み
ジャンケンで決めて文句を言わせない
父の年越えて生きたらもうけもの
ピアノソ口余韻が帰路を歩かせる
ほのぼのとさせる話を手土産に
引くことにやつと氣付いた処世術

橿原市 居谷 真理子

鉄条網隠して夾竹桃笑う
もし下戸であれば知らない夜だった
日日葉静かに泣けるようになる
饒舌は独りの顔を見せぬため
口バクであなた好みの艶歌など
ケータイを掴んで沈む大都会

富田林市 中井 アキ

自分史に肩肘張った痕がある
笑うても泣いても影は付いて来る
満面の笑みでその場を切り抜ける
捨ててきた村へ螢を見に帰る
残された眼鏡かすかに亡夫匂う
賞味期限切れて美味しくなる私

河内長野市 山岡 富美子

おんなには曲線という武器がある
この角をまがって掛けるサンガラス
アメリカの不始末からの導火線

迂回路も後退もない砂時計
人生の喫水線で浮き沈み
家中の鏡も年を取って来た

吹田市 大谷 篤子

嬉しさにつられ優しい嘘をつく
お茶漬の奏でる音に疲れとれ
ぎりぎりの前期高齢ジム通い
遠い日を奏でるラムネ玉の色
薄味にプラスしてます生姜汁
丁寧な挨拶すこし胸騒ぎ

岸和田市 岩佐 ダン吉

腕を組むじんじん通うものがある
体当り僕に秘策はありません
環境を言うなら核を槍玉に
明日のことわからないから汗流す
働き詰めハローワークで空を見る
消費税クールな顔でアツプ論

砂川市 大橋 政良

弥陀の手を握って死ねる日のために
お互いに探りつづける妥協点
肚の底まで見通した目に負ける
石ころを試行錯誤の手で拾う
人情も義理も乾いた白い砂
反骨の牙を見えないように出す

箕面市 広島 巴子

クリスマスケーキ作って孫を待つ
とりあえず子にくつ下を贈るイブ
プレゼント欲しくてサンタ信じます
煙突が無くなりサンタ来なくなる
真青な空を曇らす人のエゴ
泥んこの芋掘り子等の声弾け

松江市 川本 畔

バランスを崩したシャツの中にいる
蟻は蟻今日はわたしの探しもの
再びはなくてわたしのグッドバイ
紐とおし紐はいやいや中座する
磨り硝子からの向こうは半病人
襖を開けていけないことを知っている

尼崎市 長浜 美籠

生きるってなんと起伏の多いこと
聞き役に回りほぐれた肩の凝り
もういいかい いいよと返らない砂場
どっこいしょ声が場所柄わすれている
切手一枚ころ遣いが憎らしい
集う輪にお国訛があたたかい

長岡京市 山田 葉子

生き残ったライバルと楽しく遊ぶ
足跡がきれいあなたを好きになる
日本語が通じないのにまだ夫婦

奏でるとわたしの愛が届きそう
奏でると脳のどこかが歌い出す
たおやかな美人奏でる音だろう

神戸市 木村 貴代子

古アニメ幼き吾子まだ傍に
我が空を侵して伸びるビル二つ
元気かと問われりゃNOと言えぬ母
おろかなる国民が持つ愚の政治
亡父さんのコビーを産むと嫁ぎゆき
三月ぶり会ったお人の名が出ない

竹原市 石原 淑子

CTに肺の温もりみてもらう
一言を吞んでまあるく嫁姑
君を恋う鶏頭赤く紅くもゆ
バーゲンであなた好みのお洒落して
唯一つ小さな夢を持ちつづけ
暗算も漢字も脳を脅かす

東かがわ市 川崎 ひかり

気配にも見せぬ女のかくし球
倅せは動く手足とうまい飯
一期一会ティッシュをくれたお兄さん
俺おれの電話を切って叱られる
淋しがり赤く群れ咲く彼岸花
ふと思うもし年金が止まつたら

シドニー 坂上 のり子

金融危機に大統領になる使命

あほやなあ騙しおおせる思つてる

自主回収した物次はどこへ行く

山のない国に流れる塩の川

加藤登紀子に憧れ習う弾き語り

平川市 小寺 花 峯

反対の手から意見が萌えてくる

影薄い男で4B勝負する

湯豆腐が欲しい欲しいと秋の風

闇からはい上がる日の接続詞

温泉宿右脳左脳は休暇中

黒石市 佐藤 古拙

遍路笠来し方の是非問いながら

七輪はおまえ秋刀魚はおれである

従順な妻が六法全書買う

この頃の天気予報は当るなあ

食欲の秋ふるいたつ総入れ歯

黒石市 相馬 一花

陽が照らぬ日もヒマワリは首もたげ

飲み過ぎて二次会に行く平泳ぎ

少年のハートを揺する波頭

失って初めて知った宝物

冷や飯をプラス思考で食っている

十和田市 阿部 進

あの世とこの世をつなぐ電話ほし

何故なのか自殺する人増えてます

嫁さんにしたいが少し綺麗すぎ

居酒屋で雨がやむまで飲んで居る

古里に大好きな人今も居る

弘前市 岡本 花匠

五線譜で鍛える脳と声量と

人の和を説くヒマワリの大合唱

会者定離つまりいた石宝とす

重陽へしがらみの貌菊見酒

波の花のご難にあえぐ五能線

弘前市 高瀬 霜石

信号が点滅してる 走らない

義理人情とつても切れやすい糸だ

ノルマ達成抱き合う蟻とキリギリス

空気読む人の空気は読まれてる

はたもちが落ちてくるのをじつと待つ

弘前市 福士 慕情

うしろから肩叩かれて知る計報

東京へ出て消息の絶えた友

小一の机並べてからの友

ひょうきんな顔だけ目から離れない

古希まじか孤独死という寒い部屋

弘前市 櫻庭順風

計報欄続々癌で逝くなんて
病院をたらい回しに泣く命
ヘルベスの痛みを癒すスチュウベン
神の呼ぶ声に目覚めるICU
そういえば旗日に旗の家がない

弘前市 須郷井蛙

巻物の家訓しっかり嫁に継ぐ
単身赴任いつも泣いてる夫婦著
テトラポッドしっかり守っている岬
お隣りの活気ポーナス出たらしい
家庭菜園生ゴミ堆肥実をつける

弘前市 今愁女

よもやトラ負け敵のデパート売り出しす
石油店破たんプリベカードが泣いている
また北にしてやられちゃう拉致家族
老老のあととは認認介護かも
ひと科にも絶滅の危惧なきにしも

さいたま市 八田敏

あまり無理するなど菊に労わられ
丹精もほどほどでよい菊作り
菊作り止めぬ浄土へ行くまでは
孫がもう甘えてくれぬ秋祭り
老人会終生の友ばかりなり

さいたま市 星野育子

壊れゆく日本列島誰救う
政界でいつまで続く七光り
年下の友の墓参をする羽目に
欲張って手に入れた本持て余す
生涯で今が一番言い聞かせ

東京都 岸野あやめ

アメリカの無茶が世界を掻き回す
脆いのはこの国だけと限らない
勞せずを得た金消えるのも早い
またしても家出したがる論吉様
祖母ちゃんが見守っている反抗期

東京都 清原悦子

携帯の電源切って除夜の鐘
ふる里で老後を過ごす第二幕
苗床の準備嬉しい春を待つ
温暖化案山子も空を見る日課
落日へ楽譜はいらぬ子守唄

武蔵野市 亀井円女

孫曾孫みんな翔んでる光ってる
男性の涙にきつと嘘はない
阪神よしっかりしなはれ根性やで
一つの道この顔一つでまっしぐら
我ながらあされるほどに欲がない

横浜市 菊地政勝

暴落の株たればの悔い残る
小包のすき間に母の愛を詰め
緊張を弛緩に変えてくれる酒
利害など意に介しないボランテニア
ほれ葉抱いて出掛ける趣味の会

横浜市 小野句多留

勝者でも敗者でもない自己査定
販売し限定がつき売り切れる
ないものはないから詐欺にかからない
温暖化対策ここも貧富の差
森光子喋る呂律が可哀そう

川崎市 三浦きぬ

狭いのも良いね四方に手が届き
これがまあ終の住家の六畳間
亡夫は征き子もなく老いて九十歳
生き様もそれぞれですな仏様
プランターのチンゲン菜の芽に和み

静岡県 田 嶺 杏

夕焼けの明日へ生きる嶽の影
間仕切りの向こうも旬の舌鼓
一番星仰いで帰るトラクター
札状が些細な事で届けられ
権威ある検査不信のドーピング

富山市 鳥 ひかる

一握の米で足りてる三分粥
オブラートに包んだ愛がまだ解けぬ
杖になり杖になられている旅路
越した山数え今年も十二月
走っても走らなくても十二月

可児市 板山 まみ子

出しおしみ日の目見られぬ宝物
使わないでも捨てられぬ古時計
酒煙草やらぬが金のかかる趣味
隠してたつもりはないがバレていた
飛びはねてボールを返すああテニス

犬山市 金子 美千代

天国へ単身赴任した夫
弔辞には子等の知らない父が居る
見守っているよと遺影笑いかけ
ありがとう天国へ出すラブレター
乗り越えるための涙かとめどなし

犬山市 関本 かつ子

日帰りに後部座席の賑やかさ
月末になると小銭が忙しい
のんびりと時計代わりに寺の鐘
聞く方も不安ナツメ口歌手の声
青空を舞う玉入れの赤と白

犬山市 吉田幸子

コマクサの一輪根っこも命がけ
食べちゃったきよめ餅まで汚染米
エコライフ女心の揺れる秋
五円出すなら持ち歩くエコバッグ
製造元確かめて買う知恵もらう

京都市 榎本宏子

来年の楽しい予定待つ手帳
腹八分気楽に生きるすべ覚え
死角にもつ温いところはさみしがり
ブランから仲間外れの雨男
早い安いおいしい嫁のちゃんこ鍋

京都市 坪井孝一

真心は心の芯で持っている
ライバルの表彰式に並んでる
一本気に育った友に疲れてる
プロポーズ声が小さく無視される
深夜ラジオ懐かしいジャズ寝かさない

亀岡市 井上森生

ふる里が戻った朱鷺が舞い降りた
グアム沖で産まれ遙々旅うなぎ(産卵地判明)
流す汗その分ボクは若返る
ジョギングとバソコンがある夢の日々
拝金を煽る世相は振り向かぬ

大阪市 榎本舞夢

没七十年彬ありきとサルスベリ
平凡な人といわれてうれしがり
上品に値切れば負けてくれません
麦畑二人の恋は今佳境
妻の留守へソクリ見つけ元に置く

大阪市 津守なぎさ

スイーツが大好物のメタボママ
走りたい親が出しやばる運動会
いのちがけ守った国はどこいった
汚染米と知らずに食べてまだ元氣
名札からお顔覚えた塔まつり

大阪市 奥村五月

秋夜長孤独が襲う隠居部屋
生きるには少し淋しい賞罰なし
鉛筆も削れぬ子等が持つナイフ
百均のメガネが当てた穴馬券
休耕田草ひく祖父の汗光る

大阪市 福岡末吉

意も新た喜寿を前にし習い事
ごま揃りも世過ぎの技と身勝手さ
来客中旦那を演じオイと呼ぶ
虚仮にされようやく気付く傲慢さ
これしきと取り組み悔いる癖抜けず

大阪市 渡部 さと美

眼科医で自分の目玉見せられる
後期高齢納得させる物わすれ
頑とした自信だったがふと揺れる
県二つまたぐ介護車十五万
どうしても眼がゆく揺れるイヤリング

大阪市 川端 一步

十傑にノーベル賞と蟹工船
許す気になればお酒が欲しくなり
いい仕事友がたくさん出来ました
彼の国は風邪ではないぞ重病だ
反骨の癒しは安い芋焼酎

大阪市 江島谷 勝弘

そんなことないと思うが医者に行く
負けたつてやつば好きやねんタイガース
あまりにも律儀な人に腹を立て
世知辛い敬老パスに金せびり
国のため翻弄される庶民です

大阪市 古今堂 蕉子

今日は居た居たと宅配便の人
孫台風上陸するぞお正月
立つ座るさえ腰に声かけてから
充電の日が増えました横になる
松茸の匂いも嗅がず秋すぎる

大阪市 井丸昌紀

ファッション誌真似て街中同じ顔
父の事語ると母は若返る
躰いたお蔭で見えるものがある
マニユアルに秘訣はわざと書いてない
孫の手が見つけれられずに踊り出す

大阪市 熊代 菜月

十二月埃も愚痴も持越して
雨傘でかくす嬉しい初デート
残り火を燃やせば明日が早く来る
遺言という名で書いた感謝状
紅白が良くも悪くもくぎりつけ

大阪市 松尾 柳右子

たまさかの帰郷うろろ空の旅
良い夢を見る最中起こされる
カラオケの持ち唄友に促され
同窓会東の間ですが若返る
衣替えポツケに去年顔を出す

大阪市 小泉 ひさ乃

さわやかな風に誘われ秋ひろう
いろいろとあり思いやりだけ残る
節くれた手が遠慮している握手
お人好しとも言われ鬼女とも言われ
温室で苦勞知らずの実が弾け

大阪市 原田 すみ子

幾重もの人の縁で生きている
しゃべり過ぎ自信のなさを物語る
あれあれと言葉が出ない電池切れ
上目指し三步進んで二歩下がる
動物病院上には上の愛犬家

大阪市 小糸 昭子

内緒事心の襷に隠してる
血と尿を採って向き合うコンピューター
広告は物の値下げを見て走り
一粒の雨が一瞬豪雨となる
紅葉の所々に黄が光る

大阪市 岡本 久峰

精鋭も老いて鼓膜にひびが入り
惜しまれて去るのも美学眠られよ
将校の自負つきまとう車椅子
行く先は告げず凍土に追いついて
初詣で夢みて散った戦友よ

大阪市 岩崎 公誠

千本の薔薇が笑うと騒がしい
掃除機をはたきで掃除して仕舞う
うろうろと生きて生命がちびてゆく
一分の黙祷年の差ない友へ
カレンダーあと一枚に悔いばかり

大阪市 鶴田 遠野

米寿の母いつも若いと誉めてやり
記念日のワイングラスは良く喋り
なみなみの小言呑み干すコップ酒
哀悼の心包んで出す袱紗
九州男児言い訳に呑むお酒

大阪市 谷口 義

十二月音声多重になっている
十二月別件逮捕されました
十二月祈祷料金一覧表
十二月身も蓋もない返事くる
なるようになって十二月が終る

大阪市 坂裕之

墓参り済んでおでんの美味しいこと
嘘つくと前頭葉が痒くなる
蟹がでて話一旦膳の下
また来てへほいほい行つて疎まれる
黄金の棚田に秋の日本あり

大阪市 神夏磯 典子

雨の温さ雨の冷たさ十二月
老いの税忘れまつたけ栗ごはん
頑張れガンバレと足を撫でている
許さねば私の癪りかたくなる
冬瓜は主張をしないから好きだ

大阪市 池上清治

白桃を食べてみのりの秋を知り
値上げせぬ馴染のパンが性に合い
銀行の名前近頃長すぎる
健康のためカルチャーは止めません
相談はしてもつまりは妻のまま

大阪市 津村志華子

碧い空とても逢いたい人が居る
生かされて頭打つたりよろけたり
不機嫌で刻んだ葱の数珠つなぎ
メールより電話の声が欲しいのに
コンビニの灯は少年の誘蛾灯

大阪市 小谷集一

切なさを知って大人になつて行く
経験をもたない人の理論好き
痛手から生きる力を学び取る
欠点が長所に変る時もある
子を谷へ落す覚悟がいる蟬

大阪市 川原章久

枯れ落ち葉みんなさよなら言うて散る
ゴミ袋見たら捨て猫寄つてくる
値下げ待ち夕餉が少し遅くなる
妻の手を引いて石段どっこいしょ
紙おむつパッドを変える妻の朝

大阪市 榎本日の出

幸せにしてくれそうな赤いバラ
ひと呼吸入れると話かわつてた
コンビニの素っ気ないのが当り前
私より老いてしまった影法師
言いわけは止める自分が播いた種

大阪市 田浦實

大の字になつてクマゼミ一人逝く
一人つきり三日もすれば怖くなり
妻入院仮死状態になる我が家
麦藁帽浜でぼつんと夏送る
どん底ならくもの糸でもつい掴む

大阪市 岩崎玲子

七草が秋の訪れ知らせませす
くずの香がほっと手足を伸ばさせる
ふじばかま川のほとりを賑やかし
なでしこに郷の情景かさね見る
萩の寺こころ休める風が吹く

大阪市 平嶋美智子

紅葉も乾いた葉づれ奏でて
夜行列車下りた浪速に惚れました
従つて来たのに詰めでそむかれる
今頃は元気な人の後につく
限界の暮し支えている元気

池田市 栗田久子

新春の予約ただ今神無月

舞う木の葉おそまきながら冬支度

すすめられ試食ついには買う羽目に

食欲をそそる響きで夜泣きそば

シクラメン置く一鉢のはなやかさ

和泉市 横山捷也

ルンロンと娘のお下りを妻が着る

白寿逝く長寿の秘訣聞けぬまま

後悔はするけど忘れてしまう癖

写経はしても煩惱は捨て切れず

うれしくもさみしくもあり古希の膳

和泉市 西岡洛醉

秒針が明るく進む花時計

孫の手が満月拝む愛らしさ

百均の花でも明るい四帖半

山道で出合う地蔵に罪を詫び

不機嫌な妻の背中に闇が有り

泉佐野市 山本蛙城

育つまで待てとポリープ検査後に

米食に戻る矢先のメラミン禍

ベランダでちよいとエコです緑化です

火遊びもあつた懺悔の丸い石

痴呆初期かもな薬を日分けして

茨木市 藤井正雄

菊の鉢ほめてセールス入り込む

明日の糧充電中と屋台酒

里帰り森のみどりへ濡れに行く

昼寝ではない寝転んでいる思案

磨かれた腕が妥協を許さない

交野市 山川日出子

お見事日本四氏がノーベル賞

老いて未だ探す四つ葉のクローバー

山寺の蛙和尚とお経読む

ワンピースが漢字オンチを増やしてる

孫来るとスキンシップは腕相撲

交野市 森本弘風

タイガース勝ったテレビは何度でも

銭食いの大砲並べビールかけ

株暴落亭主の威厳引きおろす

日本去りアメリカで生きノーベル賞

寒露にも蛇が出てくる温暖化

河内長野市 村上直樹

さり気なく赤を着込んで払う老い

負けて勝つ秘訣は妻に通じない

年金を切り刻ませる物価高

金運にかえてたつぷり人の運

満ちたりていたと閻魔に言えるよう

河内長野市 井上喜醉

どん底で仮面を剥がす怖い株

割り勘でざつくばらんな友でいる

人間の賞味期限ある健保

夕顔がぱつと咲き出す秋の宵

意気地ない虎でファンもあきれはて

河内長野市 植村喜代

半年の疲れ九月と共に出る

台風を遊ばせている秋の空

松茸が出たと聞いても手が出ない

八十路祝い嬉しいやら淋しいやら

可愛いね歯のない口で孫笑い

河内長野市 水谷正子

耳穴へ飛び込んでくる彼岸の蚊

曼珠沙華燃えつきた後見ない事

歳を聞き十間違えて稲光り

ほちほちと各駅停車で呆けがくる

要介護2で風呂上り足の爪

岸和田市 原 さよ子

健康がいいギリギリの生活でも

薬飲む日に三回のがい顔(夫大腸手術 2句)

孫に手を引かれて散歩回復期

あきらめに似た満足で老夫婦

娘の自由母の自由と折り合わず

岸和田市 土橋房枝

叱られて愛されてたと分かる今

持病からいつもブレイキかけられる

暑さに負けたそうよクーラーに負けたの

いつも満タンそんな人生あれへんと

がちがちの脳をやわらげ古希の恋

岸和田市 井伊東吉

理に合わぬマネーゲームの尻拭い

解散の風向き変えた世界不況

演技せぬ独り芝居の拳が逝く

投手力不安の中タイガース

みそ汁が減法旨い頃となる

岸和田市 林 力子

衣食住足りて挨拶出来ぬ娘等

おはようと大声で呼ぶ今日の幸

なにわ人赤字言いつつ儲けてる

母さんの帯も着物も食べました

トンネルを抜けて活気の出た職場

岸和田市 雪本珠子

ときめきを忘れず老いと向い合う

秋風が今年も木木を染めてゆく

ボキャブラリー乏しくなって黄昏れる

プラスマイナスゼロで終焉迎えたい

空を見て心の視力取り戻す

岸和田市 米 富 淳 風

衣替え一人楽しむファッションシヨ

着ないまま古巣に戻す夏の服

秋の蚊が忍者の如く刺しに来る

ダイエツトなのに栗茹で芋蒸かし

萩津和野いきいき鯉がお出迎え

岸和田市 堤 檣 代

若い人まねてコーヒは砂糖ぬき

年金が支え安心して生きる

ゆっくりと歩いて見えるものがある

もう出来ぬ正座に今はあこがれる

あせらないあせる自分に言いきかす

岸和田市 森 元 ふみよ

老いて尚秋の夜長の想夫恋

天高くメタボ気になる旬の味

底無しのメラミン汚染何時終る

政治屋に賞味期限の提案を

画面より馬鹿さ加減をひけらかす

堺市 奥 時 雄

おっかささん小声で呼んだ茜雲

石庭は教えられればそう見える

天井を見て待つランジェリー売り場

ワンテンポずれて向き合うジャズダンス

寝酒よりお薬よりも本が効き

堺市 山 本 半 銭

くもり空押し上げる気の鼓笛隊

緋毛氈ほどの広がり曼珠沙華

秋深く一人の贅に虫すだく

濡れ小豆あるだけ食べて夜が更ける

五線譜にして御詠歌も親しまれ

堺市 柿 花 和 夫

勝ち組の秘訣本屋でいばつてる

ひらがなの相槌そつと棘を抜く

スクラムのまん中あたり乱気流

現在地通天閣に問うてみる

手品師の帽子の中の小宇宙

堺市 村 上 玄 也

十二月年々早くやってくる

DMでも来ぬ日は淋しがるポスト

付き合ってみたらしつこい奴と知り

ほっちゃんの総理に飽きてない日本

道ならぬ恋に憧れてる初老

堺市 源 田 八 千 代

運動会のメイン五歳の鼓笛隊

老いて子に従いもせず世話かけず

お互いのプラスの面に目を向ける

指示通り偽装謀ったまでのこと

皆捨てて余生すつきり送りたい

堺市 志田 千代

四條畷市 吉岡 修

捨てられぬ夫の蔵書妻の服
お財布も切符も妻が持つて旅
奥様が選んでくれるバイキング
家族葬遺影が淋しがっている
新聞を元通りにはたためない

堺市 近藤 豊子

安全な栗の実木の実里の秋
あかまんま摘みにくる子をまちぼうけ
むらさきに熟れてゆく実のなつかしさ
彼岸花稲穂のかげで立話
明日香風棚田のなかを吹いてくる

堺市 齋藤 さくら

体力と気力で夏を越えられた
八ヶ月今にも歩きそうな孫
ないないと父の電話は忙しない
食べるにも体力いるねお母さん
ノーベル賞にわく日本はまだ平和

堺市 宮本 かりん

思い出の端々霧がかかり出す
傷口に触れて空気が白け出し
乗り越えた年を語っている樹幹
ばあちゃんの話終わって欠伸され
諦める事がだんだん多くなり

転んでは起きてここまで来た一途
海へ来るとくにの匂いに包まれる
ポリウムを絞ると忍び声笑う
転ぶまで突っ走つてるまだ若い
後ろからくるサングラス気味悪い

吹田市 山本 希久子

改札口すれ違ったのは真冬
変身願望でにをはを替えてみる
みんな私の身から出た錆あきらめる
運ない日訪ねる先は留守ばかり
からだ動かして落そう脳の錆

吹田市 須磨 活恵

天高く阿修羅のごとく曼珠沙華
自信過剰女が嵌まる水たまり
影法師君も私もうすつべら
傷口へ一ノ矢二ノ矢容赦なく
古い二人互いに元気へらず口

吹田市 瀬戸 まさ代

顔の皺心の皺に負けます
散髪の済んだ庭木に秋の風
公園に子の多い下町が好きだ
無関心よそおうカルチャー波立たず
汚染から産地直送大流行り

吹田市 野下之男

大臣のくちびる寒し昨日今日

師の恩がかすんで見える昨日今日

売ったならば野となれ山となれ

入れ歯にも礼を言いたい御馳走だ

マドンナが真ん中に居る同窓会

吹田市 太田 昭

決断の前にベルトを締め直す

仕返しをする子の爪を研いでやる

河岸を変え野暮な話を丸く聞く

取り敢えず手を挙げうしろ振り返る

マニキュアの途中女房は居留守する

吹田市 木下 敏子

天も地もすっかりしなと秋の冷え

頼られて老いてはおれぬ靴を履く

目も耳もばちくりさせて老い避ける

浅学を助けてくれる電子辞書

幸せが溢れていますしサイズ

吹田市 穴 吹 尚 士

遠い子に想いを馳せる秋の夜

熱いお茶入れましょうかと秋の夜

しようもないテレビは消した秋の夜

焼き芋の触れ声ひびく秋の夜

猫の仔に胡坐を貸した秋の夜

高槻市 指 宿 千 枝 子

合併で銀行の名が長たらし

だんまりでATMの列にいる

ATM背中に一つ目が欲しい

キリギリス スケッチしてる小半時

モンタンの歌とワインで秋夜長

高槻市 傍 島 克 治

ふる里が大坂なんでつまらない

三千歩以上は知らぬ万歩計

あの一言がいついつまでも悔まれる

塗り替えられた常識の世に生かされる

目撃者なき古代史に湧く疑問

高槻市 西 谷 治 三 郎

かあちゃんと呼んでる妻が頼りです

一歩ずつ杖が頼りの八十路

きのうきょうなぜ一日で値が上がる

消費税上げる能しかない政府

コンビニの食品ほとんど外国製

高槻市 井 上 照 子

ゆとりある教育の実は実らない

食物の不安その上物価高

シヨッピング疑いの目で品をみる

日記書く何度辞典を繰ることか

議員さんやじれば値打ち落ちますよ

高槻市 杉本義昭

陰謀が渦巻く世から神も逃げ
人を見る目にも眼鏡のいる時代
準備した言葉が出ない好きな人
笹舟で届けてみたい恋ひとつ
逢うたびにきれいになっていくわたし

高槻市 安田忠子

彼岸花いっぱい咲いて夫恋し
友が逝きたたつぷり泣いた風呂呂の中
雨雲を人工消雨した北京
ついに来たメタミドホスの汚染テロ
五輪以後中国更に怖くなり

高槻市 執行稲子

理由など黙秘で通す御前様
老いの足クイッククイック儘ならず
わたくしの出来そうな旅拾わねば
カットして貰う人の心を覗く癖
案外に見た目と違う得な人

高槻市 峯村勲弘

軽量化薨の波も消えて行く
熊出没リハーサルする死んだふり
フルムーン心を癒す野天風呂
老い二人至福の宴夕御膳
嬉しがらせ泣かせて消えた株価格

高槻市 佐甲昭二

遠い日の思い出拾う無人駅
母さんがはつらつと行く参観日
雑学に酔って辞典を買いかえる
あいまいな返事にこもる思いやり
望郷のレールまっすぐ伸びている

高槻市 富田美義

燃え尽きた男静かに庭手入れ
靴減りが急に増えたよ二度の職
プチ整形うまく行き過ぎ敵あまた
はつらつと生きてほっくり逝きたいな
プラス思考勝手な時の処世術

高槻市 生田義一

大正つ子ロマン時々目を覚ます
老い二人愚痴も若さの刺激剤
七転び病に勝って明日も生き
久々に聴いたラジオの子守唄
閑僚は二世三世花盛り

豊中市 藤井則彦

早足で時間節約しています
ケータイがルーズにさせる待ち合わせ
静けさに時空を超えた能舞台
銀行の知恵が詰まった遺言書
おじいちゃんテレビの音が大きいよ

豊中市 坂上高栄

ホホホウ皆来て食べよ村雀

吊し柿諸行無常の味がする

天高し海に国籍不明船

路地裏にいずれ劣らぬ菊花展

新米の匂い家中満ちている

豊中市 江見見清

真四角は窮屈長四角でいる

九割は妻に反省して終り

ひとりぼち角もてあますカプトムシ

するすると運が股下すりぬける

それほどでもないが両手で握手され

豊中市 山門タミ

八十路過ぎ食欲だけは元気です

急な冷えスボラな主婦をあわてさせ

祭り嘶運んで欲しい千の風

まだ生きる積りでメガネ買い替えた

名月はするどいまでに胸をさす

富田林市 稲川惠勇

おい電話はあーいトイレや聞いとい

ケータイの首輪で放し飼いにする

お財布を素知らぬ顔で拾い上げ

雲行きが怪しくなつて席立てず

父の歳越えて遺影へ手を合わす

富田林市 片岡智恵子

首位の座を譲らぬ怖いのは地震

老いてなお七難隠す良い笑顔

失言に野党は次の的ができ

衣替え白髪も染めてとんでみる

ダイエツトおふくろの味うけている

富田林市 大橋鐘造

一言の情けに解けるもつれ糸

忠告の言葉の端にある情け

頂点に針の筵が敷いてある

根回しを忘れた今日の風当り

生きるため少しの欲は残しとく

寝屋川市 富山ルイ子

ある時払い催促なしの申し込み

改装に予算オーバーする悩み

秘密です忌中済むまで内緒です

おかざりになった携帯あくびする

車椅子寝た切りの友案じられ

寝屋川市 森茜

たしなみと言う日本のいい言葉

題目が途切れる舟を漕いででは

おほかない足もとまといつく子猫

何ごとも普通がいいなエチケツト

大相撲あくびの紳士映される

寝屋川市 太田 とし子

腰曲げて主張は曲げぬ俺が春

還暦だ古稀だと騒ぐ娘たち

一家団欒白髪頭を突き合せ

大人三人ペットいるから声が出る

ゆつくりと歩きみつけた犬の糞

寝屋川市 森田 麗

二ヶ所から栗の実届き腫鞘炎

ついでにと豚マン五つ頼まれる

リハビリのオカリナ明日を奏でて

お隣の金木犀を掃いている

涙目と鼻声にもう騙されぬ

寝屋川市 平松 かすみ

店頭のバナナが消えるダイエツト

粗食して高い税金払います

入れ歯とは言うが外してばかりなり

記念日に入れ歯忘れて行く傘寿

私には無用の物が多すぎる

羽曳野市 徳山 みつこ

金木犀家をまるごと甘くする

無印のわたし偽ブランドで飾る

人里へ熊が直訴にあらわれる

限界集落とっこい情け生きている

農水省毒で国民鍛える気

羽曳野市 安芸田 泰子

背伸びした疲れを溜める土踏まず

にこやかな握手が拾う票の数

三猿を守りストレス溜めている

一徹を通し世間を狭く生き

暖衣飽食辛抱の字が溷れて行く

羽曳野市 永田 章司

デパートは腰痛の老妻よく歩く

抜き打ちの検査はまずいボロがでる

男同士の親子飲み会女房妬く

お百度にプラス一回手を合す

満ち足りた心になれぬ便利な世

羽曳野市 吉村 久仁雄

善い人にされて冴えないオヤジギャグ

ミニトマト充実感に燃える赤

人間を知らず弥勒に憧れる

たて笛で奏でた淡い里の恋

メヂカラの強さで値切る妻を連れ

羽曳野市 酒井 一壺

せめてもの情け知らない振りをする

ありがとうせめて一言言つて欲し

まっすぐに帰りたい日もあつた

好き嫌い言える生活ぜいたくだ

成績はともかくとして元気なら

東大阪市 佐々木 満 作

八月の日めくり汗が染みている
万難を排して参加する祭り
歯ブラシに虫歯退治を頼んでる
沸沸と湯気が奏でるおでん鍋
落ち込まずプラス思考で先を読む

東大阪市 久 米 奈良子

労りの言葉行き交う老介護
やわ肌を見せる人なく年重ね
八十の夢は二十の野に遊ぶ
胃カメラをのむ羽目となる秋の風
ケアマネに判ってもらう主義主張

東大阪市 北 村 賢 子

どの顔も初心忘れる永田町
今父母は墓に居ますか彼岸花
嫁ぐ日へいよいよ父の無言劇
悲しみはもう沢山やケセラセラ
切りたくても情けが邪魔をする緑

東大阪市 米 田 水 昇

良薬は口に甘しという時代
声かすか別れを告げて蚊が落ちる
坂の上昇って青空我がものに
夫婦坂今は一人の峠道
秋蛭源氏の君の霊を呼ぶ

東大阪市 笠 井 欣 子

秋晴れにお医者二軒もうろうろと
誘われた旅で財布も背伸びする
ゆっくりと訳聞いてやる父の顔
カルチャーの帰りまってる解凍魚
肩叩きついでに背中搔かされる

東大阪市 安 永 春

気まま者同士の二人三脚だ
ポンコツになって楽しい坂降りる
ゆらいでも家族の絆宝もの
過疎地帯シルバー達で助け合い
電池切れケイタイ欠伸ばかりする

枚方市 森 本 節 子

喜んでいいかわるいか介護さられ
はからずも亡き姉の句に出遇った日(十月号P2)
ムカゴ飯頬ばる向うは秋の空
植木鉢重すぎたのか肩痛め
忘年会の知らせを受けて元氣出る

枚方市 伊 達 郁 夫

嘘ひとつ大人の童話幕が開く
その時に誰の名呼ぶか思案中
ここからは予定外です気楽です
卓袱台に干物の形して座る
封切るところころ笑い声漏れる

枚方市 安達 忠央

世渡りへ義理はすっぱりきりつめる

物の無い時代に育ち捨て切れず

あきらめず妻醒めるまで護る日

マイナスをATMに教えられ

大口へ貸し中小は洩られる

枚方市 海老池 洋

惚けてない秋の七草みな言える

飛鳥散策巨石に謎をかけられる

生き甲斐に自家菜園の茄子胡瓜

覗いたら鬼が映っている鏡

おくびにも出さぬが鬼を飼う美人

枚方市 寺川 弘一

古希がきて恋の免疫まだ出来ぬ

ひとつしかない命だとわかっている

忙しいとは誰も言わない老人会

遺書を書く少し早いと思うけど

ささやかな生き甲斐赤い羽根を買う

枚方市 小林 わこ

太陽に愛され甘くなりました

果てしなく人生模様綴るうた

一度くらい猫なで声が出せたなら

優先座席美脚を見せる若い娘ら

ご近所のお付き合ひには車間距離

枚方市 二宮 山久

ラッシュ時美人の隣席があき

メタボにはなりたくないと言ふ歩計

不景気へバーゲンチラシあさる妻

秋風が吹いてながめる夜半の月

運動会孫は娘を越えている

枚方市 丹後屋 肇

スタイルに見惚れて睨み付けられる

幸せを演じて見せるクラス会

球場を埋めずめて一人幕を引く

同盟の裏切りに合う拉致家族

衣替えしてから風邪にたたられる

藤井寺市 太田 扶美代

予感みな外れポツンと佇っている

玉手箱わたしを少し踊らせた

笑い袋に涙を入れたのは誰あれ

そこまでは考えてない安請合

老いの知恵危うきものを察知する

藤井寺市 若松 雅枝

古日記手繰れば優し母の顔

古い二人孫へのメール四苦八苦

礼状を置いて嫁いだ娘にも孫

社会人になったと孫が来てくれる

土産よりたくさん弾むお小遣い

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

八尾市 生嶋 ますみ

若い日の顔が鏡に映らない
妻の掌で安らぐ振りのうまいひと
猫の子が家来で強気にもなれず
焼いもの温さがほしい秋の末
人間だものとみつをは論してる

箕面市 出口 セツ子

八尾市 吉村 一風

初勤め男の顔になってくる
親の愚痴聞いて気づかう子が二人
我慢強いから心配なお兄ちゃん
ちゃんと食べてますか元気にしてますか
子が幸せならば嬉しくなってくる

守口市 井上 桂作

大阪府 米澤 俣子

汚染米崇りなしとて焼き捨てる
なさけなや孝という字が死語となり
千の風聞けば聞くほど勇氣が出
真夏日の公園飾るさるすべり
善悪の区別あやしい人が増え

八尾市 村上 ミツ子

大阪府 桑田 ゆきの

台風逸れて喜んでるのみみつです
知らぬ間に事故米食べたかもしれぬ
ふところの寒さも加速する秋だ
自然の中へわたしの心解き放つ
あかんべいをする空つばの引き出し

成人し孫がすっかり寄りつかぬ
読書して心に少し肉がつき
草ひいて菊をたのしむ土いじり
内視鏡の審判おりて秋日和
一日が幸せだった手を合わす

善人にされ善人が続かない
よきライバル持てた幸せ噛みしめる
紙コップ軽く企み聞かされる
運のある手相と言われ握りしめ
生きざまを時どき妻に聞いてみる

ワンスモアチャンスだ好機高齢者
歳相応の望みは今も持っている
レトロ調などと流行遅れです
のっけから解っていたと強がり屋
ブランドのラベル剥がせば只の顔

菊焚いて心の塵も絞り出す
散骨にエレジー奏で沖へ出る
風呂敷の穴から宇宙覗いてる
寝て起きて健脳体操余念なし
汚染米寄せ付けぬ意地自家の米

大阪府 野田 栄呼

多忙癖手持無沙汰な休刊日

リハビリの効果失う野良仕事

お荷物にならねばよしと喜寿元氣

国民に節約せよと物価高

弁当のおかずが家庭のぞかせる

大阪府 澤田 和重

母だけが論してくれた有頂天

躓いて骨に脆さを教えられ

老骨です強く抱くのは止めといて

それとなく弱音を吐いた独り言

強がりを言うてはいるが泣き上戸

大阪府 初山 隆盛

ふるさとにわたしを生んだ朝ぼらけ

純愛は演歌の中に生きている

宗右衛門町抜けて歩幅の速くなり

泥んこで遊ぶと叱るママが居り

一つのいのち突如と切れる乾電池

神戸市 伊勢田 毅

日めくりの格言を見て計樹てる

見通しが甘いと嫁が釘をさす

株安に底はまだだと向こう見ず

遊ぶ夢ためて病んでる妻の愚痴

ざりざりの票読み参謀眠られぬ

神戸市 山口 美穂

値上り分腹八分目に減らそうか

食欲に負けて後悔あるメタボ

歳相応それでよかつた骨密度

一日一回捻子巻いてます腕時計

ワンテンポおくれ駄洒落と理解する

神戸市 山田 婦美子

駆けてくる蹄音奏でる馬頭琴

三寸が一尺になる釣天狗

ざりざりの暮しに慣れた妻の味

ぐつ悪くなると話題をかえる口

都合よい事だけ聞ける耳を持ち

神戸市 田中 章子

失って得るもののある有難さ

本当のことも言えずに民主主義

コスモスは従うよううで従わぬ

陽性が良いとは限らない検査

テレパシーあるんだ友が電話くれ

神戸市 山口 光久

慌てるとちりめんじゃこの骨刺さる

湯煙に眉間の皺がとけてゆく

分水嶺ペンとバットが聞き合う

貧乏神お呼びですかと押しかける

団地の孫ハエ一匹に大騒ぎ

相生市 中塚 礎石

尼崎市 林 昭三

土掘れば時代を刻む埴輪像

夕映えに抱かれた港口マン追う

つまりいた石に野心を叱られる

年輪が変身させた好々爺

脇道にそれると妻の鈴が鳴る

芦屋市 黒田 能子

ほっといてくれる自由が有難い

さつちりと曲がりたいたからバツクする

話さずに笑顔だけでも通じ合う

内緒ごと噂の風に乗りたがる

言いわけの勝手ばかりの筆無精

尼崎市 春城 年代

さるすべり何も言わずに散りました

斎場のあつけらかんとそっけない

片棒をかついでくれた六十余年

ひとり寝をからかうように秋の雷

気兼ねなく演歌聞いている仏の前

尼崎市 加川 靖鬼

蓮の葉にダイヤが一つ乗っている

飼主に鯰も似てるなど思い

甚平を羽織った鯨が泳いでる

おおマイゴッド気軽く神が呼出され

小春日和うっかり蝶が飛んでいる

済まぬこと月命日の花忘れ

永田町泳ぎ上手が逮捕され

聞かなくてよい事までも聞きたがり

びしょ濡れで帰り着いたら雨が止み

飯を炊き食べて生きてる大仕事

尼崎市 軸丸 勝巳

気温差に日替りメニユー要るタンス

暦より秋は短し早や紅葉

神有月出雲の旅をガイド褒め

暗い世にノーベル賞という明かり

持たぬから気楽に覗く株価値欄

伊丹市 山崎 君子

宅急便新米茗荷秋のせて

温もりを残してくれた電話口

敬老会同じ袋とすれちがう

山の宿月のせている露天風呂

月下美人ひと夜の夢を楽しんで

川西市 米原 雪子

大雨で乱入して来た川の水

いたずらを許してしまう児の笑顔

乱暴な言葉だけれど温かい

脳トレに励まされてははまってる

曾孫増え覚え切れない誕生日

川西市 西内 朋月

喝采を浴びて自分を見失う

アルバムに在りし日惚ぶ人ひとり

惚ぶ酒陽気な酒にギャチャエンジ

片想い少年が吹くハーモニカ

月光がまるで二人のセレナーデ

三田市 久保田 千代

レシピには私の愛をプラスする

薄味にならされていく夫の舌

へし折ってやりたい天狗の鼻がある

助かった命流れに逆らわず

前途ある身へ寛大な処置があり

三田市 堀 正和

紅葉へシニアも燥ぐ露天風呂

安値には安い理由がちゃんとある

治らない裁判官の値切るクセ

マイペース少し弱気になつていく

風船を飛ばす平和な甲子園

三田市 石原 歳子

珍しく昼寝返上句集読む

ふたありで秋の夜長を栗の皮

留守電へ話すのは苦手です

予約して買った食パン食べ過ぎる

夕暮れの道に迷つて一万歩

三田市 白井 二英

流行はまず追つてない頑固者

地球上いつもどこかで小競りあい

神様は人科の勝手許さない

乗り心地たぶん分からん霊柩車

青雲を取り込むように深呼吸

三田市 上垣 キヨミ

誕生日亡母に感謝のお線香

うどん屋の匂いに足がもつれ出す

日章旗洗つて願う世の平和

年寄りには早寝遅起き赦される

孫娘胸揺れる日の遠からず

西宮市 菊池 トミエ

暦剥ぐ夏の疲れを剥ぐように

噴水の虹にしばしの憩いのせ

自我通す人と出会つた日の疲れ

千枚田真赤に燃えるまんじゅしゃげ

古寺に優雅に咲いた酔ふよう

西宮市 緒方 美津子

植木市今年買います実むらさき

はふはふはふ鬼の居ぬ間のつまみ食い

サブプライムローンって何 茄子焼く

歴史書を繕いてみる秋夜長

マイカーは飾っています原油高

西宮市 藤 本 直

人刺した言葉の棘が疼いてる
思い切り伸びして骨のきしむ音
子の悩みだんだん親は汲みとれず
煩惱は人が言うほど枯れもせず
蛇口から冷たい水が冬を告げ

西宮市 亀 岡 哲 子

知らんぷりしているとチャンスそつと来る
遊ばねばならぬ私を磨くため
亡き父母へ土産入れたい頭陀袋
空瓶へ偲ぶ手づくりジャムの味
草刈って消えた芒野月淡し

西宮市 秋 元 てる

母卒寿にもかかわらず旅プラン
ふんだんに時間あるのに焦る日々
介護審査芝居苦手を励まされ
勝手知ったつもりの街の変わりよう
逝った子の椅子そのままに冬近し

西宮市 山 本 義 子

夕焼けがすくと落ちて秋深む
無精者にしつかりおしと秋の風
秋の雨静かに止んで電話鳴る
秋の夜はシャンプー念を入れてます
人生の秋もう減量は無用です

西宮市 井 上 松 煙

杖を曳き趣味楽しみにゆく命
病人に手術をするか決めさせる
始末屋で通しどかんと寄付もする
大國も金融危機にエゴひそめ
小遣を自由にさせてくれぬ妻

西宮市 牧 淵 富 喜 子

長電話果ててちよつぱり嫁の愚痴
こほれ種色あざやかな花つける
球場跡地へ不沈空母の如きビル
白い月輝き出した帰り道
ノーベル賞少しスランプ忘れさせ

西脇市 七 反 田 順 子

盛り上げてぎりぎりの線見せている
まっとうにスランプ消した赤い靴
生きざまをさらすと勇氣湧いてくる
いよいよの時は気風の良さを見せ
ノーベル賞明るいニュースかけ抜ける

姫路市 古 川 奮 水

ヴァイオリンを弾く三歳の初舞台
父母の回向他人扱いされた里
血糖値忘れてまつり慰労会
酌にきた猫撫で声に身構える
頂点が吐いた言葉で風が起つ

奈良市 天正千梢

ああ日本これでいいのか皆の衆
笑うたら癌が消えると落語医者
企業戦士夕べに汗をしばってる
揺れている自分にも目が離せない
産卵の蛙の姿に教えられ

奈良市 米田恭昌

タクト振る妻いてこそそのアットホーム
エコマークおでこに貼って二度の縁
雨男の顔をたててか帰路は雨
九条がもしももしもの防波堤
独走の虎勝ち逃がし幕を閉じ

生駒市 飛永ふりこ

喉仏ほめてもらってこそばゆい
知っても知らんふりする思いやり
寝顔みてふつといとしさ夫婦なり
葉げいとう揺れてざわめく恋ごころ
いい笑顔溺愛された透明さ

大和郡山市 坊農柳弘

腑に落ちぬ火種を抱いて酒の席
知ったかぶり語るに落ちる講釈師
言い勝って心に深い孤独感
そこそこの泡で生ビールが喋る
少しずつ煩惱削りながら生き

奈良県 渡辺富子

ノーベル賞一気に日本湧き上がる
派遣あぶれ今夜もすするカップ麺
どの窓も幸せ弾む灯がともる
君の背を信じて入る深い森
修正のできぬセリフを吐いている

和歌山市 武本碧

医者通い安近短で恙ない
別にとは味もそつ気もない返事
不参加の丸にもあつた深い訳
口金を外すと溢れ出る本音
ファッションのお下りらしい田の案山子

和歌山市 堀畑靖子

エネルギーシユな友が私を弾ませる
これもエコ暗いニュースは切るテレビ
ナイトクリーム多めにつける秋の肌
いままでも何とか生きてきた強み
鬱の世をだから楽しむことにする

和歌山市 松尾和香

命延び暮し奏でる風の音
トントんと母の奏でる台所
子に従う暮し楽しい趣味の道
ぎりぎりど軋む人生亡夫偲ぶ
税金は先に引かれる生活費

和歌山市 宮本三喜夫

新総裁期待してます国民が
総裁よ途中投げ捨て止めましよう
月刊誌休刊次々に消えてます
汚染米自分で墓穴掘りました
母親が息子殺めている不運

和歌山市 上地登美代

精一杯生きた証の日記帖
ハードルを五ミリ上げると蹴躓く
美しい日本の音色にござりだす
鼻折れているのに気付かない天狗
柿の実の色付く秋をまるかじり

和歌山市 喜田准一

限界と見せて引かない二枚腰
冷静な自分とカッカする自分
手ぐすねを引いて待ってる鍋奉行
雷が鳴ったら止んだ妻の愚痴
もう次がないから賭けてみる勝負

和歌山市 玉置当代

売り切れが続くバナナのダイエツト
検査結果ころざわざわ乱れだす
あなたとは違うんですと言うピンチ
おしゃれして秋晴れの街闊歩する
ジーンズの穴が気になる戦中派

和歌山市 田中みね

志す道へ追い風むかい風
毎日のおかずにも悩むのも平和
最悪を覚悟で医者の方を叩く
物臭に加齢とやらの仲間入り
大物と言うには腰が高すぎる

和歌山市 松原寿子

逢えそうな予感奏でる雨の音
几帳面なお方と組んだ打ち合わせ
余裕などないまま日々を切り抜ける
回覧板一泊させてお隣りへ
許す目に気配りを見て愛を知り

和歌山市 福本英子

百均の傘はなかなか無くならぬ
善悪を包んで馨る金木犀
ちよつと贅沢老眼鏡を買ひ替える
秋日和菓一いろ増えました
面映ゆい席で花束ありがとう

海南市 堂上泰女

誉めてくれと言わんばかりの電話くる
四季咲きのバラの情熱持っている
まっ先に子へメールする良いニュース
入院時赤飯が出たお正月
騙されて知らずに食べている毒素

鳥取市 中村 金祥

相棒が地雷踏んでも知らんぶり
どこからが後期高齢アブラゼミ
辞任した人へ花束などいらぬ
神無月忍者みたいな蚊に刺され
ちやぶ台をひっくり返す夢を見た

鳥取市 福田 登美

お若いと言われてそつと背を伸ばす
女ひとり疑心暗鬼になる日暮れ
深入りはしないされないおつき合
貧しさも笑顔で耐える外はない
明日のこと解らぬままに爪を切る

鳥取市 土橋 睦子

記事よりもチラシが重い十二月
筋書きの通りに進む葬の列
寝たきりの姑に相槌打っている
どたばたといつも喜劇の中に居る
里土産うちの名物栃羊かん

鳥取市 土橋 はるお

天空に時には語り掛けてみる
西方は色鮮かに夕暮れる
変な気を果物ナイフでも起こす
お隣が僕を誉めてるクシャミだな
勿体ない山ふところにある心

鳥取市 夏目 一粹

お値段の付いてる亀の目が赤い
輪の外に出るとたつぷりあるドラマ
誰と話しているのかな独りごと
お湯割りと虫の音色に酔っている
来るもよし去るもよし秋蝶の舞

鳥取市 福西 茶子

百均の皿がグラグラ落着かぬ
欲論す僧の説法身に付かぬ
バーゲンの服着ぬままに衣替え
老人会まっ赤な服はわたしだけ
芋団子食べて名月虫の声

鳥取市 平尾 菜美

朝一番めざめ命を確かめる
生かされて命洗濯かかりきり
犬掻きの先に命的が見え
踏まれたら這って命の麦になる
燃えつきた命火ほだ木懐に

鳥取市 加藤 茶人

親離れいいえ子離れまだ出来ず
外面が良い分妻や子を泣かせ
猥談が出来て主役の座を占める
手を抜いた結果表わす棒グラフ
振り込めに疑い持たぬ親心

鳥取市 武田帆雀

メ切りのペンを遅らす祭り笛
辞書を引く五倍レンズが草臥れる
ある時は鬼ある時は道化者
冗談に本音を入れてくる敵意
お惚けの酒がすり寄る下心

鳥取市 宮脇道子

「でれすけ」は幼き頃に聞いた声
大食い会もつたいないと涙出る
同じ愚痴会う度ごとにこぼす老い
通販は無駄が多いと知って買う
寂しさにすっぱり浸り足伸ばす

鳥取市 植田一京

私のオアシス街の喫茶店
童謡を歌い過ぎし日思い出す
カラフルな街で少々落ち着けず
わが歳に今更びつくりして居ます
夕暮れの秋人生を振り返り

鳥取市 岩崎みさ江

羽化をする夢を抱いて繭の中
決断の刻を弱気がやり過ごす
空気読む勘を磨いて生きのびる
後ずさり出来ぬわたしの蛙跳び
落ち葉さえ温いところへ吹き溜まる

鳥取市 吉田弘子

にんげんの軽さを恥じる古稀すぎて
挿し木して機嫌何う水加減
好きになる何と楽しい余生だな
抵抗力得るに少々毒も飲む
入選句隣へ負けぬ声をあげ

鳥取市 永原昌鼓

隣から今夜のおかずよく匂う
マンシヨンの隣 顔見ぬ一ヶ月
お隣へ越したとお蕎麦珍らしい
お隣の同じ顔見て五十年
お隣は笑顔絶やさぬ人がいい

鳥取市 中宇地秀四

亭主などチヨロイもんだよ褒めておけ
今年こそキット松茸食ってやる
大都市に送る子供も種切れだ
戴いた大吟醸で蛸おどり
水も火も空気も過疎地みんなタダ

鳥取市 太田幸枝

愛情が過ぎた子供に夢が無い
ときめいて老いらくの恋浮いている
先生も家に帰ればお父さん
持ち唄は骨まで愛し迷わずに
川柳の友だんだんと減るこわさ

鳥取市 山本 益子

お人好し口車には気を付けよ
女性閣僚まだまだ似合う赤い靴
鬼面仏心生れつきだが顔で損
またかいな事故あることの最敬礼
日暮れ時無灯自転車車を揉ます

鳥取市 西川 和子

私がおもらった運だ従おう
ほどほどの運に納得して余生
すつきりと目覚め楽しい日が流れ
触れ合いが楽しホームのボランティア
スケジュールこなせぬままに今日も暮れ

鳥取市 山宮 愛恵

こだわりのお皿も映える誕生日
婿さまの手作りピザが超うまい
ロゼワイン手抜きはしない愛を盛る
雨しとどジャスマンティと会話する
適当に線引きをされ世が動く

鳥取市 池原 天馬

金融危機日本に学べアメリカよ
よく生きた半世紀ぶり友と会う
畑仕事草が元気でもてあます
神無月靖国の神どこに行く
一合は命の水だありがたく

鳥取市 倉益 一瑤

永田町閻魔の好きな舌ばかり
募洗う昔の鱗剥ぐように
黄昏てちよつと弱気になった恋
笑顔の裏で本音の舌が長くなる
一日を吉にしたくて歯を磨く

鳥取市 岸本 宏章

控え目に食べておいしさラップする
雑魚どうし嬉しいときも共に泣き
聞き上手核心じわり衝いてくる
ど演歌のイントロ老いの血が騒ぐ
世界の天気役に立たぬが見て眠る

鳥取市 岸本 孝子

ふんわりとところを包むわらべ唄
拗ねた猫餌を横目に出ていった
古くても着なれた服に手を通す
ころまで盗まれそうな上手い口
日曜は母さんラッパも休んでる

鳥取市 田村 邦昭

未練などないと言いつつ振り返り
老いの身に北風ばかり吹いてくる
低姿勢謝る子供叱れない
おいしさがいつまで続く嘘がばれ
拗ねるといふ字は男には似合わない

鳥取市 近藤 佳子

まだ母がわたし護ってくれている

曼珠沙華今年も生きて逢えました

七草と一期一会の野辺歩き

呆けじゃない歳よと呆けかけのひと

ときめいている日の鏡艶を増し

鳥取市 横田 春名

催促は声のトーンに気を配る

勧誘に歳を告げたら黙り込む

慎みの言葉を選ぶ歳となり

貧するも鈍になるまいページ繰る

オカッパの写真追憶八十路坂

鳥取市 有沢 せつ子

食品表示疑いぶかくなりました

鉢植に腐葉土入れる冬準備

駅前の鳩は知人のように来る

几帳面な職が抜けないまま老いる

新聞の株式欄は縁がない

鳥取市 下田 茂登子

お隣りの様子を探る恐い猫

柳誌届く私の名前先に見る

少額の年金だけど飲むビール

足腰は曲がって来たが欲の皮

番人のいない過疎です一人生き

倉吉市 最上 和枝

油揚げ三角形を競い合う

過疎の柿もいでくれよと呼びかける

人間を四の五の批判する河童

餓鬼大将押しも押されもせぬ市長

酷暑の日オアシス求めパチンコ屋

倉吉市 牧野 芳光

いそいそと季節先取りする散歩

女房が無念無想の邪魔をする

水田は売ったが鍬はまだ捨てぬ

たくらみをしているようだ火の臭い

暇人が政治に不満言っている

倉吉市 猪川 由美子

農水相へ田の厄除けを送ります

厚化粧に素颜隠して世を渡る

失言癖の無い閣僚を願いたい

値上げ対策フル回転で脳は活き

憎まれっ子居なくなってもチト寂し

倉吉市 山中 康子

老いの身に句会でおどる場所がある

あざ笑いいつかきつとというフアイト

わたくしの代り頼める嫁がいる

国会に興味はあるが肩がこる

一週間会えぬあなたが好きになる

倉吉市 山本 玲子

休漁の港は笑い声が無い

秋日和ケアハウスからわらべ唄

食欲の秋大胆になる居候

写経する筆の穂先に阿弥陀像

朧月 狐に化かされた狸

倉吉市 松本 よしえ

ちりめんじゃこ食べているのに骨粗鬆

手袋も破れ草とりもう止める

映画見に行つてオシヤレだなど言われ

映画館シニアの券がモノを言う

ノーベル賞さすが科学者冷静だ

米子市 野坂 なみ

ノーベル賞へ四人の快挙バンザーイ

こっそりと証拠つかんだ防犯カメラ

健康児今はメタボと組み討ちだ

素顔の健やかさがいい少女たち

健やかでいたいな老いの手入れして

米子市 光井 玲子

すこやかに今日まで生きて感謝です

残された時間おろそかには出来ぬ

亡き父母に守られている手を合わす

人は好きすぎいらぬ事言えないな

虫歯のない祖父にはほんに脱帽だ

米子市 青戸 田鶴

大山を跨ぐ大きな虹を見た(ロイヤルホテルより)

一面のサルビア秋も暮れなずむ

無駄話ばかりだいいいな事決めず

似合う服なくて試着に疲れきり

捨てるはずをまたしまい込むボケたかな

米子市 政岡 日枝子

温度差があつて面白い夫婦

待つてみる大きな意味のある時間

心うろろうご飯を食べて落ちつこう

あかあかとした十五夜にひとり寝る

友達が出来たと満足そうに寝る

米子市 白根 ふみ

公園のハトが待つているのはエサ

吾亦紅見事な空間をつくる

わたくしを庇つてくれる老いた猫

いまにしているいい姑だったと言いつらす

我儘にみえる我が子を当てにせず

米子市 中井 ゆき

もらい手も買ひ手もない歳を積む

辻々に母がいそうな金木犀

花の中やつと見付けた吾亦紅

鮮やかにダリヤが秋に生きかえる

あらわれた虹に生気が湧き上る

鳥取県 北村 稔

名月を邪魔する雲のにくらしや
月うさぎ今の子供にゃ通じない
晩酌をたのしむ笑顔父楽し
イチジクに栗梨リンゴ秋うまし
お役人次々悪事よくもまあ

鳥取県 松川行男

連れてつて一円玉の赤い羽根
格差にも負けず一票持っている
日が暮れてお膳出るのを待っている
口出さぬ嫁や孫から叱られる
旅行なら腰の痛みもなんのその

鳥取県 竹信照彦

憤懣は疲れた頃にやって来る
心地よい疲労は買ってでもしよう
道走る車に不況感はない
軽車輛で充分年寄りの暮らし
倒産の心配だけは無い年金

鳥取県 山下節子

ちぎり絵に実りの秋を貼り付ける
老人会持病が無くて輪の外へ
ちつくしように騙されてから気が付いた
ギブアップするには少し早すぎる
スーパがオアシスになる真夏日だ

鳥取県 盛田夢路

渋皮を脱いでふつくら栗ご飯
凭れられ凭れてくらす三世代
甘柿を狙う野猿の知恵くらべ
お月さま何歳ですか美しい
戯れて少しお茶目な風に会う

鳥取県 佐伯やえ

秋の空雲が絵になる詩になる
花植えて老いの砦をかためとく
アマクリナム百万ドルのえくぼだぬ
ボタンに花芽くじけるなよと言っている
自分史に花のロマンがまたふえる

鳥取県 深田俱久

わきかえる連日日本ノーベル賞
年越しの模様今年は変えてみる
だんだんの視聴出雲はよい処
神棚へ日記も供え年迎え
年賀状何通減らす思案首

松江市 松本知恵子

コスモスを咲かせいつもの秋になる
居酒屋へ歩く夫婦に十三夜
朝露の雨垂れをさく秋深む
稲刈りを終え白鳥を待っている
地産地消コピー人間にはならぬ

松江市 津川紫晃

庭で鳴く虫の音いつか子守歌

疑問符をややむやにするマヨネーズ

スパイスを効かせた語尾は愛の鞭

ナツメロで胸のアルバム開き見る

ゴキブリの運動会が終り秋

松江市 安食友子

ロマンある指輪ぐるぐるして回顧

請うたのでパチンコ代と知りつつも

お逢いしてがっくりなさるのは止して

逆らわず相手に合わせるも姿

蛇の目傘はつと浮いてる秋しぐれ

松江市 小川注湖

携帯のメール心の隅も書く

へちま水つるつる肌に主目覚め

出雲路に銘菓の誉れ歴史あり

僕もときに嘘言ったことがありました

風向きが変わったようだ妻無口

出雲市 多久和敬子

母さんのもてなし世界一だった

種を蒔き恵みの雨を呼び寄せる

もやもやを山脈さつと消してくれ

子や孫に恵まれながらこぼす愚痴

さわさわと女心を揺する秋

出雲市 石倉芙佐子

孤独感ますます募る秋の蝶

麻の葉の紬ときどき愚痴を言う

古い家で一人ぼっちは寂しいね

おかっぱの私が翔んいる祭り

夜明け前別れの夢で頬濡らす

出雲市 森茂美

花から花蝶は忙しく生きてゆく

有る人もまたそれなりにある苦労

漁火を並べて沖は平和だね

秋刀魚焼く猫が横目で見てござる

事故米の毒味は民がしてくれる

出雲市 小白金房子

朝毎に写経心の衿正す

秋を活けたわたしの心澄んでくる

こぼれ萩踏みて参道みこし行く

最終便頭上去り行く宵灯り

湯割り水割り焼酎好む年となり

出雲市 富田蘭水

車いす青空澄んで今日散歩

今があるアクセル一杯目を開き

お彼岸をかわ切り冬物出しそろえ

まいた野菜日に日に成長楽しませ

棟上げの餅まき聞いて背がのびる

出雲市 小豆澤 歌子

乱れ咲き切なく揺れる萩の花
おどり出た種がいつしか芽を出した
約束はしないと決めた吾亦紅
逢いたくてコスモス風にまだ揺れる
群青の空に抱かれる柿の赤

出雲市 岸 桂子

瞬いて生きてることを確かめる
にきび面した少年の細い声
少年の回り道なら手を貸そう
どしゃぶりの中でこけしになっている
汗積んで老後にむごい低金利

出雲市 伊藤 玲子

他人の世話出来て仲間になっている
ご苦労さん挨拶くれる金木犀
青空に抱かれ夜空にまた抱かれ
秋色を食べ秋色になりました
携帯は圏外森を出られない

雲南市 毛利 幸

そわそわとしている何かありそうな
上品な人だがすこし翳がある
ツアー旅靴浮々はしゃぎ出す
卵から飛び出し外界眺めてる
いらいらが溜まって破裂しそうです

島根県 伊藤 寿美

立たされた廊下があった木の校舎
これからの逆算喜寿の句読点
追いかけるのはよそう時雨は止むだろう
積乱雲昂ぶるものを溜めている
B型の妻で万事が大雑把

倉敷市 撰 喜子

妻洗い夫干す役金婚譜
通販の払い遺産として残る
大河ドラマ人気場所へ誘われる
引き算の暮しで遺産食いつぶす
クラス会かきまぜている目立つ服

真庭市 国 米 きくゑ

今朝もまた目覚め神仏祈る幸
ポロツと口衝いて本音がこぼれ出る
不器用で何時も本音で暮してる
力まずに余生流れのまま生きる
新聞の溜る早さで日が流れ

真庭市 福嶋 智恵子

目標の柳友逝つてただ唾然
柳友は逝く凜々しく生きて百二歳
八月に句作した友永久の旅
木枯らしの囁く声に落ち着けず
大臣が本音しゃべって叩かれる

美作市 福原悦子

画布に漂う亡夫の笑みに会う

老いてなおガツツ百姓守り抜く

残照の命を囲むお茶の席

過去帳の恩はまだまだ返せない

転た寝してその次の策練っている

美作市 大石 あすなろ

ちよっとした言葉に以後を縛られる

風光る今日を確かなものにする

相棒の広い背中に頼り切る

噛めば噛むほど出しの出てくる人間味

賞味期限切れてもうまく化けられる

竹原市 時 広 一 路

なあ鏡ときにはお世辞言ってみな

どっこいしょさあ万歩計頼みます

二重丸あげよう汗を知る軍手

も一人の私相手にして揉める

通話ゼロ僕のケイタイ可哀想

竹原市 岩 本 笑 子

昔昔メダカと住んでいた私

何がまんしてたの歯ぎしりの夫よ

稲刈った田んぼは広い広い海

ささやかな畑トンボも蝶も来る

以心伝心夫もケイタイかけて来る

美祿市 安平次 弘道

ブランコを押せば記憶がよみがえり

背なを押す予感他人の眼に刺さり

逆風の中で進まぬ正誤表

アイデアがあつて可憐になるポーズ

認識のずれ正解にしておくか

宇部市 平 田 実 男

いい人と大事な人は違えます

自給率を不安がつてる休耕地

喜寿近くオアシスとなる句会場

他人にはいい奥さんに見える妻

兄弟八人 五人が後期高齢者

東かがわ市 原 賢

強がりと言ったが後に引けぬ羽目

骨太の亡父の助言が生きている

敬老会もう一度恋してみよか

憎しみを水に流して湧く生命

水の音火の音妻が朝の厨

東かがわ市 清 川 玲 子

火花散らしたことも今では語り草

目と口はまだまだ達者子等敬遠

第六感昔はもつと冴えて居た

強行軍した草引きが腰にくる

心にもない強がり言うて悔い

松山市 高橋 宏 臣

唐津市 市丸 晴 翠

雷雲の動きに怯え傘を買う

アナログのまま喫煙所に溜まる

辻褄を合わす尻尾の隠し場所

平均値以下でどっこい生きている

雲行きを読めずに眼鏡ばかり拭く

西予市 黒田 茂 代

廃屋へ蔦真緑のペンキ塗る

紅花の持つあこがれの紅の彩

芸術性も機能美もあるなまこ壁

豆腐一丁買ってもレジはありがとう

マイハートも秋空も今日おぼろ雲

高知県 小澤 幸 泉

顔色をうかがいながら注ぐお酒

信じあう夫婦にもあるすきま風

お母さん時どき耳が遠くなり

明治生まれ意地と孤独を同居させ

長生きをしすぎてどうもすみません

唐津市 樋口 輝 夫

背に余る一年坊主のランドセル

にぎにぎの癖が抜けない審議監

掃途につく軸がふらつく千鳥足

驚きの高値が付いた亡父の軸

嘘に嘘重ねて化粧厚くなる

鎧剥ぎ透明になり進む老い

老い二人隙間を埋める孫の声

虹色に疲れ溶け出す仕舞風呂

株安に筆筒預金が安堵する

欲しくない歳を祝うと集う子等

唐津市 井上 勝 視

こんな世でも生きていきたいの葉飲む

言うたとして何も益なし黙つとこ

消去法ばかりで焦るあと僅か

欲言わず気楽にゆこう仮の宿

物価高福が来るほど笑えない

唐津市 坂本 蜂 朗

根腐れの地球で続く小競り合い

年休を取れば不安が顔を出す

酔い醒めるまで町内のパトロール

悪筆を個性的だと持ち上げる

古希の坂言つた言わぬと譲らない

唐津市 山口 高 明

角界の品格ばかり責められぬ

宰相が変れど庶民潤わず

身の内を疾る昂り秋画廊

強盗も客チエックをしないドア

雪の降る聖夜をひとり飲み歩く

熊本市 永田 俊子

考えを変えない父の戸が軋む
台所の空気が乾く妻の留守
影法師にも注意する年金日
本心をさぐるおいしい話する
九回裏逆転サイコロの出来ごころ

熊本市 高野 宵草

憤る己れが小さい鯛雲
戦中派米の命を無駄にせず
強い歯と強い胃メタボ治せない
平均寿命超して肩身が狭くなる
四十年掛けた年金貰い過ぎ

第18回 播磨文芸祭 川柳大会

◆事前応募の部◆

課題・選者 各題2句(計6句、ジュニア2句)
《ジュニアの部》「宇宙」菅野 泰行
《一般の部》「滲む」木谷 盛男
「似合う」三宅能婦子
「財」村上 氷筆

応募料 1000円 ジュニアの部無料
応募要領 1枚に各題2句(計6句)列記、住所
氏名・電話番号を明記、姫路文学館まで
締切 12月10日 消印有効

◆川柳大会 当日投句の部◆
とき 21年2月15日 11時開場
ところ 姫路文学館 講堂

課題と選者 「文句」中野 六助
「傾く」久保田元紀
「恩」久本にい地
「叶う」森中恵美子
「煮る」赤井 花城
「雑詠」平山 繁夫
「私と川柳」奥山 晴生
講演 1000円 ジュニア、講演のみ聴講は無料
投句料 千670-0021 姫路市山野井町84
応募先 姫路文学館

温故知新

大田市 武部 香林

盃へ月は冷たきものど知り
孝行の仕納め医者を連れてゆき

京都府 大鶴 喜由

十月の水は冷たし快し
まあ上がれまあ呑め借る気がにぶり

岡山県 直原七面山

母一人子一人今日も秋刀魚にす
堂々と戦いました負けました

大阪府 西森 花村

浮き沈みまだピリオドは打つてなし
浮き沈みあまりに人の老い易く

米子市 小西 雄々

嘘まぜた弔詩に遺族泣かされる
句を作る喜び妻に言い聞かせ

「川柳雑誌」麻生路郎主宰

三五五号(昭和三十一年十二月号)

川柳塔の

川柳讃歌

(48)

木津川 計

本日が中途半端なまま終る

谷口 義

「本日」でなく「本日が」に意味があるのです。義さん、いいではありませんか、今日一日ぐらい中途半端で終わっても。「一年が」なら僕も少しは楽しめます。少し、という訳は、「生涯が」でないからほっとするので。

人生は〈希望〉を同伴しての旅路です。目的があり、目標を定めているから「中途半端」の思いが残るのです。無目的の人は「中途半端」を自覚することもありません。

クビになる夢をまだ見る定年後

三宅 保州

告げられての衝撃が人生には三つあります。一つは、最愛の人から愛の終焉を口にされたときです。失恋の痛手は生涯消え失せないかも知れません。二つめは、クビを言い渡され、生計の手段を奪われたときです。保州さんは幸せでした。「クビになった」ことが

なかったのですから。それでも解雇を予感したつらい現役時代を夢に見るのです。三つめは、死を宣告されたときです。苦しいが楽しい、楽しいがやはりつらい人生からやつと自由になれる、僕はそう思つて死を準備する筈です。

中流と浮かれた頃が懐かしい

穴吹 尚士

中流九割と言われた時代、僕は中流のお方がうらやましかつたのです。満員電車にひしめくこの箱の九割がすでに中流と思うと下流を自認する僕は気が滅入つたのです。「上方芸能」編集部の隣りは酒屋でした。夕暮れと共に附近のサラリーマンが集まり、コップ酒でスルメをかじり始めるのです。生活に余裕ができる、中流は貧しかった頃が懐かしいでしょう。ことさらに安酒を、しかも立つたまま中流が飲むのです！

カミナリにも避雷針にもなつた父

柿花 和夫

昔の父親は恐かつたが頼りました。昨今は子供に甘く、学校を恐れさすモンスターです。桜の花びらで「ボンネットが汚れた。学校の桜を切れ」に応じた学校もありました。「うちの娘は箱入りだから、誰とも喧嘩しないよ」念書を書け」「塾通いで疲れているので授業中は寝かせて」「合唱で指揮者役の息子の

顔が見えない。前を向いて指揮させろ」。恐くて頼れて賢明、そんな父親になる教育の必要な時代が悲しいですね。

シャッター通りの物憂い午後ハワイアン

木本 朱夏

そんなシャッター通りがあります。なかなかないハワイアンが物憂い午後をひろげます。街おこしは「よそ者・バカ者・若者」が揃わねば、とよく言われてきました。そうでしょうか。「地の者・知恵者・年寄り」でこそ可能な街おこしもあるのです。上方落語の定席・大阪の警昌亭は天神橋筋商店街に活気を与え、落語ブームを招来させました。知恵者が地の者をその気にさせ、年寄りをよるこばす文化のチカラに依つたのです。

お墓にはいませんなんて言わないで

竹信 照彦

病院へお見舞に行く、と外泊でベッドはカラ。しょういなげを食らつたような気持ち以上の驚きと落胆は、お墓に訪ねた人物が不在と判つたからです。お寺に詣つてご本尊がいないうような、神社に参ると神さんが留守、といった空を掴む空しさがあると照彦さんは思うのです。同感ですが、千の風になつたその方は千里眼ですから、お墓の前の照彦さんの頬を撫でにそよぎに来ると、僕は信じています。

〔上方芸能〕誌発行人

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

大 空

李白の末裔

三人が酔へば三人らしくなり(大浜丸万別館)

女のいない酒はさびしき

女房の予感呑んで来るにきめ

あほらしきおみきに酔うて寝たといふ

ビールビール秋が来たとして秋が来たとして

のみに来た友に家賃をきかれて居

君の顔で僕の顔でと呑みにゆく

十二月曲がりくねったとこで飲み

落ちついて呑むは雨傘持っていず

酎をのむぐらいの金は友も持ち

ではここなどでと別れて飲み直し

いつになく女の方が呑むという

ビールの泡を吹いて話をそらす気か

みな呑んでるぞビールが散るぞ夏

まあまあといふがコップが足らぬなり

焼酎は呑みなさんなと気をつかい

酒なんか呑んでいられぬ酒を呑む

元日を飲み友達とでてしまひ

箸紙を書いた手でもう父は呑み

敬遠をされて一人で呑みに行く

酔うてきて既に零時をすぎた水

銃後銃後 飲まずに辻で別れたり

青春を呑むべく生まれ来し如し

自選集

中原 諷 人

まぶしさや人という字の濃く淡く
丁寧に聴き憶えたり杜の中
極まればドドンと情け噴き出そう
残り火のチヨロチヨロ明日も笑う花
月を跨いで百八つ目の響き

西 出 楓 楽

繁昌亭出ると取れてた目の鱗
いい人と言われ粗末にされている
すんなりと古稀を迎えた訳でない
飢餓感がつのる本屋の梯子する
同情と優越感の裏表

仁 部 四 郎

モーニングで行くから靖国騒がしい
経典が古今東西弾と成る
宗教の涼しい声が電話から
五円玉たまりましたと寺社めぐり
それはそれ鯛の頭捨てきれず

優しさに討たれて美酒を注ぎこぼす
竜神のしたたり見せて筆が跳ね
旅終えて空翔ぶ鶴をふたつ折る
自画像にわたくし彩の雪が降る
紅葉した木の葉に乗せる自己主張

前

たもつ

林

瑞 枝

さつそうと自転車またぐ三歳児
かゆいとこ搔けぬ補聴器つけ始め
十月尽御節を急かす百貨店
更衣ちよつと油断の風邪を引く
わたしだけにそつと囁く秋の風

宮 口 笛 生

今年また正月出来る有難さ
台風をうまく逃れた米の出来
外米の怖い薬を食わされる
氏神が近く日参する願ひ
自分では八十三と思うてず

三 宅 保 州

列島の四季知りつくす旅役者
両陛下の歩みに合わすりハーサル
逆さまの記念切手が泣いている
毎日のように失恋しています
酔狂と言われてもよいボランティア

宮西弥生

人の世の苦勞図太く墓洗う
一病とつき合う仲間また増える
勝ち組に残り味方が一人減る
人間の脆さ数字で評価する
生と死の間ひと言ありがとう

森下愛論

生命が粗末にされる米騒動
海知らぬ山の子磯辺で立ち竦む
下心あると知つても乗つてやり
呆けることないぞ汗かきよく歩き
酒タバコやめて元氣によく歩き

八十田洞庵

川沿いで水とハミングするくらし
キザですな仕事恋人などと言う
仕事一途座職の父の背が曲る
街頭でボクは僕なり署名せず
そして雨誰にも逢わぬ日に仕事

両川洋々

談合の甘い耳打ちには弱い
中年の恋はマニュアル手離せぬ
アフガンの地雷よ永遠に目覚めるな
世知辛い世だがコスモス凜と咲け
万年ヒラの外野席にも春よ来い

阿萬萬的

後めたさ少うしあつた曇り空
出しゃばつた自分つくづく厭な日も
深追いを悔いてとぼとぼ帰る道
年かしらついつい忘れっぽい日々が
寂しいね後期がついた高齢者

板尾岳人

蝙蝠よ急がなくても日が暮れる
年金でギョウザ食べれる有難さ
ねつくれす揺れて師走の風に逢う
ゆつくりと漕いで彼岸へ急がない
のんびりと五階に住んでいる師走

奥田みつ子

思い出の人また増えて眉の月
匂い袋亡母はいつでも傍に居る
株暴落 庶民にじわり迫る波
永田町ブラシかけたい人ばかり
来る年に明るい期待小さな芽

河井庸佑

正論の通らぬ訳が読めてくる
明日のため今日も葉は忘れない
荷を解けば故郷の香り漂わす
適量で止めて明日も旨い酒
器ではないと役職辞退され

川 上 大 輪

笑顔なら私も少し持つてます
どうしようあそこに人が立っている
十七音ならなくていい茄子胡瓜
天と地の境界線の耳掃除
大人になっても猫舌のままである

木 村 あきら

懸命に咲いてコロリと花は散る
虎落笛鳴らして寒気団が来る
風垣も作り正月準備する
脇床に絵皿か凜と鎮座する
綿帽子貰いぬく温く六地藏

小 島 蘭 幸

白蛇の皮 私も脱皮するように
僕だけを見ている大仏様の眼だ
大仏様の掌小学生の僕がいた
御守りふたつ大仏様の声がする
お見舞に御守りひとつ入れておく

小 西 雄 々

寒翁の馬を放して油断せず
戦後史へ痛む節々目をさます
発車オーライ駅長さんは頼もしい
華やかな葬儀お布施のことに触れ
ネオンの灯溺れる人と稼ぐ人

斉 藤 焔

原点は葉取らずりんご丸かじり
道草の癖がなおらぬかたつむり
風の子に逢いたくなくて来た岬
平凡ついでいいな家族でにぎりめし
考えがついたか牛が歩き出す

塩 満 敏

お陰様鶴彬句碑大阪に建つ
柿や栗芋に秋刀魚と秋は佳し
秋アカネ黄金の上飛んでいる
体力の低下よ喜寿の坂険し
年末だパソコンで年賀状作ります

新 家 完 司

おだやかな言葉が集う村祭り
にんげんの祭りに酒が欠かせない
遠慮なく飲めとすすめる笛太鼓
祭り寿司錦糸卵を先ずつまむ
神さまの御礼が風に飛ばされた

恒 松 町 紅

カーキ色に染まった記憶遠くなる
昔なら招き招かれした祭り
年のせいだろやっぱりお節介
通院の鞆に句帳忘れない
人がいいから屈託のない笑い声

衣替え仕切り直しの温度計

認識ができ平穏な汚染米

白魚の指糠床へ秋なすび

ノール賞ネットカフェも大ニユース

金木犀香りジヨギングなか休み

遠山可住

筋書が後でわかった負け戦

風邪ひいたくらいに思うていたシヨック

歳ですねわたしもそんな歳になり

マンガだと読まな笑いの種がない

晩秋の虫迷い込む老いの部屋

都倉求芽

薬にも毒にも変えるひとりと言

頷いている己が手のかくし味

あくびした喉木枯らしに見つけられ

階段の隅に年の瀬すくんでる

冬の陽に障子の温み数えられ

土橋螢

わたくしに月下美人が咲いている

渋柿を焼酎に浸け食べている

鍛えてももう青春はもどらない

自給自足六人分の米はある

高齢者植山行きの保険証

津守柳伸

<p>あかつき川柳会 1月句会</p> <p>日時 1月9日(金) 14時</p> <p>会場 国労大阪会館 JR天満駅すぐ 「こうこつ」 「ひととき」 「絞る」 「時事吟」</p> <p>投句先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘宛</p>	<p>川柳塔のぞみ 12月句会</p> <p>日時 12月23日(火) 13時</p> <p>場所 銀座区民館(地下鉄東銀座3番出口) 宿題 「しぶしぶ」橋本祐子選 「酒」加藤権悟選 (各2句) 「ゆつたり」播本充子選 「自由吟」1句 欠席投句 12月20日 必着 播本充子宛 〒193-0832 八王子市散田町2-31-3</p>	<p>第29回 ときせん賞作品募集</p> <p>作品 雑詠 2句(未発表作品)</p> <p>選者 大野 風柳 森中恵美子 河内 天笑 赤井 花城 小松原爽介</p> <p>応募締切 21年1月20日(火) 消印有効</p> <p>選句方法 無記名清記の上、選句1句毎にその合計(平拔2、五客3、三才4)点</p> <p>発表 時の川柳誌 4月号誌上</p> <p>賞 ときせん賞1名・準ときせん賞2名 佳作7名 5月10日 大会で表彰</p> <p>応募方法 便箋大用紙に2句、郵便番号、住所氏名、電話及び所属柳社を明記</p> <p>応募料 1000円 (定額小為替又は100円切手10枚)</p> <p>応募先 〒664-0836 伊丹市北本町2-69-2 山口 千尋 宛</p> <p>◎多数のご応募をお待ちしています。</p> <p>時の川柳社</p>
---	---	---



小島蘭幸選

和歌山市 堀 富美子

今日もまたわたし色した陽が昇る

自分史のハートに光る介護録

今日も無事遺影に向かう有難う

植え替えた花の命も我が命

嫁姑垣根はずしたメッセージ

旅立ちの写真これだと決めている

紀の川市 宇野幹子

続編に結びなおしたスニーカー

処世術教えてくれたダンゴ虫

棘抱いてまだ許す気のない野バラ

ポケットで運の欠片が干涸びる

通り雨うしろ振り向くこともなく

耐え抜いた果ての貌かも鬼瓦

吹田市 二宮栄子

肩の荷を下ろして趣味の風に会う

我を捨ててみれば優しい子供達

茜雲明日を占う形して

好奇心袋に詰めて持ち歩く

一日を無言の日あり独り住む

独り居の風呂に受話器がついて来る

横浜市 川島良子

アナタより先に死んだらダメですか

総理交代よりも緒方拳の死

ノーベル賞ラッシユ日本が燃えている

平均寿命伸びていいことありますか

ピッケルを磨く夫の輝く瞳

金木犀に呼び止められる散歩道

北九州市 岡田幸生

つり銭を貯めて買ってるジャンボ籤

へそくりの範囲で妻は羽根伸ばす

写経して心の魔物眠らせる

いわし雲亡父の野良着を着て案山子

七階で聴くベランダの虫の声

人間の心が読める下り坂

三木市 広瀬房江

晴天を喜び合つて刈る稲穂

にぎやかな虫の声聴く夫の留守

ラリレロ時々ろれつ確かめる

しゃつきりと茸の匂う飯を炊く

車間距離取りすぎた溝埋まらない

返り咲きという手もあつたバラの花

日立市 加藤権悟

おでん鍋ことごと母の歌になる

清貧の母にコンピニなど無縁

雪おんなの呪詛かも知れぬ曼珠沙華

落城を語る彼岸花の秘話

土とならこだわる父の無農薬

スクラムを組むと尻尾がぴんと張り

紀の川市 北山絹子

バスポート夢に見ている目的地

プライドを捨てた男の影法師

人生に九十九折した道がある

故郷の母のメニューが温かい

大根を育てた土が主張する

耳を澄ませば冬の足音近くなる

八尾市 中島春江

新ものサンマ一匹ずつに値を付けて

秋茄子の自慢料理は嫁の作

明日倒す家に名残の菊活ける

ケータイで結ぶ赤糸きれやすい

人の冷えを地球が温めようとして

幸せは過ぎて知るもの老いていま

和歌山市 田中すず

いい人を演じ続けて来た疲れ

鴉とはなるべく視線合わせない

思い出に浸ると風が凪いでくる

ゆっくりと羽根を休めてみたい冬

怒るとき怒りなさいという助言

今は兎に角耐える時期だという神籤

吹田市 早泉早人

わだかまり捨てれば今日が笑い出す

諍いを避けてわたしが消えてゆく

人生に彩り添える酒タバコ

別れ際ぶつきらばうに握手する

割り引きの切符ばかりで遊んでる

厄除けのためだけのガン保険料

藤井寺市 増井ヨシ枝

ふる里に続く川あり魚の群

無人駅赤いポストは生きていた

風追つて追うて人恋う秋桜

ばあちゃんの秘訣梅干しやべり出す

秋明菊母の面影抱いて咲く

リハビリの手のお手玉が亡母を恋う

札幌市 小沢 淳

耳寄りな笑い袋を持ち歩く
人間に健忘という得意技
許し合うこれが愛だと知ったとき
いい時に終ったなどとほけてる
プライバシー隣人愛も壁ができ

札幌市 三浦 強 一

百までは生きる気概の歯を磨く
ジャズライプ老いも浮かれてくる熱気
翳雲金子みすゞの詩が浮かぶ
パートにも告発という導火線
買ひ物のメモを忘れた無駄遣い

横浜市 長 島 亜希子

スタイルブックと違うブラウス縫い上がる
五体満足なのに気つかぬことばかり(星野富弘氏詩画展)
言いたいことうんとあるけど一つだけ
加齢によるもので納得させられる
リハビリの夫婦がけんか腰になる

岐阜市 平 野 あずま

古き良き味だかまどで炊いた飯
勝ち残りゲーム孤独な椅子が待つ
原油高乗らぬ車を磨き上げ
自給率案山子に解せぬ休耕地
リストラに遭って青柿地に墜ちる

和歌山県 森 下 よりこ

文化祭青春してる孫娘
一服の私トンボに囲まれる
少しずつ食べてる毒に強くなる
ゆつくりと歩いて今を楽しもう
裏庭に咲いても金木犀の主張

田辺市 大 峠 可 動

謎々が解けて広がる汚染米
訂正が効かぬ国家が闇を生む
花の季が去って枯葉のさらし首
望郷のひと日ひと日が溜めてあり
陽が沈む汝の顔は真つ赤だな

紀の川市 吉 村 幸

いい目覚め農の続きが待っている
順追って論ず教師の目が温い
紀の川に昔遊んだ風がある
寝る前の五分明日へのストレッチ
熟考の一句ルーベと夜が更ける

奈良市 矢 野 良 一

郷愁誘う明日香棚田の彼岸花
秋霖止んで気分爽快ウォーキング
金木犀匂うと村は秋まつり
五十年雑念抱いて生きている
ぬくもりが裸にさせる縄のれん

堺市 大隅 克博

お賽銭隣の人は音がせぬ

空いてると座りたくない通勤車

祝日の謂れも知らずただ休む

優先の座席白髪は座りよい

クラス会覚えていけると言う辛さ

堺市 萩野 像山

地球儀で妻の旅先追っかける

飲む話耳とおい父起きて来る

袋いっぱい命をつなぐアルミ缶

傘寿会がめつく生きてみな元氣

父の歳越えて命がいと嬉しい

枚方市 二宮 紫鳳

孫主役ビデオカメラが走り出す

朝一番秋一番の深呼吸

リハビリの夫とウォークのおぼろ月

一呼吸おいて難題クリアでき

孫参観おすまし顔の猫がいる

豊中市 松尾 美智代

三食をきっちり食べて元氣です

老けぬよう磨いています好奇心

夢ばかり追って走っている枯野

毅然とした姿勢で心揺れている

ダイエツト兼ねて階段上り下り

大阪市 尾崎 ゆめ

呉服屋に生れ畳に恩がある

優し過ぎる男と秋にさようなら

トンネルを抜けた女が蘇生する

雑菌を纏い私は風邪引かぬ

列車遅れますあなたを待たせます

神戸市 木村 忠義

風と遊ぶのが大好きなコスモス

無風時のコスモス仮眠してるよう

毎日のプラン体に聞いている

優先座席年寄りらしくして座る

取り替えの効かぬ体をまた忘れ

府中市 藤岡 ヒデコ

鎌刈る頃は百姓してました

最後まで元氣を頼むごはん党

恙なく静かな秋の中に立つ

どうしよう投句締切り日が過ぎた

撮らないで後姿はすきだらけ

竹原市 國實 力

年金の額でわたしが世帯主

解つちよる広島じゃけんカーブじゃろ

大好きな方言だから使わない

ふところにたった一つの隠し芸

鬼ごっこどこですのと街の子が

鳥取市 近藤 秋星

納涼祭我が挨拶で始まれり
大空へ翔たけ若き夫婦鷹
米を作らぬ人が新米先に食う
敬老の日の式典に謝辞を読む
栗御飯まだ食べてないこの秋は

雲南市 菅田 かつ子

ほっとして座ればどっとでる疲れ
踵だけ上げてジャンプをしたつもり
原点を探しに降りる無人駅
どっこいしょゆっくり起きただんご虫
おばあちゃん忘れ上手になりました

雲南市 渡部 好榮

コオロギの声ききながら終い風呂
生きている証だ苦勞も買つて出る
千の風万の風吹く田舎道
世の中の乱れ見ている万の星
生きがいを探しふたたび登る山

阿波市 三浦 千津子

機嫌よく牛歩で生きる余命表
土壇場で見栄切る傘がひらかない
柵を断ち切りたくて風の駅
ごった煮の中で喘いでいる個性
地味ですが扮飾もせず生きている

シドニー 三谷 たん吉

七光はびこる国に暗い陰
子孫には政治やめさせ物理學
有難ううつぶん晴らすノーベル賞
手からエサもののおじしないハト太る

青森県 松山 芳生

やんわりとあなたを宥める風に逢う
嘘と知りつつ一点の瞳に酔っている
難題を抱いたかたちのあばら骨
非常線の中にストレス投げてやる

佐渡市 高野 不二

クイズには東大生も歯が立たず
こんな事知らない人がいるクイズ
暴落に株を持たない上機嫌
食事より昼寝で留守を買つて出る

栃木市 岡野 すみれ

派遣社員のままじゃ結婚いつできる
他人から見れば何処かが似てはす
出まかせの口が責任とるといふ
欲望が多すぎ病んでいる始末

東京都 井上 つよし

待ちに待った秋心地良し朝の風
お隣は鯛わが家は鯛焼く匂い
家庭菜園腰手拭が板につき
しみりと小節に託すこの想い

東京都 高岡 弥生

内申書点数だけでつけてよね

山登り気分爽快毒出しよ

こんな日はお墓参りで父母に会う

非常ベル押したくなるよ赤い色

昭島市 野口 忠

赤ちゃんは肥っただけで喜ばれ

物価高メタボ見直すいいチャンス

老老の介護互いの目が温い

生焼けのマニユフェストにはご用心

藤沢市 加藤 スズコ

ずつしりと宝は重い初ひ孫

爽やかに挨拶交す朝が好き

いい知らせ心も弾む花切手

まともにも生きた明治の父母を見て育つ

静岡市 渡辺 芳子

恥かいて一歩前進習い事

あの世でも三人同じハスの上

ベッドにて長々眠る猫のポン

国のため死ぬと言われて散った人

北名古屋 片岡 文男

全快がなくて快気で切りをつけ

推敲で原句の方をやはり出す

駄菓子屋がコンビニとなり叱らない

スーパーのベンチ満席わが避暑地

橋本市 石田 隆彦

整理下手積木遊びが好きだった

納税は永田劇場観覧費

苦しいが偽装は我家やりません

凧の日もスクラム組んでいる漁船

山鹿市 阿部 ミツ子

無二の友あまりに早いお別れか

下下は活字一つで死もまねく

のれん店止めたいけれど明日の糧

汚染米人の噂で地獄道

京都市 清水 英旺

御無沙汰を詫げる周りに彼岸花

ドビュッシーもベートーベンも月に酔う

触診する医師の優しい掌

無為な日を過ごした罪を悔いている

京都市 藤井 文代

規制からずれた人生いいじゃない

サイフに風度々襲う定年後

ブレイキをほどよく効かす凡夫婦

人間を品格だけで仕分けされ

篠山市 永井 かほる

秋茄子とまびき菜漬けて勝る味

句会の日休むくやしさをなしい日

玉ネギは折れて芽を出し不思議だな

黒豆を無駄に出来ない豆腐作る

篠山市 谷田多美子

栗拾いメニエル症も何のその
豊作の新米積んで冬をまつ
今日一日元氣下さい阿弥陀さま
大正が遠く遠くへ秋時雨

奈良市 阿部茶々

平和呆け危機管理など籬はずれ
志望職諦めてから道ひらけ
志持って始めた筈なのに
ゴミ拾い有志募って茶飲み会

奈良市 尾畑なを江

こんな日もあるよ明日に夢をかけ
告白をするなら誰もいないとこ
礼服を召すとどなたもシャンとなり
裏方を生きて小さなつぼみもつ

奈良市 乾春雄

帰る背に言つては駄目ともう一度
馬鹿だった小さい意地で深い傷
鶴を折る心配を折る指の冷え
寿命延びてもやたらと部品痛み出す

奈良市 岩本浩二

背信と不信渦巻く食事情
ピアノの音甘い乙女の香を添えて
半世紀婦唱夫随で恙無い
羊羹を五等分する難しさ

奈良市 辻内げんえい

定退し違つて見える駅ホーム
来年もまたありそうな辞任劇
五人いてみんな首相に物足りぬ
事故米が有つたのさえも知らなんだ

和歌山市 根田よしこ

園児らの揃いすぎてる鼓笛隊
新米は美味いが機械代に泣く
待ち合いの介護談義に癒される
とりあえず長生きしたい老母よりも

和歌山市 坂部かずみ

心配で玉ネギの皮剥きすぎる
宿題が山と積まれた更衣
年金から始まった私の老後
輪ゴムまで弱くなつたとタコ焼屋

和歌山市 福井菜摘

在りし日の愛の記憶を追う枕
結び目の甘さに横矢飛んで来る
競い合う中に生まれて来るヒント
ファイナールは妻の拍手があればよい

紀の川市 辻内次根

真心をあげる粗末な包装紙
精神の衛生によい古本屋
期限切れよくたしかめて食べている
三食がとておいしい果報者

海南市 小谷 小雪

良い知らせ直角に来て渦になる
昭和より大正生まれしなやかに
本年の梅干できて子に送る
サビついた喉を少しの酢で締める

岩出市 村中 悦男

断りを言つて期限のおすそ分け
冬の靴少しゆとりのあるがいい
一日も同じ日がなく明日迎う
感謝する息子の裏に嫁がいる

堺市 大久保 ノン子

聖書など何も知らないクリスマス
冬の雨ひとりに長い夜がある
ラブレター死ぬまで持っているつもり
頭にも柔軟剤があればよい

堺市 近藤 治子

幸せが長く続いて伸びなやみ
捕われの蝶の命を孫に乞う
お仕舞はにっこり笑つてありがとう
売れ残り中から福を見つけたよ

堺市 羽田野 洋介

良いことは大文字で書く予定表
謎だらけ初めて歩く老い之道
テレビ消し食卓囲む家族の和
お喋りと笑い心のゆとり呼ぶ

大阪府 小栢 こずえ

ひんやりの朝の空気は寶石だ
外歩き体の毒素消え元氣
球根に愛込め春を植えている
良い笑顔あれば何んでもカバーする

大阪府 安藤 なつこ

警報で分断されたラジオ寄席
まんじゅうのためにセツセと散歩する
目ざまして本人以外皆起きた
バックして心のシワものばしたい

大阪府 坂口 公子

へーエ九十歳に手が届く
好きな人から貰った白い花の苗
さつちりと結果出てくる面白さ
カロリーへ目を瞑つとくバイキング

大阪府 萩原 大朔

城下町武士が来そうな深い闇
挨拶が苦手でいつも置土産
奥の手があるからこは懐手
深い川ついに越えるかオバマさん

大阪府 尾崎 黄紅

線引きをされた昔に今があり
神様に叱られている夢を見る
進む老い春と秋とが短いな
ぶらんこで句作の夜もありました

大阪府 高木道子

夕陽背に今日のドラマの幕を引く

長生きはもしや悲劇か母を見る

何枚も舌の先持つ詐欺集団

木の葉髪日々のドラマのあれやこれ

大阪市 橋村容子

無洗米珍しがって炊いてみる

自慢だが松茸御飯食べました

改めて匂を見直す新サンマ

ほかほかと干した布団を抱いてみる

大阪府 畑中節子

鯖寿司を握って一人秋祭り

客去りてまた鈴虫の宿となる

大輪の菊の吐く息みなもらう

ひと呼吸おいてよいしょと席を立つ

大阪府 神野千恵子

アルバムで心のかげら拾ってる

虫干しについ手が止まり亡母と居る

病室にいて喧騒をふと思ひ

雲動く想像力をかきたてて

大阪府 西川冷子

喜寿間近輝き通す夫婦星

思いいに残す引出し整理する

仔犬来て奪い合うたり名付けたり

仔犬ちゃんとっても邪魔でかわいよいよ

大阪市 寺井弘子

よくやったクラゲを捕ってノーベル賞

子と同居コーヒー通になつてゆく

生き甲斐は暖簾汚さず守る事

愛国心百円で買う赤い羽根

大阪市 平井露芳

自治会にお年ばれたが敬老金

放浪記流石疲れた森光子

講習の成果は孫にメール出来

囑託やな白髪頭のあの人は

大阪市 山本加お里

苦も楽もプラス思考できた夫婦

おはようと先手をうってご挨拶

憧れた人もおんなじ不整脈

ケチと思われても私節約家

大阪市 吉内タカ子

青空に晴らしにいこう登山靴

待っていたは燃えて群がる彼岸花

美味しくて里の空気に深呼吸

吉みくじほっと笑顔で胸さすり

大阪市 吉田富美

大掃除猫も一緒に走ってる

ちよっとだけ背伸びしている老いの坂

ときどきは夢を拾いに美術館

ランドセル見守り隊もにっこりと

大阪市 太田としお

嫁はんに敬語普通はつかわない

普通ならココはバントで攻めてくる

普通ならここで女は泣くでしょう

普通では夫婦はあない喋らない

大阪府 若月祐作

お隣は雨戸一枚だけ開ける

ほんまかなあんたも敷かれてるなんて

かゆみ止め妻の背中に塗ってやる

喜寿傘寿やがて米寿も視野におく

大阪市 吉川弘泰

頼りないあんたほんまに風見鶏

ガラス戸に音だけ響く冬火花

朝帰り妻の空手に目が覚める

人生の浮き沈み知る靴の裏

羽曳野市 森下一知

バリアフリー監視カメラのお節介

情報疑似餌にかかる泣き寝入り

温暖化政治を叱る科学の目

やさしいもの匂いが路地を包み込む

羽曳野市 福田悦子

世渡りが上手波には逆らわず

自画像の中で太さは分らない

友の輪が大きくなって行く都

住めば都ここで人生幕引きを

羽曳野市 宇都宮ちづる

身勝手に改ざんされて老後なく

年金の不安財布を凍らせる

あれほどに欲した自由を持って余し

暴落をしても庶民にピンとこず

羽曳野市 松本静子

鈴虫を育てた昔なつかしい

枯葉舞う公園の色冬近し

四季咲きのピンクのバラを活けて見る

彼岸花まっかに咲いた墓のさわ

羽曳野市 仲谷真一

孫の日にねだられ玩具買いました

わくわくと優勝の日を待っている

人生は終りの知れぬマラソンさ

プレッシャー五輪マラソンつぶれてる

豊中市 藤沢長一

つれづれの墓参を見てる彼岸花

食べたいが皿が気になる回るすし

なやみごと人には言えずに花を折る

別荘の夕日が赤い海を飲む

豊中市 谷川勇治

南海の亡兄の吹いているハーモニカ

白が好きなかなか恋ができません

端役のままドラマの幕を降ろします

カレーパンでんこもりして妻は旅

豊中市 荒卷 夢

好き嫌いで生きたこの道つつ走る

夫より息子に頼る年となる

一票で議員踊らす総選挙

紋黄蝶母を想いてしばし追う

豊中市 源田 啓生

触れないで置こうがふたつみつ増え

秋の暮れ我が歳ながらさりながら

雨降れば雨のせいだな痛む腰

秋刀魚よりキャットフードに馴れた猫

泉佐野市 稲葉 洋

食材の産地尋ねる祝い膳

大晦日何も無かったのがニュース

風見鶏まだ本心を隠してる

置き土産艶聞一つ無い不粋

泉佐野市 備後 三代子

千年の歴史式部の花絵巻

敬老日冷たい赤飯ひとり食べ

見舞客去りてためいき一つ出る

言いぶんはゆつくり聞こう酒と月

泉大津市 助川 和美

百均は昔よろず屋言うてたよ

農水省凶作続くお大臣

公約にもう逃げません言うてえな

白い御飯立食パーティー欲しくなる

八尾市 松葉 君江

便利さの陰で本能衰える

おしゃべりが老いのパワーのみなもとに

安全な地産地消で安心を

がむしゃらに働き心穴埋める

八尾市 前田 紀雄

気持良い朝を迎える定年後

投げ出さず清く明るく引退す

日本人誇りに思うノーベル賞

悠久の大地耕し夢を見る

八尾市 赤木 妙子

団扇蚊帳母の小言と盂蘭盆会

煙い人いつでも予告なしにくる

心の鬼をなだめすかして同居する

袖の下師は実践をしてみせる

八尾市 田邊 浩三

新聞僚競ってほしい透明度

透明度探れば恐い米ルート

人生の答え求めて古希の坂

食欲とメタボリックが睨めっこ

八尾市 寺川 はじむ

ぶっ壊すただし世襲は別と言う

グロッキー言うて余力のある女房

胃薬を買ってトラのテレビに鬻りつく

にこにここと聞いて自分の意志出さぬ

寝屋川市 岡本 勲

携帯で夫泳がす妻の知恵
触れただけ指先うずく愛でしよう
一回もチャンスにのれず無位無冠
朝の服これやめられぬ愛煙家

寝屋川市 小嶋 みさと

遠い日の熱い想い出彼岸花
秋晴れに備前の里は素朴なり
旅の空遠う自分を見付けたい
終盤を迎え身辺整理する

吹田市 中村 十八娘

平熱になれば些細な事でした
カラフルな葉並べて旅の宿
定期券夢が欲しくて途中下車
火の鳥にしたのはあなたカンナ燃ゆ

吹田市 藏田 光子

カラフルにコスモス揺れる絵具皿
涼風が吹いて訃報を耳にする
浄土とや見事な夕日秋彼岸
色づいた山を尋ねて里の秋

河内長野市 針生 和代

国の手綱しつかり握る人が無い
家計簿の手綱を締めて一戸建て
それぞれを奏でて恙無い夫婦
名優の千秋楽に酔っている

河内長野市 内海 綾乃

老夫婦あれこれだけで通じ合う
内科外科年ですねと言うドクターは
オリンピック元気で四年後は見てみたい
ガソリン高値孫達の足遠くなる

河内長野市 木太久 正一

殊の外秋刀魚おいしい北の海
金木犀散るまで待とう剪定を
変り映えない首相がくるると
マルチーズ健太と遊び今日も無事

河内長野市 黒岩 靖博

弁解無用責任は俺がとる
どなたかと日傘の主が気にかかる
不意の客居間のガラクタばれました
ざりざりと巻いて目覚める古時計

藤井寺市 吉田 喜代子

客が来るグラス冷して待つ時間
母恋し初めて母の居ない秋
猛暑去りお茶の温みが手に馴染む
蜂蜜はいのちの滴採るヒト科

藤井寺市 俣野 登志子

古稀の今後悔しきり不勉強
巡る四季彼岸花咲く頃が好き
長電話しながらいつも拭き掃除
賀状予約スローライフの邪魔をする

咳一つが命とりにもなる加齢

藤井寺市 津田シルク

今風に考え義理を一つ欠く

誰が奏でるオカリナの音に仲直り

琵琶の音が重たい過去を背負うよに

藤井寺市 伊藤アヤ子

ゆず貰い秋刀魚三匹買いに行き

街角で稲の切株香り立つ

ざりざりの暮らしは常と笑う妻

ざりざりに迷った末のUターン

高槻市 片山かずお

言い過ぎて覚めた視線の中で浮く

角のある石で頼りにされている

逢いたさの行き着く先にある苦海

親の夢DNAに無理がある

箕面市 寺井柳童

幼稚園まだ不揃いの笛太鼓

もしも僕女だったらやややこしい

喜寿ま近未だふらふら赤ちようちん

ライトアップ消えて気が付く星月夜

富田林市 古田千華

打てば響く太鼓を徒えている

無理せずにいっぺん引いてみてはどう

台所詠めばやさしい風がふく

古傷の話は続く赤ワイン

はつきりとしなない態度で逃げている

下手なりに自己満足の円熟期

最後みな涙を武器の演技力

一杯の酒でくずれるかたい人

岸和田市 中岡香代

ジャンボ籤抽選日まで夢の中

古稀近く体内機械油乞う

合い服の要らぬ日本となりにけり

鈴虫が気を静めよと草の中

宝塚市 丸山孔一

木屋町も格子を残しアジア風

格子戸の中はアジアの隠し味

暑い国香辛料が満ちあふれ

賀茂の風ガンジスの風高瀬川

門真市 矢阪英雄

戦死した父の倍生きいま平和

大丈夫地蔵も一人里の秋

独り立ち際立つこともなく生きた

念仏に生命あずけて愚痴ばかり

枚方市 小川良吉

悪いとこばかり見習う欧米化

墜ちて行く国の歴史の中に居る

いける口だけが亡父の置き土産

くだおれ味で太郎に追いつけず

茨木市 島田誠一

生駒市 小西 稔

温暖化自然破壊の置き土産
中国の土産食べ物もう御免
越える年苦勞重ねて花開く
越える山ほっと一息先長い

尼崎市 小池 幸子

外灯に守宮住みつく秋夜長
老いの腰生きる頼りのコルセツト
気分変え友に便りの色インキ
実る秋何を食べてもおいしくて

尼崎市 桑原 東園

老いの知恵もらう脇役バネとする
お互いに持ちつ持たれつ難を越す
待たされることは辛いが夢がある
海鳴りが強くお神輿送り出す

尼崎市 藤岡 りこ

つまみ食い孫と一緒に許し合い
物干しに主婦の人柄偲ばれる
偲ぶ会静かな亡友に似てしずか
回転寿司孫が仕切った夏休み

尼崎市 河津 正治

恩讐を越え歳月が手を結ぶ
重ね着で隠すメタボの母愛し
度を過ぎた敬語に少し距離を置く
忘却と言う字が脳に突き刺さる

西宮市 石野 照代

過疎の村人待ち顔の柿たわわ
玄關の落ち葉は秋の宅急便
組体操心一つでみな主役
死ぬまでの残り時間は宝物

神戸市 早川 孝子

国民を守るふりする多数決
我慢する機会だんだん減ってきた
帰郷してリセットしてるねじを巻く
信号を守りチャンスを待てる人

神戸市 山崎 武彦

魔法から醒めてガラスの靴光る
親しいが少し取ってる車間距離
夫婦とはとろ火で煮込む粥の味
雛祭り女系家族に囲まれて

神戸市 武田 恵美子

主治医の説明聞くと卒寿言う
ついてきてほしいんだろと行きたがる
人の句でいっぱい笑い福もらう
なににしても若さはいいとくやむとし

三木市 山口 久子

彼岸入り忘れず咲いた曼珠沙華
稲刈に邪魔な台風やってきた
良き友と喧嘩別れが夢に出る
秋雨にぬれて仕事も乙なもの

明石市 糀谷 和郎

噴水が弾けて予約思い出す
いい笑顔ほどよく毒が抜けている
日常を切つて惰性を絞り出す
生きてきた証をつなぐ点と点

三田市 辻 開子

へそくりは内緒にできるほどもたず
孫とする折紙教室ポケ防止
血圧があがる難題もち歩く
夕方のスパー献立かえさせる

三田市 福田 好文

佳句一つ出そうで出ない露天風呂
孝行と言う字が辞書に今もある
実家の離れ我が青春がこだまする
芋のつる佃煮にした母の味

加西市 金川 宣子

斎場がつぎつぎ出来て落ち着かず
手のひらをメモ書きにしてシヨッピング
子にそろり従う振りの老後術
加筆されど綺麗な出来上がり

加東市 岩本 美緒子

引き算の通帳二つ使い分け
短冊画遊んでいるのは無の時間
一人居の無言の行の日々を積む
腸の検査入院ひと日立ち止る

加東市 黒崎 美紗子

草伸びる元氣と勝負するわたし
コスモスの風揺れるようすぎる日々
カラオケの誘い嬉しくよい返事
芋掘ればつらなつて出る心地よさ

加東市 安達 厚

過疎化して鹿の声聞く里の墓地
横文字の店の名前はすぐ忘れ
バラリンピック下げた頭が上がない
もうあかん言うて卒寿に笑われる

池田市 多田 契子

メラミンに牛の反乱あつてよい
汚染米平成の乱起こさねば
人生の後半おそうテロリスト
食べて寝て医者通いだけ勿体ない

池田市 上山 堅坊

騙されても後悔しない恋心
カレンダーの予定に奮い立たされる
重い重い買い物みんな胃に入る
終わるまで豆腐料理は豆腐だけ

美作市 小林 妻子

悪事あくじまた音程がずれている
柿簾正月忘れてはいない
老人ばかり攫つて行った福祉バス
地に還る男に夕陽温かし

府中市 馬場利子

香南市 桑名孝雄

終章へ飾る絵筆の彩を選ぶ

ボンバル機行きも帰りも出た車輪

スランプの坂でゆっくりリフレッシユ

齢八十出処進退どうしよう

少しだけ背伸びしたけど無理となる

快いご挨拶まで短詩型

あたたかい終着駅に夫がいる

借りて来た猫もかくやと飲んでいる

竹原市 六田半徳

大洲市 花岡順子

筆順の一面目には気を配る

シャボン玉くらの虹で丁度いい

雨上がり古里の虹鮮やかに

負け犬の呻き奥歯から漏れる

尺八を手づくりの叔父音も確か

アピールはしない昼行灯でいい

物価高無駄を省けと天の声

中国の鰻身元を語らない

宇部市 高山清子

今治市 渡邊伊津志

去年まで此の坂平気だったのに

コケティッシュな笑顔が今日も逢いに来る

とつおいつ余生の歩幅乱れがち

折鶴に心の乱れもろに出る

秋晴れを吸った布団に大の字に

お洒落着にポケットの無い不自由さ

まろやかな言葉にささる骨がある

貸す方が憎まれ者になる世情

高知市 松尾憲子

福岡県 林さだき

探しても無い初恋の解熱剤

なるほどと同じ話を聞いてやる

オメデタは想定内の披露宴

しあわせはニユース見ながらストレッチ

あと少し詰めめ甘さは親譲り

またしても総理の首が転がつて

酷使した体にゴメンありがとう

折り合うて平行線のまま老いる

香南市 近森功

唐津市 北村松風

問診の酒とたばこは口籠り

多産系家長に義理の鬘斗袋

自分史の余白に記す孫曾孫

老いの花咲いて夕餉に箸二膳

婆さんよ子供ニユースが始まるよ

庭園も吾等育てた芋畑

一気呑みしてスピーチの出番待つ

浮き沈みあつた想い出喜寿夫婦

唐津市 吉富節子

公園も昼と夜との顔を持ち
雷が怖くなつたネ温暖化
終戦に抱き合い泣いた友が逝く
満腹に戦後を偲ぶ旅の宿

唐津市 岩崎 實

戦争を語りはじめた元兵士
モンゴルの力士の名前雄大ね
太陽へ向かつて歩き月を背に
名声を捨てて取り組むその姿

鳥取県 大塚 美代子

おみくじを選んで運を探し出す
好きな曲聴いてはかどる野良仕事
若者に負けじと走りけつまずく
大安で結んだ愛がほどけ出す

鳥取県 岡本 幸枝

講演が終りお隣り目を覚ます
拗ねた尻にあしらわれてる未熟ママ
放任で遅しかつた子育て期
近頃はときめきも無く平和です

鳥取市 谷岡 清子

松茸飯おいしく年に一度きり
すっぴんも老いて平気と胸をはる
恋の花月夜に赤く咲いている
夫婦愛信じて今日の幕があく

鳥取県 田口 清帆

飽食の陰に薄れゆく感謝
走つても貧乏神が付いて来る
人生も季節も秋の中に居る
ダイヤより欲しい貴女の思いやり

鳥取市 山口 千代子

コスモスの可憐な姿風と舞う
夜が明ける五体の動き感謝する
暑けりや嫌い寒いと世話になる毛布
地震水害逃れた土地に感謝する

鳥取県 岩崎 和子

足並みをやつと揃えて組閣する
足並みを揃えた組閣穴が明き
晴れた朝皆うれしそう著動く
八つほど病気山坂越えて来た

鳥取市 大前 安子

鬼やんま首を傾け目を合わす
萩ゆれて地蔵に合わす手にこぼれ
せせらぎがむくつむくつと石を越え
産声に拍手ばかりはして居れぬ

鳥取県 飯野 菖子

秋風が誘つてくれるオアシスへ
拒むより素直に生きて胸をはる
幾山河生きた人生クイズです
野の花にかわいいわねと声かけた

同窓会誘いの電話国訛り

鳥取市 津村 律子

毒地獄晴らすかのようノーベル賞

新米の一粒ずつがダイヤモンド

春は菜の花秋はあわだち草の土堤

鳥取県 加賀田 志延

熟れた柿並べて鳥を待っている

供養にもなるかと母の花を描く

片付けはアルバムなんか見ないこと

補強した腰がじょうずに鍛揮う

鳥取県 斉尾 くにこ

胸のドア叩く今までにない音

退社時間牽制をして残業に

優しさの見えないものを追っている

飛び込めとコスモスの海笑つて

鳥取市 坂本 智子

去る者は疎し夢にも出てこない

造語増え日本のことは消えてゆく

母介護言葉ひとつにとまどいつ

腰高にイニシャル効かせ歩いて

鳥取県 岡村 孝明

無農薬稲田にトンボすいすいと

意に沿わぬ社是に正論旗を振る

酒肴断つて祈るは妻再起

すらすらと読めて書けないもどかしさ

俺一人居てもこの駅無人駅

黙認のパスポート持つ渡り鳥

散る前に人を集める紅化粧

今出雲神のサミット会議中

倉吉市 酒井 美美子

夫婦坂時を刻んで喜寿の春

反対意見不穏な空気流れ出す

居なけりゃ困る空気のような夫

誕生日忘れて妻がそっぽ向く

倉吉市 前田 喜美子

相棒と思う幸せ共白髪

番人が食の安全おびやかす

大臣の失言それが本音かも

清め塩慣例ならば振つとこう

倉吉市 藤井 美津恵

同期生足をさすつて皆同じ

良く忘れ秋の七草よみ返す

絵手紙の大きなかほちゃはみだして

金木犀匂うろじ路地神輿行く

米子市 吉田 陽子

失敗をし尽しこの世おもしろい

淋しさに携帯メール溜めたまま

遠くから子の長所だけ見て暮らす

ベット飼う相談をする余命表

境港市 中井 虎尾

米子市 小塩 智加恵

几帳面納得出来る拭き掃除
自分史は派手な衣装を着せておく
気がつけば夫の歩幅小さくなる
梨の友米の友あり秋の幸

米子市 見山 温子

目ざめがいい隣の庭も掃いておく
秋の夜長単行本も読み切れる
気を張らず同じ目線の友がいる
仮面つけ夫唱婦隨を子に見せる

安来市 原 煩惱児

炎天に耐えた夏の花秋の花
遠雷が続き不気味な夜となりぬ
独り観月何故か淋しい罨に落ち
鮎も好き猪も好きと孫電話

松江市 松浦 登志子

朝ドラの訛りに文句つけたがる
携帯やパソコンに目が悲鳴あげ
花激写自己満足の世界かな
玉入れに出たばかりに神経痛

松江市 相見 柳歩

天狗さん格差社会の海にいる
健やかに病をひとつ胸に持つ
青春の力を試すストレート
千年の後に神話になるページ

松江市 山根 邦代

踏み出しは右だ左と迷わない
生かされて感謝の心惜しみなく
元氣出る孫の電話に励まされ
孫と来た祝いのケーキ年もらう

雲南市 武島 ちよえ

伝統の行事受け継ぎ過疎に住む
それなりに支えています脆いネジ
言い返す言葉飲みこむ歳になり
栗の実が弾けて秋が走り出す

雲南市 福岡 博利

故郷の小川にホタル居るだろか
日本語の乱れやっぱり国乱す
泣ける場所持つてるなんてうらやまし
彼岸日に亡兄が呼ぶのか故郷へ

「各地句会だより」掲載について

川柳塔社の小集句会の紹介・アピール・会
の様子などお書き下さい。会員の集合写真を
添えて下さい。順次掲載させていただきます。

行数―たて20字×54行(1080字)

苦闘四十年

麻生路郎

私が川柳に手を染めてからもう四十年に
なる。タツタ四十年という考え方もできな
いこともないが考えようによつては四十年
は決して短いとは云えない。

田山花袋が『田舎教師』という小説の書
き出しに、四里の道は長かつたと書いてい
るように、僅かに四里の道すら考えようによ
つては長いのである。まして四十年の歳
月は私にとつて決して短くはなかつた。よ
くもひとつの事を飽きもせず続けてきた
ものだと我ながらあきれもし感心もする。

私は明治三十七年の春、そのころ出入橋
にあつた高商予科商大の前身に入学した。
入学と同時にクラスで読売新聞をとつた
が、それに読売柳壇と称する欄があつた。
これに吸いつけられて投句をはじめたの
が、私が川柳をやるようになった初めであ
る。選者は田能村朴念仁氏であつた。
当時東京柳壇は剣花坊一派、久良伎一派
と朴念仁の読売派の三派鼎立という形であ
つた。

同じころ堂島の浜通りに「大阪日報」が
生まれ、これに「浪花樽」という柳壇が出

来た。ここへ盛んに投句をしていた投句家
同志がお互いに会合をやるようになり、小
島六厘坊一派とも知るようになって合流、
大阪の柳界といつたようなものが出来た。

そして自ら天才と称した小島六厘坊が大
阪柳壇を牛耳つた。六厘坊が錢に関する雅
号の持ち主なので六厘坊一派の多くは、七
厘坊、半文錢、当百といったように錢に関
する雅号が多かつた。

その頃の柳誌「葉柳」は六厘坊の主宰す
るところであつたが、明治四十二年四月に
刊行した桜花号を最後として消えてしまつ
た。

それは六厘坊が二十二歳で夭折したので
六厘坊亡きあとを抑えて行く人材がなかつ
たからである。

私にとつてその当時は苦闘というより
も、むしろ楽闘の頃であつた。というのは
一般に句の目標が柳樽の句を凌ぐという傾
向にあつたので、創作上の悩みがそれほど
に深刻なものがなかつたからである。とこ
ろが明治四十二年、即ち六厘坊が亡くなる
少し前から従来の作風に飽き足らず作風に
新しい傾向がしようじ、私もその一人であ
つた。

同志と共に「轍」を出したがその後上京
し、東京の「矢車」に拠点を移したが、廃
刊となつて発表機関を失つた。それでも初

志を翻すことができず、大正四年、川上日
車氏と共に「雪」を刊行して新しい傾向の
句にひたむきに押し進んだ。

それがため新傾向と呼ばれて既成派から
は嫌厭せられた。この当時各派共に盛んに
分裂して鏝を削つた。そして互いの心のう
ちには、自派の作品に対して自負心の強い
割に反響の少ないのに苦慮していたのは事
実である。「雪」は柳界よりも寧ろ文壇人
に認められていた。漱石が読んでいたとい
うことなども私達同人をうれしがらせた。
が「雪」は大正六年の二月号で廃刊した。
それは文芸的日刊新聞を計画するために廃
したのであつたが、日刊新聞は遂にでなか
つた。

(中略) 柳界は麻の如く乱れて全く收拾す
るところを知らない。何人も川柳を愛して
いるには違いないが、自派独尊であり、兄
弟の聞き合ひである。これではいけない。
お互い川柳家同志が、いかに可なりとして褒
めちぎつたところで、一步社会へ出てみれ
ば、まるで社会から川柳の存在が認められ
ていないではないか。私は日車氏等の柳誌
への参加要請、友情をも振り切つて、社会
的な柳誌、社会を対象とする柳誌刊行の計
画を進めたのであつた。(昭和18年12月)
(漢字、送り仮名は現代用いられているも
のに替えています) つづく

愛染帖

新家 完司 選

三田市 福田 好文
やつと秋何を着るのか妻に聞く

(評) 炊事洗濯、整理整頓、すべて妻に任せつきり。自分のことなのに、何を着ていいのかどこにあるのか、サツパリ分らない。

羽曳野市 徳山みつこ
脳味噌になつてくれんかなア豆腐

(評) だんだん少なくなつてゆく脳細胞。理想的食品の豆腐が少しでもカバーしてくれたら、本当にありがたいのであるが…。

枚方市 海老池 洋
昼飯を食うと眠たくなる余生

(評) 緊張感が足りない、と言われればその通りであるが…。ずっと緊張して生きてきたのだから、余生くらいのおんびりさせてほしい。

阿波市 三浦千津子
スピードは落ちたがペダル踏んでいる

(評) 「じゃまだー、どけどけー」と縦横無尽に走り回っていた頃のスピードはないが、愛用のチャリンコと足は今でも現役である。

弘前市 福士 慕情
釣り上げた岩魚いつきに絞めてやる

(評) 死に到るまでが苦しいのは魚も一緒。その苦しみを少しでも短くしてやろうという思い遣り。いい人に釣られた岩魚は幸せ?

藤井寺市 太田扶美代
群集がみな善人になる花火

(評) イラクから帰還した兵士は花火の音にも戦慄を覚えるという。誰もが花火を楽しめるこの平和が、いつまでも続きますように!

海南市 小谷 小雪
ほめられたこと思い出し子をほめる

(評) ほめられると元気になつて、ヤル気が出てくるのは誰でも一緒。大きなところで眺めると、誰にも良いところがいっぱいある。

札幌市 三浦 強一
地動説実感してる千鳥足

(評) この大地が高速回転しているとは信じがたいことだが、お月さまが二つに見えて、足がもつれてくると、「ナルホド!」と思う。

大阪市 太田としお
天国はいつも春やと聞いている

(評) 天国はそうかも知れないが、地獄はいつも酷暑と極寒という噂。天国へ行けるのか地獄へ送られるのか、それがモンダイだ。

藤井寺市 鴨谷瑠美子
銀行へ趣味の園芸読みにくく
身のまわり整理している秋日和

大阪市 谷口 義
基会所に父が居そうであと覗く
怠けていても磨り減っていくからだ
肩の荷を下ろすと雨が降っている

八王子市 播本 充子
だんだんと自分の声が好きになる
舌打ちが続くATMの前
冬が来る前に生き甲斐探さねば

吹田市 穴吹 尚士
阪神のユニフォーム着せ肩車
言うつもりないのに口がどっこいしょ

大阪市 大川 桃花
魚より骨抜き易い色男
全力で御辞退しても来る老後

海南市 三宅 保州
マネキンのスッポンポンにうろたえる
宇宙から誰か覗いている気配

鳥取県 青尾くにこ
偽つて生年月日書けません
わたくしの給与田舎に合っている

西宮市 牧淵富喜子
間に合ったバスでくしゃみが止まらない
客観視すればほとんど付焼刃

神戸市 木村 忠義
笑顔とは咲いたばかりの花のよう
間違えぬようスニーカーで妻焼す

豊中市 荒巻 夢
弟の二倍も生きて彼屋花

倉吉市 松本よしえ

道路工事旗振る人に会釈する
半額のこわれ煎餅買ひに行く

弘前市 高瀬 霜石

金はないけれど信用ちよつとある
偽モノに慣れてしまった僕の舌

和歌山市 上地登美代

詰め放題おんなは強いなと思つ
神様の視野に居たくて手を合わす

大阪市 古今堂蕉子

楽天家と貧乏性が添いました
花鉢案外他に使えない

堺市 荻野 像山

カーナビの出る幕がない市場行き
坊さんが来るので掃除する仏間

西宮市 緒方美津子

陶芸教室青壺は作らぬ
長女には出来ぬ四女の甘え方

枚方市 丹後屋 肇

鳩の糞被つて耐える平和像
我楽多になつてしまった夢の数

和歌山市 木本 朱夏

なむあみだなむあみだぶと踊り食い
飄々と間をとり敵をつくらない

河内長野市 坂上 淳司

米子市 政岡日枝子
唐津市 山口 高明

京都市 高島 啓子

整頓をして裏方は帰途につく
サザエさんと今も交流しています

大阪市 柴本つは

どことなく冷たい箇条書きの文
妻の留守三日位が丁度よい

和歌山市 喜田 准一

留守電に四角四面の父の声
だんだんと今日が始まるしじみ汁

奈良県 渡辺 富子

何の因果と亡夫の十八番の里の唄
団子屋でピージーエムの琴を聞く

寝屋川市 森田 麗

満月がゆがんで見える失意の日
汗かかぬ人がポーンナス査定する

高槻市 佐甲 昭二

助けてと練習してる子供たち
かくれんぼはしているように鍵がない

芦屋市 黒田 能子

踊り場に立つて何しに来たんやろ
日陰でも芽を出すさほれ種の意地

羽曳野市 吉川 寿美

檻の猿も退屈そうに僕を見る
皇室のことば少しの無駄もない

鳥取市 岸本 宏章

笑顔だけはめられたつてももの足りぬ
また転びもう転ばぬと老母は言う

西子市 黒田 茂代

わたくしの脳に重量感がない
振り向けば歩んだ道は千鳥足

因分寺市 野崎 勝

テレシヨップ老母に買いたい物ばかり
砂利道を駆けた日もある父の靴

高知市 小川てるみ

体育の日決つて匂う金木庫
鰯雲たどつて行けば日本海

豊中市 神野宇乃子

長生きの秘訣 参考にもならん
しかたない帰つて妻に謝ろう

堺市 奥 時雄

夫見送る荒れ放題の庭 九月
この部屋できょうから私未亡人

尼崎市 春城 年代

草取りへ完璧主義が治せない
剪定をされたくないだろう庭木

鳥取県 西谷 悦子

かわいいと言わねば怒る孫娘
交番へお留守ですかと声かける

三田市 堀 正和

返信は絵文字一つで足りている
パスワード機の隅に書いてある

寝屋川市 籠島 恵子

淋しさにおそれそうな賑やかさ
ごちゃごちゃの頭を整理する早寝

堺市 宮本かりん

榎原市 安土 理恵

男と女境界線が頼りない

牛蒡ささがき爪の汚れは主婦である

松江市 松浦登志子

時すでにおそし栗の実落ちている

あれこれと考えすぎた脳に菓子

藤井寺市 鈴木いさお

晩酌が終ると一日が終る

極楽へ行けるかどうか胸に問う

鳥取市 有沢せつ子

境界の蜘蛛の巣だけはすく取る

ほうれんそうの茹で汁草をやっつける

神戸市 田中 章子

不幸には人も自然もみな優し

オール電化に住み原発ハンタイ

吹田市 早泉 早人

薬より酒をあおれば治る風邪

趣味なのに遊び心が欠けている

豊中市 松尾美智代

帽子棚に忘れて秋の一人旅

風に誘われ今日の散歩はとなり村

鳥取市 倉益 一瑠

食べて寝て遊ぶ極楽ではないか

寒いふところ笑顔でカバーしておこう

大阪市 岩崎 公誠

地下鉄も市バスもタダで遠回り

右を見て左を見たらすぐ忘れ

八尾市 村上ミツ子

年金日だけはちやほやしてくれる

いらんもの捨てたら何もなくなつた

宇部市 平田 実男

久々の下駄を喜ぶ土踏まず

自慢げに痴漢をされた事を言う

大阪府 米澤 俣子

食洗機来てから夫皿洗う

何てことしてくれるのか汚染米

大阪府 津守 柳伸

ゴミ出しのあしたへ早寝するつもり

気が向けば掃除洗濯して独り

西宮市 片山 忠

自分より憐れな人を探す癖

袋掛けしたことがない梨娘

鳥取市 福西 茶子

凡人に芯からなれる縄のれん

堺市 和田つづや

品格はさておき酒で盛り上がる

三田市 北野 哲男

人間のかたちで樹々が奏で合い

枚方市 小林 わこ

耳掃除してもいい話がこない

京都市 都倉 求芽

ルイ・ヴィトンそれがどうしたと言つた

藤井寺市 高田美代子

キッチンには出城メガネと辞書を置く

唐津市 市丸 晴翠

鳥取市 竹信 照彦

腹一杯秋の空気をつたで吸う

ただで吸う空気にお礼言つておこ

神戸市 山田婦美子

空耳へベッド這い出す一度二度

躰かずしかし一歩も踏み出さず

八尾市 高杉 千歩

王子酒信じてあとは眠るだけ

八合目辺りで養えてくる生氣

大阪府 井丸 昌紀

海原の深さを知つた古稀の辞書

ピョンヤンの雪は今年も冷たから

榎原市 居谷真理子

墓参り催促してる彼岸花

がやがやとはたがうるさい老いの恋

堺市 村上 玄也

手応えのないまま終る老いの恋

大きなを比べるためのマツチ樺

吹田市 中村十八娘

母さんの童話おやおや電池切れ

宇宙へ行く孫のためなら貯金する

唐津市 樋口 輝夫

岩山 岩本 浩一

大阪府 萩原 大朔

堺市 志田 千代

唐津市 坂本 蜂朗

和歌山市 福本 英子

浜松市 岡田 史郎
株下がるサンマも柿もうまい秋

富田林市 古田 千華
株式欄黒いおにぎり並ぶ日々

大阪市 伏見 雅明
兜町鞍馬天狗も現れず

大阪市 尾崎 ゆめ
メル友がメールの域を越えてくる

神戸市 山崎 武彦
踏ん切りをつけるためには酒がいる

加東市 黒崎美紗子
渋滞のニュース出掛ける気が失せる

堺市 羽田野洋介
ふところより心のゆとりほしいもの

鳥取県 石谷美恵子
じゃじゃ馬の頃を知ってる人も減り

豊中市 水野 黒兎
大正の母生き生きと鯨尺

三田市 上垣キヨミ
思索した揚着馴れた服で行く

泉佐野市 稲葉 洋
寝込んだら老いが二倍も進みそう

河内長野市 水谷 正子
菊の花沢山貰う今日は吉

鳥取市 土橋 螢
昭和史を遠くに海が凧いでいる

和歌山県 森下よりこ
仏さま今朝はコーヒー入れました

高槻市 富田 美義
控え目という常備薬すぐ忘れ

加東市 中上千代子
好きな事している時は疲れない

鳥取市 中宇地秀四
メタボとかトドとか言われバナナ食う

奈良市 尾畑なを江
振り込めの誘いあつても火の車

福岡県 林 さだき
聞き役にまわつて妻の愚痴を消す

藤井寺市 若松 雅枝
欲張つて貰つた菓子が食べ切れぬ

四條畷市 吉岡 修
起きられるかたまに転んで試してる

大阪市 神夏磯典子
満月が見てる地球の裏表

大阪市 坂 裕之
のほほんと生きてる僕は果報者

大阪府 高木 道子
終焉は神に預けて母が翔ぶ

鳥取県 細田 裕花
寂しいさびしいと言つて翔んでいる

寝屋川市 富山ルイ子
母の死に後悔をすることばかり

神戸市 山口 光久
川の幅わからぬ人の軽はずみ

鳥取市 吉田 弘子
お見舞いはくだものよりも日銀券

シドニー 坂上のり子
落ち葉散るパークにジャズが響く午後

紀の川市 辻内 次根
補助食品元氣な人が食べている

東大阪市 久米奈良子
鶴折つて明日の検査を吉とする

大阪府 澤田 和重
とんちんかんな相槌打つて嘘がバレ

東京都 岸野あやめ
誕生日サービス券で買った薔薇

奈良市 矢野 良一
帰りたい棚田畦道彼岸花

日高市 根岸 方子
椅子席に変わり法話に足が向き

西宮市 藤本 直
元氣かと問われ返事を探してる

長岡京市 山田 葉子
老老介護 毎日余力試される

大阪市 小谷 集一
健康な妻の寝息に癒される

大洲市 花岡 順子
もやもやが消えた訳ではない手打ち

鳥取県 大塚美代子
好きな子の前では爪を隠す猫

岩出市 村中 悦男
裏庭を喜ぶ花もたんとある

大阪府 桑田ゆきの
白菜が朝市の座を占めている

誹風柳多留一篇研究 40

伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦・山口由昭

小栗清吾

清 博 美

293 堀こしに有ルに高なわ越エて行

伊吹 堀越しにあるのは、三田の三角と呼ばれる岡場所。芝横新町の五光稲荷の並びに五軒の局見世があった。堀越しという近さは、薩摩屋敷であつて、芝増上寺のものではない。だから薩摩屋敷の武士たちが、近くの三角へは行かずに、高輪の先の品川遊郭へ行くというのである。

三角へ丸と四角な客が来る 七一9

小栗 増上寺と思う。理由次の通り。

①増上寺の隣の芝明神に岡場所があつた。境内にあつたらしいから。文字通り堀越しである。

②一方、三田の方は、薩摩屋敷からは、他の

武家屋敷をはさんだ先にあり、「堀越し」の感じではない。

③武家屋敷の外周は長屋になつてゐるから（薩摩屋敷がそうだったかどうか調べてないが、そうだと思う）、「堀越し」の語感に合わない。寺院の外周は堀である。

294 ちんどくをきらすまいぞと呂后ひ

伊吹 鳩は、中国産の毒鳥。その羽根をひいた酒を飲めば死ぬといわれている。鳩毒は、鳩の羽根にあると言ふ猛毒。呂后は、中国前漢の高祖（劉邦）の皇后で、二代惠帝の生母。高祖の死後、実権を掌握して功臣や劉氏一族を毒殺などして迫害した。そのためいつ必要となるかもしれないので、鳩毒の貯えをなく

してはいけないと呂后が言つただろう、との想像句。

呂太后毒がいハ手に入ツた物 傍三29

— 毒飼は、毒を飲ませること。

全員 賛。

295 つげ口をするてふによいな諷の師

伊吹 習いに来てゐるどら息子の両親に、最近あまり来られませんが、謡のお稽古を口実に遊里へでも行かれてゐるのでは、と告げ口をする謡の師匠。これでは弟子が集まらず、手元不如意になるのも無理からぬこと。

又おれをうりてんけりと諷の師 一〇9

全員 賛。

296 ひるいなきぞう言をきく朝かへり

山田 朝帰りの亭主。当然に、怒り心頭に発している女房の「比類無き雑言を聞く」ことになる。弱みがある亭主としては、

い、まくられてだまつてる朝かへり

天元宮1

山口 賛。ちよつとした文句取でしょうが、

「比類無き雑言」がミソ。

小栗 賛。角ばつた表現。

清 この文句、何に有るのでしょうか。

297 わづかな月も品川数に入

山田 二十六夜待。「陰暦の一月と七月の二十六日の夜に月の出るのを待って拜むこと。月光の中に弥陀・観音・勢至の三尊の姿が現れるといわれ、高輪から品川あたりにかけて盛んに行われた。六夜待」(日国)。陰暦の二十六日だから、月もわずかしかな顔を出さない。

とんだ事ミだの来迎もの日なり 安五天?
という句の通り、品川の遊里では物日、つまり紋日あった。

八ッ過ぎに出る月迄もの日也 傍二20
山口 賛。吉原の月の紋日との対比が含まれています。

清 賛。

298 御妾に出るまへ所くでほしかられ

山田 お屋敷へ御妾奉公に出た女は「御妾に出る前所々で(嫁に)欲しがられ」た者である。器量はもちろん人柄も、また家柄も、嫁として申し分なかったであろう。それが一転「御妾に出る」ことになった。それに至る

背景までは分からないが、大変なドラマが展開されたに違いない。

あいきやう娘そこから愛からも 一三10
小栗 賛。万句合(安「梅」)の前句は「も好きなこと」。これを探った川柳さんの理解はさて。

清 賛。

299 舟宿に左伝四五巻とんだ事

山田 左伝は「春秋左氏伝」。中国の十三経の一。それを船宿に預けたというのだ。船宿は「③船で吉原に通う客の送迎をする家」(日国)だから、預け主は当然吉原に行っている。左伝は、家を出る口実に使ったのは明白で、まさに「とんだ事」。

是か穴ものと四五冊うたひ本 安四満1

清 賛。

300 あかすりをかせとりきんでみここのり

山田 聖武天皇の光明皇后は、浴室を設けて人々に沐浴させていたが、自ら千人の垢を洗うことを発願された。その千人目となったのがハンセン病患者だった。しかし、皇后は何ら臆することなく、その者の垢をすり、膿ま

で吸ってやった。すると、その者はたちまち仏の姿となって、光を放って飛び去ったという。

主題句は、この故事を踏まえたもので、端女あたりに「その垢すりを貸せ」と大層な意気込みで仰られたというのだ。

願滴の湯で光明を洗出し 六九2

清 賛。

301 ちへのあるやつ岩たけを取はしめ

山田 岩茸は「つまり石茸である。柔薄で、織ったようである。外皮は滑らかで青白色、内は粗で黒色。その黒色の処は石に付いており、微香があり、味は淡くて微甘。常に峯頭巖石の上に生える」(「本朝食鑑」菜部・石茸)というもの。

どれほどの珍珠かは知らないが、

岩茸はそんなに喰ウ物でなし 宝八満
であることは確か。その取り方は引用文にある通りだが、それはそれは大層なもの。そのような方法を考えて岩茸を取り始めた人は、

余程智恵のある奴だといっているのであろう。
おのが身を岩茸取ハふごおろし 一二三23

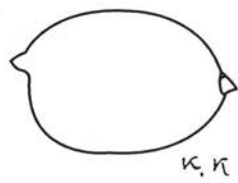
山口 賛。智恵がないと出来ないこと。
清 賛。これほど味のない食べ物も珍しい。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

投句数 七一〇句



「去る」 高瀬霜石選

風去つて葦は正気を取り戻す
私を置き去りにして波がひく
あなたとは違うんですと去つた人
片付けもしないで去つてすみません
一難は去つた乾杯でもするか
髪のを去つたヒュッと連れ去る秋の風
去る人にこつそり贈る美辞麗句
まわれ右いつかはみんな去つていく
難問を置き去りにする波頭
わたくしが去ればまともまりそうな会
ふところが深い人から去つてゆく
去る者が去つて膨らむ蕾たち
ほんやりとしてたら愛が逃げていた
群れを去りわたし自身の絵を書こう
過ぎた事言うまい月に笑われる
二拍子で枯葉カラカラ転げ去る

弘前市 齋藤 嘉
藤井寺市 太田扶美代
和歌山市 喜田 准一
出雲市 小豆澤歌子
美祿市 安平次弘道
橋本市 石田 隆彦
黒石市 相馬 一花
藤井寺市 高田美代子
海南市 小谷 小雪
米子市 白根 ふみ
米子市 青戸 田鶴
八王子市 播本 充子
八王子市 川名 洋子
吹田市 大谷 篤子
香南市 近森 功
青森県 松山 芳生

「去る」 木本朱夏選

ヒーローが去る王ちゃんもキヨハラも
剛の者らしき去り方 縮形拳
島一つ消し去りそうな温暖化
孫去つて金魚の餌を買いに行く
約束もなく現れてそつと去る
雨去つて私の旅に虹が立つ
彗星去る再会を待つおじいさん
振り向かぬ背ながダンケというている
夕焼けて僕の余生の今日が去る
来る人も去る人この世ふきだまり
過去たちがつい顔を出す誕生日
引き際はスパッと大根切るように
勇退の笑顔は花の散るように
さよならはモカのおいしい店だった
さよならを言ってしまったのでひとり
スマートに別れ疼きをもてあます

藤井寺市 鈴木いさお
大阪市 渡部さと美
池田市 上山 堅坊
枚方市 伊達 郁夫
栃木市 岡野すみれ
大阪市 川端 一步
豊中市 谷川 勇治
尼崎市 春城 年代
熊本県 高野 宵草
東かがわ市 伊勢八重子
大阪府 神野千恵子
大阪市 小泉ひさ乃
日立市 加藤 権悟
富田林市 古田 千華
大阪市 岩崎 公誠
河内長野市 山岡富美子

去る人は追わずに傘のしづく切る
過去達がつい顔を出す誕生日
闇去つてみれば小さなことでした
すし食べるまではべつたり傍にいた
一人去り二人去りして次は僕
鏡の裏へほとんど逃げてゆく若さ
さよならを言ってしまったのでひとり
あの人帰るとすぐに掃除する
去っていく人がすがたたりしない
メモ一枚別々の道歩きましょ
逃げ水のようにさつさと去るつもり
消去法わたし一人が残される
ひとしきり騒ぎ起こして去るバナナ
この世去るまでは一緒にいてたげる
遠い散歩から帰らない緒形拳
泣き叫びもがいてこの世去るつもり
居てほしい人から去って行く職場
あの角を曲って君は日常に
流れ星のように去つたら褒められる
年取を知って彼女は逃げて行く
酔って候昨日あいつが巢立ちした

秀句

眉ぬぐい去ると気弱な顔である
去る人もまた来る人も天下り
去ってゆくのは風景か俺なのか

紀の川市	辻内 次根
大阪府	神野千恵子
鳥取県	西谷 悦子
堺市	奥 時雄
大阪市	井丸 昌紀
弘前市	高橋 岳水
大阪市	岩崎 公誠
枚方市	寺川 弘一
橿原市	安土 理恵
東大阪市	北村 賢子
亀岡市	井上 森生
和歌山市	武本 碧
羽曳野市	徳山みつこ
大阪市	古今堂蕙子
八尾市	高杉 千歩
大阪市	升成 好
堺市	柿花 和夫
橿原市	居谷真理子
和歌山市	福本 英子
奈良市	岩本 浩二
三田市	北野 哲男
京都府	高島 啓子
宇部市	平田 実男
松江市	津川 紫晃

許せないサヨナラひとつ胸のシミ
去るときはむらさき色の帽子きて
モザイクをかけて上手に去っていく
泣き叫びもがいてこの世去るつもり
風去つて葦は正気を取り戻す
あの角を曲って君は日常に
愛されて野球小僧のままで去る
だんじりが去って用事を思い出す
酔って候昨日あいつが巢立ちした
後ろ手に閉めて出て行きそれっきり
駄菓子屋が去ってぽっかり穴があく
さらばじゃと言った気配の角砂糖
前方不注意 金運退去せり
故郷は過疎 帰去来の辞でくくる
去り状を世論調査で突きつける
走らねば私の匂が去ってゆく
私から猛スピードで去る若さ
眉ぬぐい去ると気弱な顔である
順序よくこの世を去れば事もなし
旧友と飲むカウンター去りがたし
花道を他一名が去ってゆく

秀句

名優は帽子残して風になり
過ぎ去りし日々へ大事な落し物
去る人を追うほど野暮でないワイン

堺市	矢倉 五月
西宮市	山本 義子
松江市	津川 紫晃
大阪市	升成 好
弘前市	斉藤 砾
橿原市	居谷真理子
三田市	堀 正和
堺市	柿花 和夫
三田市	北野 哲男
和歌山市	古久保和子
米子市	政岡日枝子
海田市	三宅 保州
大阪市	谷口 義
黒石市	佐藤 古拙
唐津市	仁部 四郎
鳥取市	倉益 一瑠
奈良県	渡辺 富子
京都市	高島 啓子
熊本市	永田 俊子
川西市	西内 朋月
八王子市	播本 充子
竹原市	六田 半徳
犬山市	金子美千代
大和高田市	鍛原 千里

冬

永田 俊子選



駒子などいない独酌冬の宿
机には座つて貰えぬ冬休み
生意気に冬眠もするポールペン
金融危機冬の時代の訪れか
冬眠をしたくなるよな空財布
ねんねこを仕立て直してエコノ冬
しもやけも知らない孫と手をつなぎ
いつからか枯木のように寝る夫婦
失恋が冬のきびしさ真に受ける
冬の風明日への扉閉る音
吐く息に冬の気配が忍び寄る
足腰と冬の寒さを語り合う
冬眠を強いられている高齢者
拉致の子の叫びか荒れる冬の海
身の丈の歩幅で長い冬抜ける
心までぬらす寂しい冬の雨
木枯しが老いをせかせせる冬支度
温暖化冬將軍の居場所なく
逢いたくてピエロが揚げる冬火花
寒風に耐える孤高の木守り柿
冬が来るどこか体が引き締まる
温暖化冬が四季から消えて行く

正雄 正義 正和 千華 としお 淳司 かつ子 憲子 すみれ 公誠 雅明 陽子 玄也 あずま 碧 高明 寿美 あやめ くにこ 幸雀 一粹 浩二

暖冬が時に本気で困らせる
したたかに生きると冬の不況風
世の中の汚れ飛ばせよ冬の風
夏冬に耐えて日本の秋と春
無人駅そこから冬になつて
米を研ぐ指の先から冬がくる
凜として来る者拒む冬の山
煮こごりに遠い昔の母が
春という約束あつて冬を耐え
花も実も大地に返し山眠る
後指さされ心も冬こもり
冬陽差す心の中心もあつたまる
冬の絵の中で孤独が鎮座する
さめた目で自分見つめている寒夜
十字架を背負つたような冬の天

康子 一風 宵草 扶美代 北朗 洋子 倅子 活恵 秀四 ミツ子 幹子 勝視 絹子 麗 千歩 四郎 四郎 准一 菜摘 霜石 中井アキ

冬帽子春の喜劇を待っている
神様の便りは雪の散らし文字
天 地 人
冬の絵をぬけて明日へ踏むベダル
左遷地へ向かう男の冬景色
冬帽子春の喜劇を待っている
神様の便りは雪の散らし文字

日の出 一粹 美千代 敏子 輝夫 ふみ 千華 富子 霜石 鐘造 久仁雄 小雪 キヨミ 蓄水 みね 千代 岳水 道一 克治 冷子 准一

終る

井上 森生選



子育てをも一度したいカメラ好き
解けてゆく雪の終りを見届ける
妥協して終えた討論胃に溜まる
まだ想いはひとつ残して夏終る
お開きはまだかまだかと下戸の膝
萩こぼれこんなまきれいに死ねたなら
饒舌に語る太鼓がしめくくる
戦い終え檜山行きのバスに乗る
はつくりを誰でも願うエンディング
終章は皆の拍手で終りたい
終章を避けて寄り道ばかりする
いつか来た道のようにだなるループ状
舟こいでドラマの最後見損う
拍手まだ早い名曲まだ続く
終身とは何と楽しみない保険
放浪はまだ終らない森光子
くたびれた戦士を運ぶ終電車
最終は戦力外を告げられる
あらまあで始まり終わりのないお口
終点が近づきやうと席が空く
老いたれど最後の車小さめに
この辺で終りにすればよいお酒

集 路

人生の最初最期は個人戦
 始まりも終りも同じ円を行く
 どうしよう主治医が先に亡くなられ
 戦争は終わつたはずの九段坂
 幕切れに見得も切りたい八十路坂
 終りなき挑戦宝くじを買う
 ぶつちやけた話で終る酒の宴
 勇退の道へ花束持たされる
 その話終りここから蟹の鍋
 言うことはこれでおしまい握手する
 カミナリもごめんと言えば軽くなり
 終章を今いっしんに書く余生
 美しい骨だったねと言われたい
 じたばたはしないで卍で逝くつもり
 読み終わるころには眠気やつてくる

佳

一日が終りお風呂で生き返る
 星影のワルツで幕のクラス会
 ふるさとを語ると舌が果てしない
 もうこれが最後と言ったのは女
 この橋を渡り終えたらひとりなり

人

心のまま自分の色で咲くラスト
 一粒を落して終る砂時計
 いい役者でした優しい父でした

天

軸

夢拓くオープンエンドの脳がある

一花 明子 五月 四郎 晴翠 可住 柳弘 一風 久子 みつこ 久子 登美代 すず 茂 章子 圭一郎 巴子 哲男 碧 正雄 勇治 セツ子 慕情 播本充子

イベント

西川 和子選



イベントは成功でしたゴミの山
 イベントを街のクラスが嘆きつける
 毎日イベントにして生きている
 食い初めへ厨も弾む祝い膳
 生涯のイベント生と死の狭間
 賑やかに送り出せと母の遺書
 櫃からイベントを見るデスマスク
 お寺は人もイベント並の念仏会
 恒例のイベント妻の無言劇
 スキンシップ親子参加の運動会
 イベントに子らの歓声陽にはじけ
 ご近所と素顔で呑める夏まつり
 イベントの笑顔がこだわりを流す
 甲子園お国訛りで肩を組む
 同窓会衣装比べと孫自慢
 古希の血もさわぐ故郷の秋祭り
 出不精もイベントに出て皿洗い
 イベントは今日一日の村起し
 イベントとあれば万障くり合わす
 お土産の出る催しで無駄を買い
 イベントで一年分の醤油買う
 威勢よい声に財布の口が開き

泰女 扶美代 次根 光久 黒兎 千歩 幹子 ばっは 淳司 雅枝 輝夫 宵草 アキ 晴翠 五月 蜂朗 睦子 妻ね みね 公誠 茶子 かつ子

勤勞感謝地産地消の食まつり
 大鍋は何百人の腹みたし
 イベントがあると十歳若返る
 秋祭り女神輿が主役取り
 イベントの裏ではくつく握りめし
 一夏を踊る阿呆で西東
 一年の汗でネプタを盛り上げる
 住民の知恵イベントに生きている
 イベントへ総出で舞台出来上がる
 台風の進路に迷う文化祭
 若者の手が借りたいなイベントに
 イベントの寄付をそろそろ用意する
 休耕田コスモス祭り盛り上がる
 イベントで過疎の空気を入れかえる
 イベントの舞台裏には多士済々

佳

ローソクの数は今年も変えぬ妻
 イベントに通う杖から気を貰う
 イベントを楽しむ老母の薄化粧
 イベントのバザーイベントの輪がふくれ
 イベントのツボは子孫の知恵孫の知恵
 ポスターの瞳がボクを離さない
 補助金のないイベントへ民の知恵
 雪月花もイベント父の山に雪

天

軸

生きて行くイベント今日も飯を炊く

螢 實 明子 浩二 一知 寿美 岳水 あずま 准一 邁行 陽子 章子 ヒデオ 靖博 裕之 とし子 菜摘 権悟 可住 芳生 四郎 奥谷彩子

初歩教室

題一終

三宅保州

「初歩教室年間賞」発表!

当「初歩教室」欄にご投句いただいた方々の力作に報い、皆さまの今後の励みとするため、一昨年から「初歩教室年間賞」の制度を制定していただきました。

第三回目に当たる今年も、昨年十一月号分から今年の十月号分の「今月の推せん句」の中から、次の方々に年間賞を決定しました。おめでとうございます。なお、表彰式は来る一月本社会会の席上で行う予定です。

平成二十年度初歩教室年間賞

老舗です屋号右から書いてます

年金のそれから捜す蝸牛

売り尽くし裏を返せば売れ残り

大阪府能勢町 高木道子

田辺市 岡本昇

堺市 荻野像山

【添削・批評句】

原 はなやいで終りたい十二月 利子

中五音字でリズムが悪くなります。

添 はなやいだ気持ちで終わりたい晦日

原 終いに向いて毎日生きている 治子

十五音字でリズムが悪くなっています。

添 終章に向かって今日も生きています

原 高尚すぎ終始あくびをかみころす みち代

何が高尚か詠みたい。

添 高尚な法話に終わりまで眠る

原 大晦日今年終いの大掃除 弘泰

大晦日、終い、大掃除と同意が重なります。

添 善なく今年も暮れて大掃除

原 スーパーも終了時間無くなって ヒロ

主役をスーパーでなく終日営業にしたい。

添 二十四時間営業というエンドレス

原 回り寿司どこが終りかわからない 健柳

説明的すぎるので少しひねってみて。

添 終わらないようでも終わる回り寿司

原 夕食を終って番茶一人飲む 正二

添 家事万端終わってひとり飲む番茶

原 終りまで見ずにうたた寝テレビ劇孔一

テレビ劇という表現が苦しい。

添 うたた寝にほどよいつまらないテレビ

原 抽せんの静かになつて結果きく 美紗子

添 抽籤の結果は又も紙切れに

原 終着の分からず歩く好奇心 タカ子

添 終着まで持ち続けたい好奇心

原 足音の終り目指してゆつくりと 清

添 終章へ踏み締めて行くゆつくりと

原 くよくよと思わず行こう終りまで 周子

添 悩んでも悩まなくても来る終わり

原 一貫して終始変わらず笑顔あり 綾乃

添 何よりの笑顔は終始笑顔良し

原 大阪駅終車客のみ出口あり 冷子

大阪駅だけとは限らないので。

添 終着の改札出口だけが開き

原 ほろ酔いではと醒めたら終点だ こずえ

添 酔うていても降りる手前で目が覚める 智加恵

原 五度転居田舎の住家終とする 智加恵

五度はいわゆる「動き」気味。

添 転居繰り返して終のウターン

原 リホームでホッとしている終の家 房江

添 リフォームでお色直しの終の家

原 無二の友大成功の手術終え 紀雄

添 大手術無事に終わった朝ほらけ

原 人は皆終りかけると慌て出す はじむ

添 先行きが見えるとみんな慌て出す

原 有終の美は望まないあるがまま 憲子

添 あるがままで有終の美を迎えたい

原 ポックリと逃げば畳でなくとも としお

添 ポックリなら畳の上でなくとも

原 突然死命に終止符早すぎる
 添 不意打ちの終止符すぎる突然死
 原 旅終る写経納めた四国路は
 添 遍路等写経納めて旅終わる
 原 名人は終る事なく技みがく
 添 名人も芸を極めて終わりなし
 原 敗戦を終戦と云う生き残り
 添 敗戦を終戦と云う戦中派
 原 何もなく今年も一年終りゆく
 添 しあわせは何事もなく年暮れる
 原 温暖化いつまで空気もつのやろ
 添 温暖化やがて空気も尽きるのか
 原 今気づく子育て苦労終わりなし
 添 子を思う苦労に終わりなどはない
 原 励まされ終日趣味で生きている
 添 しあわせは終日耽る趣味がある
 原 仕舞風呂妻は居眠りしているな
 添 静かすぎて呼びかけてみる仕舞風呂
 原 子育てを終えて束の間孫の守り
 添 子育てを終えたら直ぐに孫の守り
 【少し工夫すると佳くなる句】
 原 終焉かドルの権威くずれ落ち
 添 終焉かドルの権威もくずれ落ち
 原 蚊取り器を終えずにいる温暖化
 添 蚊取り器も終えずにいる温暖化
 原 憎越と言つて話は終らない
 添 憎越と言つて話は終らない

すみれ
 エミ
 稔
 浩二
 真一
 忍人
 弥生
 きぬ子
 好文
 ちづる
 靖博
 律子
 文代

添 憎越と言つのに終わらない話
 原 終盤に抜き去る足を鍛えてる
 添 終盤に抜き去る足を鍛えたい
 原 何かと理由つけての終電車
 添 何かや理由つけての終電車
 原 終る日が分かれれば物が捨てられる
 添 終章が分かれれば物を捨てられる
 原 恩返し未だまだ終点迫り来る
 添 恩返し未だ終点迫り来る
 原 広島へ日帰りで行く終戦忌
 添 ヒロシマへ日帰りで行く終戦忌
 原 そして誰もいなくなつた核戦争
 添 核戦争そしてだあれもいなくなり
 原 気にかかるハッピーエンドその続き
 添 ハッピーエンドでもその後が気にかかり
 原 終りにはまだしたくないお付き合い
 添 終わりなどあると思わぬお付き合い
 原 少し買う覗いたのしく夕餉終え
 添 大好きな覗を買つて夕餉終え
 原 こしかたや終りよければすべてよし
 添 来し方も終わりよければすべてよし
 【佳句】
 絵に描いたような終焉迎えたい
 終電車仮面を脱いだ顔ばかり
 宅配の土産配って旅終る
 ビリオドはまだまだ柿の苗木植え

志延
 久子
 洋子
 瑛子
 孝明
 宏造
 孝子
 千代子
 俊子
 芳子
 昇
 幹子
 克博
 イセ

終つたら三途の川をバタフライ
 密告に不正の終わり期待する
 たけなわでお開きさせる名司会
 臨終の枕は妻の膝が良い
 お気に入り用意してます遺影用
 片づけが終つてからの長電話
 夫婦げんか負けたふりして終らせる
 文殊の知恵借りて一生終りそう
 終章の母に捧げる子守唄
 伝説にして一年を終わらせる
 どんな事にも必ずやつてくる終り
 【今月の推せん句】
 終止符を打つて気持ちを軽くする 長島亜希子
 気持ちを軽くするで終止符を生かしています。
 プライドの袂脱げは終るのに 高木道子
 案外つまらないプライドに拘っているもの。
 終演の片付けだけが待っている 坂部かずみ
 この終演は人生だと思ふ。奥深い佳句。
 【私の句】
 終わつても事実は消えることがない
 予定どおり自分で幕を引ける幸
 今月分をもつて私の担当を終了させていただきます。六年間七十二回に亘つての、ご投句、ご支援ありがとうございます。
 来年からは、著名な鳥取市の鈴木公弘氏が担当されます。

光弘
 堅坊
 隆彦
 像山
 幸
 光子
 嘉彦
 菜摘
 絹子
 柳歩
 美賀代

秀句鑑賞

同人吟 三島 淞 丘

— 11月号から

一昨年の三月号で秀句鑑賞をさせて戴き、今回二回目の鑑賞の依頼を受けました。

千六百句余りを熟読して、私の好きな句を百句余り選び、それを更に絞っていきましました。皆様の力作の秀句が沢山ありましたが、今回は、人間の心理を面白く詠み、私の心に響いた句に焦点を置いて鑑賞文を書かせて頂きました。

拙い鑑賞をお許しください。

本当は注いでもらいたくって注ぐ

高瀬 霜石

酒飲みの心理を突いた句です。酒の席は話が大いに盛り上がり、他人のことには気付かないものです。

盃は空になつているのに誰も注いでくれない。そこで、まあまあどうぞと相手に注ぎ、やつと相手も気付いて注いでくれるのです。それを繰り返しているうちに、何だか自分が倦しくなつてきます。

こんな酒飲みも可愛いものです。

舞台では見せぬ楽屋の泣き笑い

岸野 あやめ

表舞台では涙も笑いも、飽くまでもお芝居と立前に過ぎないのです。本音は舞台裏、楽屋裏でしか見せません。楽屋裏こそ人生ドラマがあるのです。

或る精神科医が「裏が消えていく日本」と題した文の中で「どこもかしこも管理された表舞台には、心の置き場がない。」と書いています。今は本音の吐ける温かい楽屋裏が大切な時代だと思います。

恋の川女は深さ知りたがり

鶴田 遠野

思い川、涙川とか言いますが、川と恋は昔から切り離せないもののようです。

恋の川、それは時には穏やかに、また或る時は激流にもなつて人を呑み込むことさえあるのです。

愛されていると信じていても、なお、その深さを知りたい。それが女心というものでしょう。

淡い句に出会いました。

傷口に塩塗りつけるインタビュー

村上 玄也

テレビでよく見る光景です。悲しみに打ちふしている心に、追い討ちを掛けるように問い詰めるインタビュー。そつと見守つて上げたらよいのに、と思う場面がしばしばあります。正に傷口に塩です。真実を報道するという立場での取材でしょうが、人の情だけは忘れないで欲しいと思います。

乗るとすぐメール始める日本人

穴 吹 尚士

たまに電車やバスに乗ると、本当にケータイ中毒者が多いのには驚きます。座つたかと思つと、もう俯いて何やら指を動かしている。通り過ぎる窓の景色、乗客同士の心遣いなどは全く無関心です。これでは情緒など身につく筈がありません。ケータイを使いこなせない年寄りの僻みでしょうか。

よく騒ぐから標的にされている

大谷 篤子

「雉も鳴かずに撃たれまい」という諺がありますが、標的にされてもいいではないですか。作者は、諺の雉とは違つて、いい方の標的になつたのだと思います。陰気な人には仲間が集まりません。陽気に騒いで、おちゃめに目立つて、羨望的になるのも楽しいもの

です。

一笑に付されて本音宙に浮く

澤田 和重

「忌憚なく言いなさい」そんな言葉に乗せられて、ここぞとばかり日頃の本音をぶちまけたが、何だそんな事か、と一笑に付されてしまった。そして行き場所のない本音は宙ぶらりんです。

このままではおれない作者の気持ちがよく現れています。さてこれからどうします。

生きがいのように揚げ足とるあなただ

田中 みね

こんな人が私の周りにも居ります。いちいち煩いよ、と言いたくなりますが、ご本人は揚げ足をとるところか、親切に注意しているつもりなのです。加害者と被害者の立場でいうも受け止め方が違うものですね。「生きがいのように」で面白い句になりました。

シャルウィダンスお腹がへこむまで待つて

安土 理恵

大ヒットした映画シャルウィダンス、私も見ました。美しい女優ドロベスが踊るラテンダンスに魅せられました。作者をお誘いしたのは何方でしょう。お腹なんかどうでも良いではありませんか、今がチャンスです。お相手の方は貴女のお腹がへこむまでは待てないでしょう。いや、これは失礼なことを申しま

した。

酒愛し人を愛した葬の列

武田 帆雀

大のお酒好きで人間も大好きだった友が逝ってしまいました。誰からも愛され親しまれた彼を今は見送らなければなりません。葬の列はただ黙々と進み、作者の脳裏には元気で楽しく飲み交わした彼との日々が走馬灯のように魅ります。哀感の句です。

アメとム子夢があるから鞭をとる

夏目 一 粹

現代は飴も鞭も、その使い方を間違えているのではないのでしょうか。子供には過保護という飴ばかりで厳しさが足りず、一方相撲界や自衛官に見られるように、度を越した扱い（しこき）があります。本当の鞭には愛が込められていた筈です。作者は、将来の大きな夢、期待があるからこそ、今は厳しい鞭をとると言うのです。

一日一笑ネタは身近にたんとある

福西 茶子

一日一善とは言いますが、一日一笑とは面白い表現です。笑いは健康のもと、笑う門には福来る、と言いますから、せめて一日に一回は笑って暮らしたいものです。その笑いの種は身近に沢山あるではないかという、明朗

快活な作者が眼に浮かびます。

愚痴っぽい酒ならさげも辛かろう

白根 ふみ

「酒は憂いの玉簾」酒はどんな心配事も払い捨てて美しい筈である、という意味の諺ですが、それも飲みかた次第です。たらたらと愚痴をこぼしながら飲まれる酒は、酒だつて辛かろう、と作者は巧く擬人法を使って詠まれました。やっぱりお酒は明るく楽しく飲みたいものです。

ペットにはこんなに笑顔見せる妻

平田 実男

長年連れ添えば夫婦は空気のような存在になるといいます。子離れた奥さんは、少し寂しさもあって、今はペットが一番可愛いのでしょうか。作者は、ペットがちよつと羨ましくなったのかも知れません。本当は大変ほほ笑ましいご夫婦なのだと思像します。

不要品捨てたら倉庫空になる

高野 宵草

我が家も全く同じですかと思わず笑ってしまいました。先日倉庫の整理をしましたが、不要品どころか、空っぽのダンボール箱、使え物にならない二段ベッド等など、整理したらすっきりし過ぎて寒寒として来ました。すぐにまたガラクタで一杯になります。作者の気持ちがよく分かれます。

秀句鑑賞

—11月号から

土橋

螢

汗かかぬ人が横から口を出す

上山 堅坊

勤労感謝の汗をかいたら満足だろうが、汗をかかない人は欲求不満の愚痴をこぼす。プラス思考とマイナスの人間関係がおもしろい。

何もかも許して母を介護する

坂本 智子

母と娘、姑と嫁、立場と業縁を尊重すると許されることになる。真面目に生かされて生きるふたりの姿が目につかぶ。親切に介護してあげることが親孝行になる。

時効とはいかぬ女の難しさ

川島 良子

男と女は厄介な哺乳動物であるが良心が作動して、お互い認め合う。消費期限が切れて人畜無害になっても、恋は味わうらしい。意地張らず、自然体の男と女になろうか。

若い時みんな苦勞をしたんだよ

岩崎 實

先輩が若い者はじげの油だと言ったむかしばなしがある。五十年前はみんなが若かった。そんな、苦勞の押売りはいけない。誠心誠意最善を尽くすことです。

嘯み合わぬ話に食事早食い

吉田 陽子

「ご馳走さま」と、主婦の立場が先に言うのと早く食事が終る。何かご用があるのなら、はつきり言った方がよろしい。こんな時も女が強くなった感じがする。

列島を偽装だらけの風が吹く

六田 半徳

偽だ偽装だと大騒ぎ、世の中が平和だからすぐに事件になる。でも偽ものは嘘からはじまる。お互いが相手を尊重する気質が大切だ。

名月にふとケイタイと戯れる

斉尾 くにこ

「こんばんは」とお月さんに、すると「あなたもとてもきれいです」と返答する。「戯れる」がこの句のいのちです。名月から秋本番そして冬までに恋をしたらおもしろい。

ふたりとも正直すぎて喧嘩する

林 さだき

嘘も偽もいけない。「正直すぎて」が、お

もしろい。正直にもの申して時には喧嘩してもよいです。喧嘩するほど仲良くなりますよ。

留守番に銚子一本許される

尾崎 黄紅

銚子一本の酒は二合くらいかな。誰に頼まれたか問題だが信用第一の人間関係が留守番と銚子一本の軽味。川柳は表現自由でしょう。見ないふりする勞りを忘れない

尾崎 ゆめ

視角の見て見ないふりは人生の奥義。それは巧みな人生経験から滲みでる所作である。

音立てて返らぬ時が過ぎてゆく

大久保 ノン子

いろんな雑音が聞こえる。そして今が過ぎて過去になってゆく。しかしまた新しいことがはじまる。

故郷に小さな恋を置いたまま

福田 好文

小さな恋と遠慮せんでもいい。堂々と大きくふくらませてください。むかし葉隠の恋は好きだと言ったか言わなかったか。

頼もしい会長さんの低い腰

前田 喜美子

現代の会長さんはみんなボランティアです。そして低い腰に信頼度があるそうです。

■各地句会だより

くろぼこ川柳会

とともに

鈴木公弘

一九九一年(平成三年)一月二十日がこの会の誕生日である。地区公民館に集まった老若男女は十六人。そのうち小中学生が六人いた。

会名の「くろぼこ」とは、黒ぼく(火山灰土)の方言である。蒔いた種がやがて芽を吹き川柳(かわやなぎ)に成長する…そのための地盤づくりをしたい、という夢があった。句会はその後、町の中央公民館に場所を移して、毎月第三日曜日午後一時から行っている。宿題三つ、席題が一つである。句会報「いのちの詩」(途中改題)は二百十余句を積むに至った。

私のいわば個人的な趣味から始めた川柳の会ではあったが、第一回の「世界」以来、毎月の課題をこなし、十年経った二〇〇一年には合同川柳集「樹」を発刊して世に問うた。この句集を頒布した翌日、会員だった私の父(鈴木霊山)が脳出血で倒れ、一度も帰宅で

きないまま七年後に他界したことは、なんとも不可思議な縁であった。最多時には四十人を超えた句会も、鳥取県の県域川柳団体が分裂したのを契機に減少して、現在では十人余りになっている。しかし正義が手元にあるかぎり、問題は出席者数ではなく、いかにして充実した活動をするかであらう。



くろぼこ川柳会会員達

そこで考えたのが川柳大会を毎年開催することである。現在も続く春はくろぼこ川柳大会の始まりである。この大会は、私の川柳活動を支えてくださる方々へ

の感謝と、創立以来スローガンとしてきた「旅人のめざしてくれる樹になろう」を体現する目標があった。河内天笑・川柳塔社主幹ご夫妻と天根夢草・川柳展望社主宰には「この大会が続く限り選者」という約束をしていただいたのである。新年度には「第九回大会」を迎えるが、先生方には何はさておき、感謝の一言に尽きる。

五年ほど前から川柳グループの立ち上げに努め、新たに四つの会と一つの教室を創設した。現在は、このうちの五つの組織が「川柳さーくる21」を結成して、六十五人の合同川柳集「感性は我にあり」を刊行、地元の書店に卸すなど、共同事業を進めている。私にとって川柳は、いつも「これから」である。

浴びるほど酒飲み何を言ったやら
 大の字に寝て一畳の天下とる 安子
 老犬と暮らし旅行もままならず 陽子
 子の未来消すな汚れた教師たち 章子
 宿題と遊ぶ深夜のビートルズ 智子
 庭先のこぼれ種から花が咲き くにこ
 我慢して小遣い減らす子の想い 遊子
 支配者の秘蔵つ子去勢されている 菜美
 ひっそりと会うには橋の下がよい 帆雀
 留守番を頼み借金たのまれ 公弘

全日本川柳誌上大会のご案内

(平成柳多留第13集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第13集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞってご参加ください。

社団法人 全日本川柳協会
会長 今川乱魚

課題と共選者 (各題2句・連記)

「ガソリン」	篠田東星	—	浜本耀子	共選
「占める」	渡辺松風	—	植野美津江	共選
「呼吸」	駒木一枝	—	赤松ますみ	共選
「地域」	長谷川冬樹	—	鈴木如仙	共選
「物価」	花道歌子	—	高田美代子	共選

第二次選者 竹本瓢太郎 小松原爽介
前田咲二 佐藤良子

参加費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第13集代金含む)
賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞 (予定)

締切 平成21年1月31日(土)〈当日消印有効〉

発表・表彰 第33回全日本川柳札幌大会(平成21年6月)

参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に記入し、
参加費2000円(振替又は小為替)とともに下記へご
送付ください。

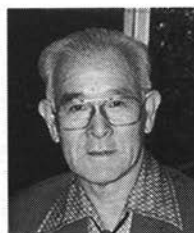
〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 00970-9-3575



追悼

長谷川 春蘭氏 (享年98歳)

法名 釈 春蘭

春蘭さんを偲んで

津守 柳伸

菊香る10月、春蘭さんの計報に接し肩の力が抜け去る思いで一杯です。

思えば、栞先生主催の八尾「菜の花句会」からの出遇いでした。春蘭さんは「川柳塔本社」をはじめ「西宮北口」「城北」「堺」「八尾」と、ご高齢にも拘わらず精力的に句会参加を楽しんでおられました。

欠席すると「皆さんに忘れられる」なんて恐れられていたようです。

いつも柔和な笑顔で、最前列で頑張っておられたのが昨日の事のように思い出されます。ます。

毎月の散髪も大阪生野区から奈良上牧、そして八尾に移られましたもずっと私方に来て下さいました。

今年に入り足が少し不自由になられて娘さんご夫妻の車で来られるようになりまし

たが、しばらく途絶えていましたので案じておりました。

娘さんのお話によりますと、4年前に奥様を亡くされてからは支えを失い、元気をなくされていったようです。2年ほど前から、心臓の病が出て入院を繰り返されるようになりました。

私と春蘭さんはお互いに好き勝手の話ができる父と娘のような間柄でした。あちらへ行かれましても諸先輩に可愛がられて私達を見守って下さる事と信じます。楽しかった刻をありがとございました。

私の店に
むらさきが好きと云うのも何か縁 春蘭

四度目の元号を生きまた元氣 春蘭

春蘭さんの短冊を以前から飾らして頂いております。
合掌

遺句抄

息災に夫婦老いゆく福寿草

親しさも折り目正しく書く賀状

余生なお句の杖しかと握りしめ

ガムに似て味はいつしかなない夫婦

忘却という幸せもあり日向ぼこ

指切りをここのはずみでしてしまふ

枯れもせず恋も知らずに水中花

アルバムの四季それぞれにある笑顔

生々流転花は無言のまま褪せる

うっかりと素顔を見せたバラのとげ

電話では話つくせずそぞろ寒

起きぬけの萩を見ている齢かな

来る来ないきつと来るはず雪催い

春愁に石仏の心わが心

青葉風子等のさざめき今日の幸

市場籠提げた男が板につき

指さりの旅も果たせず友は逝く

まだ青きみかんに触れるふるさとよ

虫に耳とられ思索の行き詰まり

駅コスモス人の別れを見るばかり

亡き人を想えばしばし鳴くちちろ

どこへどう行く矢印のない旅路

爽やかに誤字の指摘を受けしこと

露骨には書けず真意を少し曲げ

本社十一月句会

十一月七日(金)午後一時
アウイーナ大 阪

本社11月句会は予報通り、朝からの雨は強くなったり、弱くなったり、しばらくの間止んたという悪天候であったが、92名の参加を以って開催。

半年ぶり昼間の句会である。

まず、10月14日亡くなった長谷川春蘭氏98歳のありし日を偲び一分間の黙禱。

受付では朝日新聞なにわ柳壇入選百句集パートⅢ出版という偉業を成し遂げられた藤井正雄氏の『私の百句』が配られた。

お話は岸和田市ホテルの里安福寺住職伊藤正哲氏。テーマは「命頂いて」予めご用意された数十枚にも及ぶ手書きの書を使い「命」の重さを明かるく軽快に説いて下さる。

途中ちよつとしたクイズもあり、ヘレンケラーから高倉健まで登場するお話(お説教)は楽しく30分は短すぎるほどであった。

最後は、よく透るお声で、「生かされて生きるやこの命、あめつちの恩かきりなき恩、おだやかに心荒立つこともなく、過(こ)せし今日(けふ)はありがたきかな」と謳われた。(扶美代記) 月間賞は吹田市の山本希久さんに輝く。

(司会)昭・美籠 (脇取り)月子・千代
(受付)五月・かりん (清記)直樹

席題「遅刻」

藤井 正雄選

あの人が来ると会も終る頃

(久)千代

タンポポを手にも校門へとびこんだ

(志)千代

気のすすまぬ見合いへわざと遅刻する

賢子

あの人が見えたら会議始めます

東吉

新柄を着て遅刻してばつ悪し

れんげ

遅刻した人を持たない発車ベル

光久

常習の遅刻同士で結ばれる

哲子

たまたまの遅刻一人だけで目立つ

能子

惚れている僕がいつでも待たされる

尚士

嫌な役遅刻したため決められる

千里

常連の遅刻に馴れている銚子

とし子

おくれたらお茶もお菓子も当たらない

舞夢

遅刻魔が悪びれもなく来る牛歩

麗

秋紅葉今年は遅刻するらしい

一步

義理で行く通夜は読経の終るころ

好

忙しい人程遅刻しないもの

蕉子

遅刻した人にも配る温いお茶

桃花

学校のそばで遅刻をする息子

たもつ

閨魔には遅刻しますと言っておく

和夫

少しの遅れ許して欲しいエンマ様

洋

遅刻すると起きるのにする遅刻

シマ子

目立ちたが少し遅れてやって来る

りこ

駆足ができなくなつて遅刻せず

千恵子

あの世へはとことん遅刻するつもり
遅刻して内緒話を聞きもらす
昭

上役と同じ電車は遅刻の日

加お里

遅刻の言い訳もひと通り出尽した

天笑

遅刻して陰に座つたのにばれる

玄也

遅刻した理由ぜつたい言えませんが

理恵

遅刻して平氣の平左がまの面

淳司

資金パーティー会費払えば遅刻は可

堅坊

逢瀬の夜光源氏は遅れない

孝一

遅れても後れは取らぬ飲みつ振り

洋

遅刻せず休まず勤め出世せず

富美子

狂い地球に遅刻笑われる

たもつ

遅刻した理由に嘘が笑つてる

太郎

延着証明とゆつくり遅刻する

天笑

遅刻して干支に入れぬ猫の悔い

朝子

晴れなのに遅刻をしないかたつむり

典子

遅刻などしない重たい腕時計

ばつは

まだ一人搭乗口にこない人

軸

兼題「さつぱり」 高島 啓子選

准 登 一

捨てられるものならうちの粗大ゴミ
 諦めてスキヘッドに刺り上げる
 さつぱりとエールを贈るマケイン氏
 シヤッター街何をやっても客が来ぬ
 思い切り涙ながしにきた岬
 公園にさつぱり子らの声聞かず
 小さな旅さつぱり主婦を脱ぎ捨てる
 さつぱりとした人ですと軽く逃げ
 八起き目へさつぱりと刺る不精髭
 年金でできる範囲のこざつぱり
 いつだって電話をかけるのは私
 もやもやを吐いてさつぱり青い空
 棒グラフさつぱり増えたのは酒量
 エステサロン魔法の指で甦る
 負けたつてさつぱりしてるあみだくじ
 ふつきてようやく抜ける不眠症
 心から詫びてさつぱり気も晴れる
 さつぱりを目指す余分を捨てながら
 さつぱりと勝負終れば握手する
 妻のことさつぱり夢に出てこない
 快音がさつぱり出ないノーヒット
 さつぱりとしておくれやす蒸しタオル
 こざつぱりしてよと妻の目がひかる
 (欠)五月
 さつぱりは出来ぬ男の自尊心
 悔いはいない尽しましたと通夜の席
 さつぱりとした顔つきにある自信
 散髪をしたら足まで軽くなる
 目くばせがさつぱり通じへんあんな

耕治 尚士 三郎 公誠 朋月 希久子 靖鬼 朝子 耕治 恵子 賢子 正雄 孝一 修 富美子 一風 恵子 三郎 瑠美子 東吉 天笑 扶美代 美花 美籠 太郎 かりん

さつぱりとしてるが男軽すぎる
 さつぱりとしすぎて何時も損をする
 佳 耳遠くなつてさつぱり喧嘩せず
 シュレッダーにかけてさつぱりした未練
 さつぱりや言うてしつかり儲けてる
 さつぱりと老母から私消えました
 さつぱりと別れすつきり生きてます
 葬儀代だけは残して逝きはった
 人 あれからはさつぱり会わぬキュービッド
 地 片付けもせずさつぱりと死にはつた
 天 さつぱりと別れて日記にも書かず
 軸 小骨とつていただく耳鼻咽喉科
 兼題「溝」 村上 直樹選
 蓄えが崩れ夫婦に溝ができ
 背伸びした言葉がつくる溝もある
 温暖化溝も大河となる恐怖
 昨日までこの溝とべた老いを知る
 跳び越した溝の深さがこの世です
 会つてみれば溝はなかつた大笑い
 五十年溝を掘つたりうずめたり
 溝埋めにきた居酒屋でぶり返し
 民と官溝が大きい不況感

ダン吉 千里 見清 和夫 玄也 麗 舞夢 深雪 求芽 義 好

海溝に眠り続ける亡父の艦
 曼珠沙華に溝の在り処を教えられ
 土砂降りを中心待ちする溝掃除
 側溝に緋鯉が泳ぐ温い街
 付かず離れず溝はつくらぬ両隣
 お袋に味方してから妻と溝
 たまには溝またいで行き来する夫婦
 母独り敷居の溝がへつた家
 溝跳んでその日女の気が変わる
 溝できぬうちにとこめんねの電話
 溝蓋が路地から消えて子も消えて
 不義理せぬために嫌いな溝掃除
 レコードの溝青春が疼きだす
 LPの溝から吸り泣くシヨパン
 血管のような田圃の溝の自負
 溝埋める寿司折り持った千鳥足
 ごぶさたの溝を質状に埋めさせる
 溝埋めに妻はいそいそ孫の守り
 熱爛とおでんが埋めてくれる溝
 深い溝一気に埋めたのはお金
 レコードの溝で昭和を聴く夜長
 ほどほどの溝を保つて共白髪
 真実をつきつめすぎて出来た溝
 佳 姑との溝埋めていく介護の手
 拉致の子を取り返せない深い溝
 酒とろり酌んでふたりの溝埋める
 とびきりの笑顔で溝を跳び越える

洋 見清 和夫 たもつ 玄也 哲男 耕治 好 朋月 朱夏 則彦 光久 弘風 蕉子 弘風 理恵 修 幸雀 昭 能子 深雪 尚士 桃花 明子

他愛ない嘘で溝埋め合う夫婦

人

幸雀

人種の溝越えて黒人オバマ勝つ

地

淳司

三世代同居で溝に橋かける

天

明子

手を握るただそれだけで埋まる溝

軸

ダン吉

北方の深い溝にもいつか春

兼題「掴む」

宮崎 シマ子選

煮ころがし掴めぬ箸を叱咤する

喜子

貧乏を掴む手があり指があり

蝿

和夫

夕焼けを掴んで語らない案山子

かりん

カレンダーに腕掴まれる十二月

淳司

熱い物掴み慌てて掴む耳

五月

掴み合いケンカはしない折れるから

義子

総理ならしつかり掴め民の声

理恵

大盆を掴むとことん呑む気がし

美智子

逃げる時やつばり若い手を掴む

月子

幸運を掴んだのです夫です

天笑

よく動く手だが幸運よく逃がす

恵子

ジンクスにして左手で掴む

寿美

掴まれたハート終身刑に遭う

葉子

生きがいを掴んでからもある苦勞

千代

手ぶらでは不安でならぬ女です

桃花

直感でしつかり掴む赤い糸

天

雑踏で掴んでいたのは他人の手

変革を叫び掴んだ大統領

どん底で掴んだ愛はほんまもん

こんな俺後生大事と掴む妻

掴まれた尻尾何度も切り離す

うちの妻論吉掴むと離さない

掴んだものは幻だった風だった

掴んだら掴み返して来る絆

掴むまで何があろうとへこたれぬ

大吉を掴み小石に蹴躓く

ハンカチを落し切つ掛けを掴む

生きるコツ掴んでからの丸い背な

掛け布団ふかぶか今夜も夢掴む

大金を掴むと邪鬼もついてくる

札束を掴み地獄へ堕ちました

タオル掴み汗おしまないポラントイア

佳

つかんでたつもり掴まれてた不覚

ありがとウの五文字に心掴まれる

味方を掴むおいしいにぎりめし

掴まえた小さな秋を皿に盛る

大津絵の鬼から掴む世相の囃

人

麻痺の手で掴めるものを探してる

この私掴んだあんたお気の毒

地

いつ腕をとろうか母に似たお方

天

東吉

楓楽

弘風

篤子

蕉子

朱夏

柳弘

朝子

幸雀

賢子

公誠

求芽

明子

寿子

美籠

千恵子

ダン吉

希久子

昭

萬的

深雪

俣子

耕治

胸ぐらを掴み背負い投げしたい夫

軸

兼題「リード」

坊農 柳弘選

引き離すためにひとまず肩並べ

リード線テレビのうらはは蝟の足

僕のリードでポニーテールが揺れている

薄明かりわたしをリードしてくれる

鬼のリードできつと地獄へ行くらう

息してる限り親父がリード権

ライバルに一步譲つてうまいお茶

ネオン街ここなら僕がリードする

団塊がリードしている町おこし

あのリード幻にした秋の風

P.T.Aの会長美人でお金持ち

一番手で相手の息を読んでいる

主導権とられピエロになつてくる

写真判定で天国から地獄

鼻の差のリードでゴール万馬券

あれだけのリードが消えたタイガース

追い越したからの孤獨が深くなる

一点のリードドラマの始まりだ

リード権握つてからの向かい風

時により強く優しくリードされ

強打者の陰にかくれるミスリード

おとなしい人に従い五十年

リードするつもりが息切れたジルバ

不細工なりードで足を踏むワルツ

雅明

靖博

理恵

瑠美子

シマ子

ばつは

朱夏

千恵子

富美子

シマ子

たもつ

五月

天笑

尚士

朋月

明月

みつ子

扶美代

篤子

時雄

美智子

和夫

淳司

淳司

鼻の差のリードが抜けぬ力の差
 リードオフマン決して大振りなどしない
 振り向くなりリードはたった二メートル
 リードした油断が命となりになる
 音程のずれたリードにみなられ
 リードなんて幻だったトラの秋
 ポチとボク妻のリードに馴らされる
 美しいリード介護を競い合う

佳

黙々とリードひたすら蟻の列
 将棋盤僕のリードを知っている
 リードされ私気楽について行く
 志功いま燃えるリードで彫る菩薩
 かすみ草東ねた薔薇をリードする

人

人口の二三%の黒が勝ち
 地
 まだ燃えるものありリードする娼業
 天
 後れ毛が揺れるあなたに身を任せ

軸

スローライフ妻のリードに甘えてる

兼題「苦手」

河内 天笑選

宴会で笑わぬ人は苦手です
 ワンマンも苦手があつて人間味
 奥さんが美人で切れて口を出す
 骨付きの魚をママは持て余す

准一 雅明 修
 幸雀

苦手からコンニチワーと声掛り
 おしゃべりの苦手な人が歌つて
 踊りの輪苦手な人と手をつなぐ
 ここにこそ苦手が酌ぎに来てくれる
 近所とは苦手つくらぬお付合い
 嫌いとは言わず苦手と逃げておく
 褒められて苦手な人が好きになる
 苦手だと思ふ相手に避けられる
 エリートは苦手駄洒落が通じない
 苦手意識持たらずに負けている
 下がり肩だから睨めっこが苦手
 二人きりなのは苦手好きだから
 苦手やと聞いたがマイク離さない
 べんちゃらは苦手ですがとおべんちゃら
 苦手でも敬うところたとある
 頑強な身体でゴキブリが苦手
 嫌いだつた秋刀魚のワタが好きになる
 飛行機に乗つての間南無阿弥陀
 数学は苦手の彼が儲ける
 言葉尻とらえいちいち吠える人
 語尾強い人は苦手なかずみ草
 あの世にも苦手な人が居りそうだ
 ねばねばの健康食品まるでダメ
 理論家の女性がひとり部下に居る
 肥えずぎしゃないのと肥えた人が言う
 むつりは苦手おしゃべりはなお苦手
 銭勘定苦手と言うが貯めてはる
 型破り許さぬ物差しが苦手

好

光久
 富美子
 一歩
 耕治
 和夫
 篤子
 和夫
 義子
 靖博
 五月
 蕉子
 恵子
 時雄
 東吉
 尚士
 蕉子
 五月
 弘風
 富美子

耕治
 和夫
 篤子
 和夫
 義子
 靖博
 五月
 蕉子
 恵子
 時雄
 東吉
 尚士
 蕉子
 五月
 弘風
 富美子

手のひらをひらりひらりと返す人
 人間は苦手と地球球いている
 苦手とも酌まねばならぬ宮仕え
 大人です苦手といわずおつき合い
 平凡に生きて苦手の人はない
 女好きだけど女房は苦手です

佳

朝子
 明子
 鐘造
 理恵
 孝一
 一風
 深雪

人

やつてみると便器がきもおもしろい
 カマキリは苦手自分を見るようで
 じゃんけんにかけて苦手な木に登る
 希久子

軸

とつときの笑顔で苦手迎えうち
 十一月までの本社句会皆出席は次の通りで
 す。間違ひがありましたら、事務所まで申し
 出て下さい。(順不同)

安土理恵 穴吹尚士 加川靖鬼 江島谷勝弘
 岩崎公誠 上嶋幸雀 榎本舞夢 奥田みつ子
 太田昭 奥時雄 川端一步 鴨谷瑠美子
 川原章久 黒田能子 志田千代 榎本日の出
 谷口義 西内朋月 西出楓葉 宮崎シマ子
 長浜美籠 坊農柳弘 藤井則彦 山岡富美子
 村上玄也 升成好 森本弘風 山本希久子
 山田耕治 吉村一風 吉岡修 山本義子
 山口光久 (三三三)



毎月24日締切・30句以内厳守 編集部

いずも川柳会 佐藤 治代報

神々の国で田を打つ暮らしする
よるよるの言葉が鍋にこびりつく
舌鼓打ったお菓子に出た偽装
よるよるとコスモス天を指して咲く
よるよるとリンゴの皮を長くむく
怒られる前にとにかく謝ろう
世の隅でベンに怒りを込めている
コピーしたハートあげたい男性がいる
お辞儀する稲におじぎをして通る
バランスが崩れかかつて杭を打つ
よるよると言い訳があるクレマチス
空間を変らぬままに打つ時計
しがらみを打ち捨て愛につつまれる
さよならを大きくコピーして別れ
よるよるでも律儀に生きる茄子の秋
杭一本打って心を引き締める

としき 美江子 裕
久枝 桂子 登貴枝
知恵子 たえこ 治代
敬子 佳子 歌子
喜子 すみこ 左余
浜丘

よるよるを入れた袋が重くなる
アッチコッチ打って転んで今日も暮れ
ゆるんでる私にくれた平手打ち
すくすくと育った稲をほめてやる
忘れない内にしっかりとコピーする
PTAがバックについて怒られず
出産の仔牛自力で立ち上がる
怒った顔鏡でいっぺん見るといい
界杭しっかり打って握手する
稲の穂は今も黙って垂れている
怒った貌冬の海には近寄らぬ
その言葉わたしの胸でコピーする
酒になる稲は己を知っている
出る杭を打ったり抜いたり支えたり

寿美 昌枝 多喜 玲子 美佐子 房緒 房子 ちえ 蘭水 文子 章峰 きみえ 茂美 ちかし

岩美川柳会 石谷美恵子報

名人はさすが急所を外さない
仁王さんの急所くすぐる鼻濁音
ばあちゃんの急所を孫は知っている
私の急所お金に弱いところかしら
心臓の裏にあるのは堪忍袋
税務署が帳簿の急所ついでくる
台風が急所を逸れた秋祭り
お小言は急所をはずす思いやり
共犯者互いの急所一つ持ち

圭一郎 一瑠 一京 美雪 螢 重忠 公乃 節子 幸安

欲のない人の急所が見付からぬ
政治家の急所はどうも金らしい
真心はきつと見ている天である
天命とあきらめかけた手術室
老人になると思っていないかった
ほうれん草時いて人参生えている
半端では済まぬ私の勘違い
大器晩成ああ鈍感であつただけ
潰瘍をガンと合点して悩む
嫌々と拒めば好きと勘違い
探してた眼鏡ポッケに入っていた
じつくりと味わっている秋の彩
親のことじつくり想う歳になる
じつくりと煮込んだ鍋に寄る笑顔
幸せをじつくりするうまいお茶
じつくりと耳で学んだ師の音色
じつくりと構えて案を練り直す
じつくりと読めば笑えぬ漫画本

よしえ 雅女 孝男 稔 完司 陸子 忠良 蟹郎 たぬ 和子 公子 菖子 幸枝 清帆 幸子 雅女 美恵子

ほたる川柳同好会 水野 黒兔報

汚染米平成の乱おこさねば
若者の敬語の乱れこそばゆい
平均気温年々上昇温暖化
褒められず叱られもせず学び終え
ダークな色使いみのりの秋描く

契子 春代 柳童 見清 宇乃子

乱立のルートで運ぶ汚染米

二・三世するする坐る総理の座

平均は良しと悪しきの交差点

すると子は歳月は去っていく

ライバルに乱れる眉は見せません

戸のきしみロソク持ち出す祖母の知恵

年毎に指輪するする抜けそうに

ブライドが心の乱れ見せぬまま

日持ちせぬするする偉くなるお人

平均の暮しと思うさんま焼く

日の丸がするする揚る銅だけど

するするつとおばちゃん見事席確保

平均値越えたところにある個性

翠洋会

安土 理惠報

隅に居て待ちかまえてる導火線

本物は隅にあらうと見逃さず

この家の隅のゴミまでわての物

ハンカチの四隅黙秘権を使う

ポケットの隅にブライド押し込める

極楽の隅に予約という卒寿

台風の子報に揺れる初デート

孫台風去って寝込んだ老夫婦

台風の進路に老母がひとり住む

神様の一刷毛空も山も秋

祥風

禮子

長一

黒兎

勇治

いさむ

雪子

昭子

勝

桂子

信男

幹治

久子

春

すみ子

茶々

養

尚士

みつ子

弘子

浩二

桃花

さと美

ヘアブラシ今は不用になりました

歯ブラシが二本愛する人と住む

歯ブラシを替えて明日を白くする

初対面聞いてた位置にあるほくろ

ご無沙汰で友がだんだん遠くなる

携帯に今夜のメニュー飛んでくる

ブランクだけ先走りした老いの旅

年を経て似た者夫婦味を出す

居酒屋のベンチに置いてきた痛み

勝手にしょい頂面の反抗期

忙中閑餐沢な午後の椅子

スパーの六甲おろし空々し

父の意志ついで一本釣の舟

そちらにもこちら側にもあるルール

この先はどうあれ生きる外はない

大阪城記念の句碑とサルスベリ

子育てを終えたライオンひとり行く

言い勝って心に重い石を抱く

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

音楽は好きだが五線譜には弱い

音楽を中止されてた戦時中

ベートーベンの耳に第九を聴かせたい

気の弱さ隠して掛けたサン格拉斯

いまの世へとても弱気で暮らせない

満作

集一

昭

正雄

照子

げんせい

捷也

水昇

理恵

蕉子

千歩

恭昌

千梢

日の出

志華子

舞夢

れんげ

楓楽

庸佑

敏

いさお

喜久子

一壺

佳句地十選 (11月号から)

敬子

水割りの底で泳いだ嘘一つ

ババの負け入道雲の力こぶ

霧の中に秘密を一つ置いて来た

赤ちゃんは母の言葉で人になる

伍詰で育ちネズミは取れぬ猫

わたくしも何時か電池で走り出す

冷蔵庫の中でカードが生きている

わだかまりすんと落ちた広い天

被害妄想あの頃の絵に戻れない

辛抱は出来んと顔に書いてある

弱そうですつと我慢の強い母

大柄で怖い顔してあかんたれ

大声でよく吠えるのが弱い犬

弱点はここだと発破かけられる

強者にも表に出さぬ泣き所

弱点を握った妻にある余裕

ふれた手に胸ときめかす青りんご

わくわくと出来たて命抱いた日よ

憧れた君に逢えるか同窓会

彼を待つ心知らずや花時計

アゴイチへわくわくして一人旅

(古)洋子

章子

克枝

晴美

(奥)五月

日の出

紫晃

無限

美恵子

月子

りつえ

光男

六点

アヤ子

章司

泰子

恵子

ヨシ枝

ちづる

久仁子

耕策

みつこ

はめられたらすぐに天に昇ります
マラソンの道中に棲む悪魔たち
マラソンで我慢覚えた素直な子
俺のマラソン鉄振る作業三時間
人生のマラソンゴールまだ見えず
人生は終りの知れぬマラソンと

西宮北口川柳会

黒田

能子報

絵ハガキが弾む夕餉にしてくれた
一枚のハガキ苦楽を連れて来る
万感をさらりととはがき書いている
出欠のハガキを前にする迷想
一枚のハガキが武器になるだろう
あの無口達者で書いてくる葉書
感性の鈍らぬように欠伸する
感動の涙を年のせいにする
抽象画老先生が試される
感性を揺する夜長の虫の声
好きだった人の名前がでてこない
酒煙草好きでお国に奉仕する
会えるかな一番好きな散歩道
好きなのに茶化した頃セピア色
妻が逝く神も美人が好きなのか
好きなようにさせると医者ほ素つ気ない
品格はさて置き好きな飲み仲間

美喜 一知 獲杏 一屯 悦子 真一 奮水 孝一 松煙 比ろ志 光久 嘉代子 美龍 直 耕治 折杭 章子 朋月 宏一 弘子 美代子 正和 哲男

好きになる時と嫌いになる自分
好きな事してる時には目が冴える
今日もボツスランプなんだとあけらかん
スランプを勝負カラーで切り抜ける
ぬか床にスランプはない茄子の色
生命を考えすぎると食べられぬ
シャンプーの香りがスーと通りゆく
四球でもいいと打席に送られる
用意出来祝詞待ってる七五三
落ち葉でも美しければ拾われる
月を背にわが影を踏み登る坂
みなさんの世話で充電してもらおう
不満少々じつと欠伸噛みころし

京都塔の会

都倉

求芽報

富喜子 里こ てる わこ 鹿太 二英 多喜子 忠 歳子 キヨミ 哲子 求芽 萬的 ますお 鹿太 ふりこ 昌乃 文代 宏子 福子 美義 満子 克治

反抗を苦もなく砕く母の愛
頑固頭 孫が砕いた大手柄
当って砕ける勇気が欲しい青りんご
マスコミのペンが砕くと飛び火する
ごませんべい軽く砕いている若さ
どうしても波長の合わぬ叔母がいる
山のさげんに合わすとこどもよく返る
ヘルパーに波長合わせるふりをする
なじめない波長に悩む新天地
職退いて波長合わせてくる夫
胎内できいた波長につつかれる
採めるのが嫌で大勢に歩を合わす
鳴き砂が声を掛け合う夜の浜
深海魚 上は波長の違ふ海
勝ち組と波長の合わぬ足の裏
国民と波長の合わぬまつりごと

南大阪川柳会

吉川

寿美報

欣之 とし子 石舟 典子 公子 庸佑 篤子 綾子 輝美 則彦 葉子 かずお 孝一 和友 求芽 太郎 尚士 集一 忠昭 志華子 直子 栄子

新聞に今日も哀しい記事がある
どん底に居ても再起を胸に秘め
団塊の再び挑む向い風
我が家が俺より偉い犬がいる
赴任地で家族を思う星月夜
大鍋を出して帰省を待っている
家族にひとり巨人ファンがいてもめる

ちくはぐな食器が並ぶ大家族
 天才の努力達するまでねばる
 監獄跡彬の句碑が伸びをする
 建立へ五年かかった彬の碑
 ノルマ達成次のノルマへまた登る
 彬の碑建立達しおめでと
 おじいちゃん赤ちゃんどうして生れるの
 かなりのもんだ頭のうずが三つある
 禁酒する誓い破ってばかりいる
 難関を選んで生きた強い女
 この秋は紫式部の筆述る
 難しい話は湯割りで中和する
 汗かかぬマナーが世界狂わせる
 今日からのページに君がいる日記
 馴れという狡さ出回る汚染米
 負けて勝つそんな演技もできる歳
 怒り肩するから風が避けられぬ
 森光子徹子のパワースクワット
 元部下に頭を下げる二度の職
 再検査するたび狂う汚染米
 脱メタボ毎日走る大阪城
 天気図に離れた家族思う夜
 常識の物指しなんて無い若さ

更紗 なぎさ ダン吉 勝弘 祥昭 ルイ子 弘風 ばっは 一歩 嘉住子 克己 柳弘 東吉 萬修 萬的 たもつ 楓楽 柳伸 昌紀 憲太郎 弘泰 章久

目の奥に二十歳の君が生きている
 目に惹かれ背なに惹かれて初デート
 あやふやに出来ぬ子の目に迫られる
 鯉口を切って覚悟の目が光る
 魂の行方知らせる仏の目
 何だって目尻のしわが物を言う
 ノーベル賞日本万歳大声で
 大声で辞表出したのは地球
 そして今亡父の一喝活きている
 足もとのつばやきを消すでかい声
 大声で歌って憂さを吹き飛ばす
 大声ののってストレス飛んでいく
 拡声器過疎は演歌で魚売り
 大声につられて買った予定外
 こぼれ種抱いてどんどん太る土
 少年にどんどん進む道がある
 世の中をどんどん変えるIT化
 どんどんと湧き出る母の知恵袋
 どんどんとつい取り過ぎるバイキング
 どんどんと叩いて土下座午前様
 なんほでも入る大きな欲の壺
 来るはずの人が来なくて軋む椅子
 客足が途絶え拭いてる招き猫
 招かない客がミルクに化けている
 客になり気を遣ってる京の家

裕美 寿子 富美子 利治 めぐみ 真里子 和香 和子 小雪 三男 紀久子 克子 正博 紀子 保州 俣子 登美代 美子 佐一 大輪 順子 准一 英子 泰女

妻の客に咳一つして顔を出す
 嫁さんをお客様ほど奉る
 川柳若葉の会 宮崎ンマ子報
 友達からスタグチ届くと買うさんま
 黒潮を来て人の餌食になるさんま
 さんま焼く煙に追われ鯛雲
 えらい人五日大臣崩される
 スタートの勢い崩れ立ち止まる
 萩の寺早や崩れそう秋の空
 日本の四季も崩れる温暖化
 ピンチにも崩れぬ母がいてくれる
 正座から胡座になつて座が和む

緑良 謙 シマ子 弘直 喜美子 香住 烈 慶子 加津子 能子 ますみ 柳柳茶ばしら 板山まみ子報 背が少し低いと見合い断わられ 誤報だと分り避難を解いた群れ 雀らは陰曆時間守ってる 意気上がる好きな土俵の自己主張 ざわついた心へ染みて行くみすず 柿の実が採れる高さに通学路 追いついた頃はすたれるはやり物 川柳塔なら 坊農 柳弘報 引き際も愛想が悪い総理殿 (江)勝弘

形見分け茶羽織ひとつもろている
 夢をみた指輪外してさようなら
 君も茶もさりげないけど欠かせない
 縄電車やっぱり妻は外せない
 用件的が外れる長話
 無愛想な方からそつと助け舟
 実力は充分あるが外様です
 愛想よい顔に生まれてきたえくほ
 愛想いい笑顔残して風になる
 あいそよく振つた尻尾の置き所
 思いきり笑ってくれるひね胡瓜
 運慶も肝をつぶしたオークシヨソ
 外角に大きく外したまま六十路
 営業用の愛想わらいが寄つてくる
 心配するほどでなかつた茶番劇
 九条好き平和マニアと言つておく
 愛想よく輪を和ませる老いの知恵
 お招きへ虚心にくぐるにじり口
 花から花へ恋のマニアになる男
 生きて行く愛想笑いを武器にして
 愛想言つたわしに気づく自己嫌悪
 愛想はないが惜しまぬ思いやり
 幸せはこんなもんかと茶を啜る
 一言を聞きたく入れた渋いお茶
 仏像のマニアほとけの句を通す

千梢 とし子 隆子 章久 博一 洋子 惠美子 六助 修理子 道子 一風 和夫 富子 秋雄 朝子 弥生 良一 孝子 隆盛

垂涎の一品を見るオークシヨソ
 一の矢をわざと外して子を叱る
 一服のお茶は暮らしの句読点
 愛想良い笑い袋は疲れてる
 わかあゆ川柳会 松本はるみ報
 ながれ星ひそひそ話置き去りに
 まだ若い上手に励ますつむじ風
 猪も居場所追われて町に出る
 座ぶとんが聞いてしまつたいい話
 すぎ去つた日があつたから花が咲く
 鉄瓶の湯気なつかしいその昔
 激励の前置き少し長すぎる
 明日がある情力でいこう縄電車
 好きですと一言もなく逝つた妻
 川柳ささやま 遠山 可住報
 症状を軽く見すぎていたシヨック
 叱つたり誉めたり自由ひとり者
 そのうちに月から見よう青い星
 叱られた思い出語る通夜の席
 ほつこりの栗の御飯で仏供養
 将来を夢見て貯めた家計赤
 子の夢を今度は孫に期待する
 叱る前一息置いて愛の鞭

義久 寿美 順啓 保子 好栄 聖子 ちよえ 惠美子 伸子 かつ子 博利 清泉 純子 美緒子 二英 美紗子 多美子 開子 かほる 幸子

明日という将来があり画布展げ
 将来の約束信じてついて来た
 イチローと落語家目ざす孫がいる
 先生はママが叱つて来てあげる
 川柳塔みちのく 小寺 花峯報
 右上がりの僕の筆字は親ゆずり
 爪を噛む癖を子どもに注意され
 値踏みする癖が役立つ物価高
 シルエット変装しても癖写り
 余命幾許岬へ辿り着くわたし
 良い事があつたか語尾まで踊り出す
 追憶の岬を偲ぶ愛唱歌
 癖のある男百回かみくだく
 最後の一滴お鉢子振っている紳士
 負けるなど父母の岬の風が言う
 茶柱に心とます夫婦著
 子孫から元氣をもらい生きている
 癖がつく抱くなど言つて抱いている
 納豆の箸は達者な古希である
 夫婦望月見に雪の話など
 灯油高 重ね着の癖やめられぬ
 酒癖の悪い男女の泣きボクロ
 人間をときどき拒絶する岬
 初雪に耐えているのはバラの棘

富美 美智子 哲男 可住 吞舟 一路 きよし 初枝 夕香 芳生 洋子 和香子 ヒサ子 美鈴 一呑 準人 順風 銀波 ふさゑ 花匠 雅城 黙人 花峯

骨拾う箸がポロポロ零する
無意識にお尻を撫でるテナガザル
葦一本北の岬へ根をおろす
箸の權お伽話は風まかせ

長柳会

村上

直樹報

社保庁の不始末だけは許せない
古稀の夏心ときめく出逢いする
始末した妻のお陰で家が建ち
眉をひきアデランスつけ若返る
眉しかめ足の爪切りメタボ腹

直樹
エミ
武男
輝子
登美子

道楽でためたがらくた今宝
独りでも楽しく過す友が居る
路地裏の馴染みの店に義理がある
したたかに生きる女の朝の虹
化粧しても曲った腰は老けて見え
母の旁曲った腰が物語る

もこ
マサ
正博
靖子
正子

あの角を曲ればうれし我が家の灯
愛妻の手綱さばきで生きている
後始末また影一つ消えてゆき
ブライドが心の化粧剥がさない
正義感ちよこちよこ曲げる札の束
お人好しなのに偏屈へそ曲り
エピソード楽に行きたい花吹雪

敬二
三和子
正和子

靖博
よしお
たかし
和代
淳司
富美子

更衣室うわさ話の別世界
曲折があつて無風の日々暮れる
父母の血を承けて始末の昭和生き
曲つてる額が気になる峠茶屋
気くばりと始末上手な姑が逝く
曲り角別れの予感ありそつで
花の香が手招きをする曲り角
極楽の手前に辛い介護の日
熱爛にとろり自説を折り曲げる

川柳塔きやらぼく

大塚

恵子報

川柳塔唐津

仁部

四郎報

投げだした総理羨む皇太子
ガンリンの値段で選ぶ観光地
曼珠沙華咲いて仏の声がする
夢売りが私のハート通り越す
孫が待つざくらが二つ食べ頃
思い出が薄らぐ亡母も遠い空
何処へでも助けに走るにぎりめし
初生りの無花果姑の仏前へ
うれしくて薬飲むのを忘れてた
掛声をかけて起きるが癖になる
秋なのに秋にならない温暖化
鉢に咲く花になぐさめられている
神さまが示したものと迷わずに
女子柔道笑顔で一本金メダル

光弘
幸雄
正一
芳野
けい子
明子
一慧
正美
和子

紅葉マークの車車が湯の宿に
旅好きの夫と最後になつた黒部峡
がちやがちやと小さい器がよくさわぐ
ふる里のこの径が好き胡蝶花が咲く
風向きて転ぶ人の背あまた見た
卒業を待ちくたびれた親のすね
草原の乾いたコスモス秋の風
老いたな脳のパランスくすれだす
船長も俄仕立ての船支度

すみえ
紫泉
日枝子
てい子
なみ
富美子
雪江
玲子
千代

高知川柳社
小川てるみ報

一本の花火囲めばみな笑顔
尺玉の余韻が耳を寝かせない
晩学の空を焦がしている花火
子の幸をひたすら折る遠花火
八月が来ると疼いてくる心

悦子
三郎
幸子
和江
美々

脈拍がどうも気になる心電図
支えあう心を杖に過疎の村

憲一
三千世

ときめきの心は棄てぬ薄化粧
真心が通じ合ったら手を握る

寅幸
暖

外見にこだわり心見失う

健

テレビゲーム子供心ゲットする
いつか来る別れへ心揺れている

京子
てるみ

あり合せ心づくしのおもてなし

典雄

失望のため息神の火が消える

初江

ためいきが混じっています排気ガス
ため息をついて始まる妻の愚痴

谷忠
みどり

赤ちゃんの一番好きなママの膝
一番は内緒一番にあなた好き

房江
千鳥

川柳らくだの会

岸本

宏章報

秋の空おんな心をもてあそぶ

紀子

笑う事いっぱいあつてうまい飯

清帆

ふくらんだ心で美術館を出る

玲子

まあいいか弱気に運が逃げてゆく

邦昭

心まで不器用なはずあるまいに

大鯨

大臣の地元立派な道がある

宏章

心から人を嫌ったことはない

仁子

梅はしも古里つなぐ味になり

すが子

靖国の御霊心は故郷へ

富貴子

ふんわりとこころを包むわらべ唄
午後のお茶おいしくさせたい便り

孝子
せつ子

川柳ふうもん吟社

夏目 一粒報

地獄門番人さえもりストラダ

洋々

山びこを返せぬ森が泣いている

美恵子

ギブアップ決してしない姑である

金祥

張りかけが着せ替えをする試着室

菊香

賑やかなあとこのまつりにある孤独

一瑤

張りかけな結納ローン追っかける

春名

ちくしようと思う女の言葉尻

無限

張りかけな家系葬式まで派手だ

節子

鼻の差で馬券を宙に撒きちらす

蟹郎

核戦争カギにきるのは番人だ

善夫

サンマ焼く番人をするうちの猫

稔

ちくしようと自我の弱さを吐き捨てる

孝男

張りかけな頃が恋しい齢となり

一京

飽食の陰に薄れてゆく感謝

清帆

ギブアップ夜になつても膳が出ぬ

行男

ギブアップするまで攻めて攻めまくる

圭一郎

張りかけに過ぎた役職ポロを出す

志げ緒

宝くじ二番ちがいだ悔しいね

昌鼓

番人が食の安全おびやかす

喜美子

バーゲンが私の前で売り切れた

喜子

ギブアップすぐする脳をこたらかす

美雪

命預かるナース詰所の灯がぬくい

由美子

ちくしようめ刺客送られ惨敗だ

菖子

晩学にちくしよう野心発芽中

悦子

居眠りをしてる踏切番もいる

妻子

ギブアップしたかに見せて隙をつく

秀四

こんちくしよう負けてはおらぬあの狸

茂登子

山びこのような会話で今日も暮れ

かをる

ちくしようめ私ドングリ転げ落ち

一粒

川柳塔鹿野みか月

福西 茶子報

まだ出来る今日も楽しいボランティア

(西)和子

頻繁になる物忘れふと不安

弘子

とりあえず安いセメント瓦ひく

幸枝

天辺で睨みを利かす鬼瓦

(鹿)節子

楽しんで遊ぼう年は忘れよう

くに子

暮まいるぐるり愛しい方に合う

孔美子

思い出を隠した山に月が出る

小鹿

秘めごとが洩れて飛散る外は雨

睦子

男の河を女の海は受け止める

彩子

たのしみが皆掃き溜めに寄つてくる

盛桜

たのしみを妻と財布に聞いてみる

満

たのしめる七難八苦だったなあ

諷人

たのしんで女はめると睨まれる

忠良

一日をたのしくさせたニラメッコ

みさ子

酒もおんなも楽しくてやめられぬ

螢

曼珠沙華月も味方をしてくれる

美ツ千

満月の一番似合う処で待つ

実満

玉露飲むたのしみあれば人も来る

はるお

満月に母は静かな貌になる
年重ね恋した頃の月思う

運がよい悪いは努力して決める
笑うこと覚えて運が向いてくる

金運がほしくて黄色財布買う

凶運は抜いてあるからまた来てね

趣味ひとつ楽しむ余生してみがく

柿の実が色づく頃は嫁にいく

楽しいな三年ごとに新車買う

満天の月の明かりへ産みおとす

満天も時には人を曇らせる

フルーツポンチに桜桃の紅ひとつ

川柳塔おっぱこ吟社

川崎ひかり報

憎しみを水に流して薄く生命

水入らず積もる話の里帰り

水引がまたも年金連れてゆく

水しぶき上げてイルカの得意顔

白雪の富士の山から水が湧く

耕して後で呑む水ああ甘露

言訳が下手でそのまま年を取り

出まかせの嘘が人生変えてゆく

一言が消化不良で胃に溜まる

川柳クラブわたの花

西川 義明報

ローン済む家も夫もくたびれる

みどり

房子

久枝

茶子

きみ子

幸安

富久江

菊乃

重忠

汲香

かおる

永子

歳月の泣きごといわぬ行進曲

やれやれと子供に勇氣鼓舞される

独り居てつれづれたたる来しかたを

犬散歩している人を羨ましい

一夏の恋諦らめと土用波

五七五始めた趣味の奥深さ

ビール瓶二本目を抜く鬼の留守

農水省汚染米売りあと知らん

誘われた旅で費用が背のびする

隣人のタブーに触れぬ心ばせ

愛の鞭直ぐグロッキーになる無様

神様には僕の心が見えている

白無垢がうまく染ってくれませんか

それも有る人の話しに安堵する

人生に悔いなしという嘘をつく

お互いに老いの歳月生き生きと

うにの殺割ってしぶとく動く怪

どの色を足しても戻らない若さ

地球儀が呆け始めてる温暖化

汚染米我が家どうかと妻に聞く

邪魔せぬようそと見守る子の家庭

小さな秋を見つつけに孫と山歩き

ソプラノの透明感に酔いしびれ

人生の仕切り直しの時はいま

おしゃべりがアルツハイマーのお薬に

呆け防止あれこれいつも考える

幸枝

莊司

美はる

克美

いつふみ

義明

宏

正春

欣子

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじめ

たえ子

美代子

耀一

知佐子

民

君江

博子

運転手同郷人で安堵する

しみじみと母さん想う夕茜

長い歲月父の軍歌が耳に住み

岸和田川柳会

土橋 房枝報

目の玉が飛び出す料理器だけ

脱退化サブりで済ます近未来

食卓の広さ虚しい子の巣立ち

冷や飯を食って男は強くなる

我が儘の延長戦にある孤独

人生の延長戦は妻の弟子

どこまでも延ばす宇宙の夢ロマン

監督もサイン出し切る延長戦

揉めないで目でおさめてるペット猫

雲切れて台風一過虫の声

波風も胸に治めて五十年

ミシン踏む母の内職深夜まで

安普請雨戸を開けるコツがある

九条のどこにがたがた言いますか

金融の不安がたがた株下がる

グリ押しにがたつく非核包囲網

がたがたと鈍行に乗り一人旅

女房が我が家おさめて丸く住む

国政をおさめる人がまた逃げる

記者クラブ走る大臣辞任劇

婦人倶楽部盗み読みした少年期

愛子

ミツ子

一風

笑司

香代

房枝

尚士

淳風

泰弘

寿海

守

岩夫

仁緑

力子

和美

扶美代

ダン吉

俊昭

蛙城

珠子

呂万

柳風

義泰

昭

定年後趣味のクラブで満たされる

町内の記者クラブだな散髪屋

ニッコリとふところ値踏みクラブママ

憧れはクラブが振れるほどの庭

人目引くクラブのママが集金に

松露川柳会

小西 雄々報

充実した生きる証を摸索する

鯛雲と熟れた柿の実詩情わく

四季ごとの恵みの実りわが至福

練習の成果が実り金メダル

児童等の立てた案山子に稲穂垂れ

メタボでも美りの秋は別腹だ

好きだった亡父母の面影忘れない

大好きな五輪火も消え秋の風

癒される孤独へ好きな紅生姜

好きな趣味時間の過ぎるのも忘れ

やはり好き朝日を拝み鍬を振る

プロポーズ言えぬ心のもどかしさ

好かれるも嫌われるのも風の音

好き嫌いなしで出たもの全部食べ

好きだけど君の欠点おおすぎる

東大阪市川柳同好会

森下 愛論報

腹の虫鳴くと私の秋が来る

絵日記の蟬は杵から飛び出そう

弘子

洋

ゆい

玄也

東吉

敦子

澄江

美明

美枝子

裕

広子

信雄

久子

鈴枝

弘子

公美枝

和代

智恵子

静江

雄々

虫も殺さぬ顔で企み練っている

欲望の重みでクモの糸が切れ

紫の袷紗が仕切る静と動

すつきりとした時落とし穴がある

呱呱の声聞くとすつきりしたお腹

すつきりと決着させた離婚劇

朝シャンで頭すつきり身も軽い

老いの余白に素敵な夢を泳がせる

初デート素敵な言葉探してる

素敵だと思う人には隙がない

彼岸花咲いてほとけと道連れに

墓まいり遠くて千の風を待つ

邪心無い祈り仏は母の影

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

笹舟に重すぎますか願い事

無花果の葉が語りつく創世記

腊葉が化石となっているロマン

双葉からもうお受験が絡みつく

葉っぱかと思えばうなずく葱坊主

どうみても人間臭い八つ手の葉

葉脈をたどる運命線たどる

連の葉にいずれ抱かれるまで走る

檸檬の恋アカシヤの葉で来る来ない

委託という言葉で老いを攻めてくる

葉が付いてこそ様になる大根

和子

雅文

柳弘

三重子

シマ子

敏子

秀夫

美弥子

風子

八郎

湖風

美子

愛論

豊

朱夏

登美代

幸

昇

章子

理恵

当代

起世子

孝子

みね

葉隠れの蕎麦を同伴に先ず一献

枝葉末節ちいさくなつていく私

竹はうきいやいやされる濡れ落葉

家中の時間を止めて旅に出る

鈍行を乗り継ぎほんまもの旅

句読点打てないままに旅終る

旅好きの鞆はいつもコンバクト

もうじこしてはおれないピーヒャラ

ハイテクの世も被い給えと地鎮祭

ワッショイと言えば祭りの顔になる

財布つけて後のまつりへ封をする

後のまつり叱ってくれた母遠し

おまつりの気分が消えた物価高

任せとき言うてはみたが無為無策

柿八年嫁に任せた倉の鍵

百万本の薔薇の吐息に任せます

口パクで声はお任せする少女

アサガオとゴーヤに夏が任される

竹原川柳会

古田 太虚報

絵手紙の上手な友のサンマくる

瀬戸の海どこも絵になる詩になる

孫の絵の私いつでも笑つてる

自画像ほどの顔にする模索中

墨絵の中を一番電車走り出す

東吉

次根

孝義

八重子

准一

菜摘

純子

絹子

保州

俣子

桂香

幹子

瑛子

かずみ

イセ

町子

翠子

碧

和子

年子

一路

淑子

半徳

蘭幸

イクサを知らぬ眼の美しく描くドーム
 釈迦の声父の声聴く初盆会
 記憶から消したい過去が一つ有る
 羨だと叱った記憶の子育て期
 七歳の孫に負けてる記憶力
 ワンピース幼い胸の弾んだ日
 たのしかった記憶を胸に生きてます
 宝くじ当たらないから平和です
 子や孫と笑える家に住む宝
 小さな石だけと宝という指輪
 呑み仲間川柳仲間こそ宝
 保険掛けてあるかと宝聞きにくる
 ローン済みやつと宝になりました
 亡夫の書斎宝島の地図がある
 遺品から孫の手紙の束ひとつ
 頑張った私に何か買ってやろ
 長電話これもストレス解消法
 獲物待つ蜘蛛は欠伸などしない
 空を見て自分の小ささに気付く
 初めての一步はババへ向かいます

ロイズ川柳会

山崎

君子報

敬子 厚子 汎美 慶子 弘子 栄恵 房子 太虚 規代 笑子 輝恵 節生 幸子 民恵 あゆみ 栄香 比呂子 千枝 史子

すすき野に亡き人しのお風が吹く
 金袋満たすことしかなない頭
 窓の月センチになったのは昔
 香袋昔の香りそのままに
 川柳ねやがわ
 龍島 恵子報
 見る見えぬきわどいところが透けている
 生き甲斐は妻が元気で俺自由
 隠し味納得させる手間と暇
 慈愛かな月光菩薩にひざますく
 枕やい昨日の喧嘩どこ行った
 膝頭少し弱音を吐き出した
 納得へ針一本をさしておく
 敬える恩師にあったエピソード
 歳いけば敬える者となりたし
 孫みごこ生まれ納得してる歳
 一芸に秀で柔道敬われ
 色変えて落ちる木の葉に涙ぐむ
 居るだけで母はムードを和らげる
 初恋のムードを偲ぶフルムーン
 枕元小型ラジオに癒される
 納得いかぬ運命線が伸びている
 ノーベル賞四人の博士おめでどう
 ソプラノとアルト麗しいハーモニー
 容姿より心優しい人がいい
 頬杖をついてジローを聴いている

トミエ 貴代子 義子 君子 銀杏 薫 亜成 茜 とし子 かつみ 洋 寿子 信子 栄二 佳子 鈍甲 一風 弘一 さと子 麗 日出子 賢子 朝子 じゅんこ

コスモスが弱い女のふりをする
 淋しさに負けないように手を洗う
 生きがいへ口はまだまだおとろえぬ
 生きがいを抱いて心に水をおよる
 身の程を弁え条件飲むとする
 コスモスの迷路の中にいるムード
 川柳さんだ
 北野 哲男報
 フェルメールの春秋の空独り占め
 秋深しわたしも少し実らねば
 秋の灯に静かに聞く民話集
 鱈雲入道雲のあとをつぐ
 すぐ出来る遊び仲間と飲み仲間
 町工場機械遊ばす不況風
 感謝感謝今日一日をよく遊ぶ
 年金でする遊びなどしれている
 あのひとと今宵なんとかなる空気
 親の思い空気も凍る未だ拉致
 正論を吐いて空気が薄くなる
 告白と弁解二度目空を切る
 お出かけにおにぎりギョツと作り置く
 世の荒み川柳以外笑顔なし
 呼びもせぬ病士足でやって来る
 もう一度泥舟と知って乗ってみる
 ノーベル賞暗い世界にパツと咲く
 赤い糸いつかは切れる日を思っ

あさ子 喜八郎 博泉 典子 庸佑 恵子 靖鬼 光久 里江 哲男 五月 美代子 耕治 正和 裕康 美紗子 順子 孝一 和代 二英 野薫 雅司 茂山

都合よいことだけを聞く老いの耳
ドイツ語でなくとも読めぬ医者の文字
生きているうちに逢いたいお下げ髪
村まつり古老に生氣甦える
消息は何処空地の仲間たち
旅先で道を聞かれる顔らしい
頑張っているぞと狼煙上げておく
歳重ね日毎フアジーになつてくる

川柳塔すみよし 岩崎 公誠報

またフアイト捨ててはいない麦の種
麦の穂を生花にする季節感
また値上げパン屋貼り紙小麦高
麦の秋ふるさとの野をわたる風
告白を聞いてゆれてる麦畑
恋ひとつ落ちていそがな麦畑
飽食が麦飯の味忘れさせ
顎の張り麦飯食べた頃育ち
麦踏み家族総出の日が続く
麦なんか食べたことない現代っ子
麦酒よりやつぱり秋は酒がいい
小麦粉は値上がり米は疑わし
棹のさき麦わら帽や赤とんぼ
飢えしのぐ麦飯はいま格上り
麦畑二人の恋にザワザワと
母娘旅あけびの里や麦とよろ

歳子 好文 朋月 宏一 キヨミ 章子 忠 美籠
かりん 幸子 定子 半銭 ばっは 篤子 太郎 シマ子 庸佑 日の出 明江 萌 蕉子 チエコ 舞夢 美籠

小麦粉と読んで頭はメリケン粉
薬屋根のうえに初雪冬化粧
酔うたびに麦と兵隊歌う友
麦ふみのように踏まれて成長し
リボン褪せ麦わら帽の夏の夢
事故米の心配がない麦食べる
麦飯も良いがやつぱり麦の汁
乗り切った酷暑が残す麦酒腹
ありがとう世話になります米と麦
後継ぎがない黙々と麦を踏む
谷へ舞う麦わら帽子からドラマ
ひび入った湯呑み茶碗で出る麦茶

富柳会 池 森子報

義母が急ぎ嫁向日葵の種焦がす
アンテナを磨きそびれた同想句
同レベル終着駅に時差ができ
騙されて騙して同じ夢を追う
あの雲に平和を乗せる蟬しぐれ
惜別へ神の掟と逆らえず
かるやかに渦を荷うか蝸牛
転がって私一人の空にする
寿命また伸びて年金目減りする
容疑者はうふふとゆれるサクランボ
夢描くまずは権利と宝くじ
幸せはお天道さまと風と土

克博 (興)五月 正太郎 伸子 朝子 裕之 昌紀 遠野 末吉 幸雀 公誠 五月 森子報 喜郎 和子 扶美代 紅紫朗 鬼焼 信子 伸雄 鐘造 よりこ 奏子 武人 恵

振り向けば母とおんなじ男運
あの時と同じ火花の音がする
破顔一笑ただそれだけで生き伸びる
柵を解いて孤独な舟が行く
太陽に向つてひまわりの主張
ひまわりの迷路で過疎の村起し
同じ道歩いて来たが天と地に
介護するされる母とのせめぎ合い
ひまわりの母を泣かせた反抗期
ひまわりのDNAにキノコ雲
そむいたら昨日と同じ椅子がない
ふる里が同じと聞いてから好きに
鼻の下伸ばし過ぎましたねあなた
伸びる芽を摘んでいたのね親心
柿たわわ絵筆に腹が減ってくる
日日が白紙のつづく日記帳
螢火が過去の思い出連れて舞う
幸不幸同じ土俵に立っている

八尾市民川柳会 宮西 弥生報

ほとんどに聞くが長寿の秘訣です
投句終了午後のビール的美味いこと
ノーベル賞成果主義では出来ません
九条をじつくりと読む秋夜長
秋冷の朝を切り裂く百舌の声
満月の人の心を魅了する

アキ よしみ ひろし 未知 寿之 淳司 高鷲 佳子 彦次 澄子 登子 甘良 深雪 晴美 千恵子 壽峰 森子 耀一 浩三 紀雄 ダン吉 欣之 幸男

説法を聞く束の間の真人間
継続は力晩酌欠かせない
真実を聞かされやと腹決める

許す気の歩幅で逢いに行く紅葉
紅葉の真つ赤へ彼の手がぬくい
一張羅むしやむしやウールだとわかり

さまよつて自分探しの風の中
ない者の強さローンも株券も
コスモスの波に呑まれて小半日
重ね着の老母秋冷のセキをする

岬川柳会

八十洞庵報

回転をいくつかくくり今日の幸
あの日から胸に抱いてる影法師
頂上から平和は下界郷の村
頭が高い下がりがおろうを試みたい
川沿いに休耕田の田舎町
空つぽの脳が鳴り出すカラコロと
川沿いに家建ち並ぶ城下町
川沿いの洒落たダンゴ屋ギヤルの店
ヌスト萩そつと老いたい健やかに
髪梳かす母の温もり手に余る
胸の奥思ひ出深く鍵かける
殻残し蟬も北京も燃えた夏
江戸時代大名行列下へ下へ
手抜きしてのんびり回る余生表

朝子 いさお 一風 加央里 賢子 秋子 柳伸 柳鶴 弥生 令子 和香 十美恵 貞夫 東吉 富美 悦子 洋子 富美子 俣子 茂平 圭子 年子

それそのあの遠くなつたな一思い出も
ひと塗りで出合つた頃にもどれたら
母の笑顔見たくて開けるセピア色

豊中もくせい川柳会

藤井 則彦報

二三日過ぎて父の日思ひ出す
できるだけ地産地消で生きたいな
おまけにと貰つたガムで歯が外れ
名月に心の底まで洗われる
火中の栗拾う相談まともらぬ
おまけの酒コップ半分余生かな
嬉しさは心が通じ合えた時

おまけのない人生だつて悪くない
糠床でいつもの自分取り戻す
おまけにはストーカーまでついて来る
阪神の記事ばかり見て乗り過こし
美しい月に見とれて水溜り
甚平の背中に詩がある長寿
おまけとは思わぬ今日を生きている
毒を盛るお皿を隅で洗つてる
鮎よりもグリコおまけの好奇心
才能の限界悔し筆洗う
洗いざらして着ても心は豊かです
熟柿一つ早よ食べてねとおまけされ
薄汚れの夢を洗つてピンと干す
中之島電車が通り背骨でき

桜琴 和美 洞庵 石舟 郁子 啓生 タミ 庸佑 勇治 夢 肋骨 葉子 則彦 満寿巳 行兵衛 美玲子 美義 都代子 求芽 美智代 見清 宇乃子 堅坊

洗う度小さく丸い母の背な
ふるさと便土と空気が添えてあり
どの色にも染まらぬ私で居られるか
通ぶつて喋つてはまる落し穴
うっかりを笑い合えるもあとわずか
上流は分らないまま水を汲む
癌癒えて神のおまけの日を生きる
移り香に修羅のドラマの幕が開く
愛よりも塩ひとつまみ欲しい皿

川柳塔打吹

野口 節子報

にせもののネクタイみんな高級品
偽物だらけ信じる心見失い
偽物が大手広げて国壊す
ふらふらと鈍行に乗る旅も良い
ハミングし三日月を追いふらふらと
ふらふらになるの怖くてペビー缶
ふらふらと行く幸せな酔つぱらい
ふらふらと仲良く歩くマリオネット
ふらふらと散歩が趣味と負けおし
祭典に天狗の面が生きかえる
三面鏡きれいですよと言つてくれ
裏面に本当の事書いてある
横面を叩き愚かな我叱る
人間の弱さ菩薩の面撫でる
交渉権どすをきかせた面がまえ

巴子 寅次郎 寿美子 萬的 千代 佳恵 尚士 十八娘 早人 禎元 孝恵 美代子 美ツ千 和子 克枝 京子 滋 小生 紀美恵 美知江 和枝 きみ子 勝誉

百面相見せたが孫は泣きやまぬ
 決めかねて面と向つて問い質す
 綴れ織り七十年の面の皮
 懲りない面々が川柳をやつている
 般若の面の裏側にいる仏さま
 雲ひとつ無い大空に星いくつ
 世界にひとつだけのこの顔磨いている
 ひとつだけ良いことをした子を産んだ
 誰にでもひとつ覚えで吠える犬
 一桁の暗算くらいはまだ出来る
 妻が居て子が居てひとつ物足らず
 何一つ不自由ないが彼女なし
 お月様ひとつ呑み込む一人酒
 活火山ひとつ抱えて生きている
 一つずつ長所拾つて共白髪

倉吉川柳会

竹信

照彦報

玲坊 陸子 石花菜 完司 蝨 幸子 龍枝 三津子 玲子 善江 富恵 泰輔 芳光 重忠 節子

東京でもうすぐ孫の披露宴
 遙かなる故郷を思う祭り笛
 遠くから大山四季を知らせてる
 海岸に遠い他国のゴミが来る
 聞こえない遠いあの世の母の声
 人生は落語だったとやつと知る
 落語家にモンゴル人はまだいない
 落語人生そろそろオチを考へる
 朝ドラのちりとてちんが懐かしい
 どの顔も平和な顔になる落語
 世の乱れ落語のネタは無尺蔵
 落語からヒントを貰い五七五
 落語から昔と今のさぐりあい
 たましいは宇宙へ骨は石の下
 軽石で踵をこする歳になる
 意志は皆おんなじだろう蟻の列
 冬近し石焼イモがやつてくる
 大石だいつか鎮守の神になる
 石磔笑つて軽く受け止める
 うさばらし蹴る石もない道さけい
 人工の漬物石が売つてある

川柳大阪

長井

善純報

子の顔も忘れてしまった認知症
 悔しいな一番違いジャンボクジ
 縄のれん飲んで気がつく金足らん

よしえ 節子 和子 美津恵 けいこ 萩江 由紀子 完司 泰輔 龍枝 重忠 きみ子 康子 石花菜 玲坊 玲子 みちる かつみ 和枝 喜美子 照彦 珠生 紀雄 和

ああしもた入れ歯ははずした顔見られ
 しもたなど気付いてからの低姿勢
 突然の雨恋の傘吹き乱れ
 突然の雨目の前にあるホテル
 浮世絵を買つてマンネリ打破する
 マンネリを破る勇氣に背なの汗
 マンネリの砂の時計が静か過ぎ
 手料理もマンネリ化した倦怠期
 マンネリの島に自然が満ちている
 マンネリでよし大根の種を蒔く
 前例を盾に役所は動かない
 マンネリにならない友と飲んでいる
 敬老日回転ずしはもう飽きた
 メーキャップ上手な妻とは知らなんだ
 異はまるテレビショッピングの巧さ
 差別医療中味そのまま名をかえて
 異はまり居なおりするの度胸いる
 社保庁の異はまった高齢者
 人間の浅知恵の異笑う猿
 その昔女の異にはめられた
 いい人にされて何だか異くさい
 甘い異こんなにもてる筈がない
 異かけたつもりが敵の思つっぽ
 はまったわすべて白状してしまた
 錆ついた異を秘かに磨いている

柳昌 柳弘 すがお まつお 彦太 喜楽 洛醉 かよこ 鉄心 笑風 東吉 勝弘 一步 川童 花笑 美世子 功 芳香 章久 五月 一風 青道 美籠 美花 善純

六甲川柳会

伊勢田 毅報

子や孫に教えておこう川の幅
絵手紙がたのしい話してくれる
親と子の描く未来図がいすぎ
だんだんと近い未来を語り合う
未来像覗いてみたい万華鏡

(甲)孝子

立ち読みで得た雑字をひけらかす
神通力なくした天狗鼻が折れ
天狗の子鼻が邪魔だと泣いている

城北川柳会

伊達 郁夫報

あと十年いかに生きるか思索する
ロボットに介護されてる近未来
白い画布いつばいに描く子の未来
わくわくの私にさせるファンファーレ
昂るころ押えて出番待つている
へそくりで素敵な夢が買えました
出番待つ身体に羽が生えてます
空の旅服もバッグも踊つてゐる
年金が実ることなく消えてゆく
秋深し実るふる里懐かしむ
ふる里へ幸せ運ぶ良いみのり
還暦の記念植樹に輝く実
望郷の浜風を恋う撥の沓え
少食ですます朝でも消化剤
定年後第二のトビラどう開く
鉛筆が丸くて連が決められぬ
麻の服皺が佳しい秋の風
ああそうね孫には言えて子にいえぬ
宇宙から見れば国境なき地球

美恵子

自問自答ちと行き過ぎたなどと思う
発想を替えて生きればまた楽し
乳飲み子に新芽のような歯が覗く
税金を払うゆとりが欲しいだけ
身繕い紅少しさし若がえる
手のひらが時時痛む針十本
何があろうと命を的に子を庇う
先生も親も教えぬエチケツト
この国を任せる顔が見当らぬ
不器量が何時もニコニコ愛らしい
五日目で大臣やめた面の皮
色白が七難かくし玉の輿
子授けの神にお詣りした傘寿
掛け持ちのパートのはほんなど無縁
顔変えていつまでもつか楽しみだ
取替えのきかない顔にある誇り
遠くて近く近くて遠い嫁と住む
柔らかい笑顔で痛い釘を打つ
方言で話せば里の顔になり
米と味噌あるからのほんと生きる
満月にほつと一息彬の碑

萬的

泣きべそへ追い討ちかかるから笑う
遠い人酒一合で近くなり
のほほんを装うカメレオンの殺意
遠い人思い出させる乱れ萩
のほほんとした日もある朝の靴
幸せを掬うこの掌が浅すぎる
遠くから見れば歪みがよく分かる
新涼も来た来た地球まだ元氣
どん底を這うて男の顔になる

郁夫

無

能子

求芽

ルイ子

湯上りに海の潮風心地よい
寝てる間も骨は縮んでいくらしい
一日のメニュー五行で消化する
黄金虫にイチジク取りで負けている
一夜千し微妙な乾き具合だけ
老いの夢捨てて長生き何残る
卵とりどつちが先に生まれたの
干し魚の臭いただよう港町

朝子

繁

義

あやめ

ひさ乃

米子住吉川柳会

登美枝

政

一

千歩

昭子

渡辺多美子報

日枝子

千

賀子

美智子

千里

ふみ

多美子

順

子

昭子

千里

ふみ

多美子

孝

子

美智子

千里

ふみ

多美子

基

輔

美智子

千里

ふみ

多美子

洋

一

美智子

千里

ふみ

多美子

史

郎

美智子

千里

ふみ

多美子

和

郎

美智子

千里

ふみ

多美子

札

甫

美智子

千里

ふみ

多美子

純

江

美智子

千里

ふみ

多美子

武

彦

美智子

千里

ふみ

多美子

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

美穂

孝子

美恵子

忠良

淳子

無限

能子

繁義

弘子

政一

千賀子

順子

孝子

基輔

茂

洋一

史郎

和郎

毅報

楓楽

いわゑ

マネキンに贅肉はなしメタボです
 家の中時計だらけで皆違う
 怠けぐせあがりたたくない父ゆずり
 お祭りはあなた子供に帰らせる
 末法は神仏論が乱れ飛び
 住み馴れて御輿の端を担いでる
 神のいたずらS席となり元カレが
 人間の嫉妬が分る神がいる
 祭りの日お国訛が通じ合い
 怠りを詫げる絆のフルムーン
 孤独ではないわたしには神が居る
 種時いただけの杓子菜穴だらけ
 金木屋一本一本嗅いで見る
 ふる里の祭り呼んでる帰ろかな
 かば焼に種も仕掛けもありました
 怠った日々を結果が責めてくる
 頑固さが後の祭りになる化石
 秋茄子を仲良く食べる嫁姑
 パーゲンの品で夫の一揃い
 山の神しずか過ぎてても気にかかる
 何もかも神にゆだねて気が軽い
 花束を貰って尻がこぼばゆい
 神様と気安く遊ぶ村祭
 神の子を赤ちゃんポスト入れません
 豪放な気性に多いミスの数

義芳 靖鬼 龜子 よし子 矢薫 昭三 里江 全彦 雪菜 正治 江美 イサミ 勝巳 孝一 耕治 政江 義久 鹿太 かずお 美義 美代子 朋月 求芽 蓄水 美龍

川柳花の輪

妻谷 重風報

地下街に若者あふれロック踊る
 名月が溢れる水辺で語り合う
 いつ見てもあふれる笑顔見せる孫
 肩書がこぼれ落ちそな名刺持ち
 トップ見出し世相グサリと核を衝く
 熟慮して発言しようトップなら
 総理の気持ちわかると夫独り言
 ありがとう何故か言えない夫には
 価値観の違う夫と半世紀

川柳塔まつえ吟社

三島 浜丘報

久し振りまだ飲めるかと顔覗く
 久々の安息何もせず過ぐす
 久びさの靴に踵をかじられる
 竹馬の友と語り明かした里帰り
 病み上がりお酒の味も久しぶり
 久しぶりね数の数だけ懐かしい
 眼鏡拭く父の話が深くなる
 私の視野を広げる窓を拭く
 バスタオル我が家の宝拭いてやる
 嘘ついた口を拭いてるお父さん
 若い頃の足跡拭いてまわる日々
 いい訳がすんなり通り汗を拭く
 幻影の夕日に遠いかごめの輪
 遠いけど逢いに来てねとメール打つ

手の届く位置にいながら遠い君
 いつの日か宇宙へ行けるかも知れぬ
 遠い日を手繰り寄せても咲かぬ花
 激動の昭和も遠く霞む山
 力まずに年相応に手を借りる
 標的にされがぜんと得る力
 国引きの神のロマンに見る力
 力にはなれず一緒に泣いてやる
 力説が空回りする梯子酒
 肩の力抜いて女に戻る時
 健康でいきいき社会ジャンプする
 いきいきと母が狙たたく音
 いきいきと改札口は人の群れ
 いきいきとしたライバルの影を追う
 いきいきと絵手紙の文字躍ってる
 いきいきと遊び心を連れ歩く

多喜 静恵 邦代 スズコ 政子 日出子 注湖 英子 たくし 和歌子 小生 蝿 桂子 柳歩 浜丘

川柳と表現 福田 山雨楼

芸術は表現であり川柳は生きた言葉である。表現はまた花であり実である。これをよく開花せしめ結実せしむるには、詩精神という空気と、文学的表現、技巧という温度と、時代感覚という水分を送り込み根幹枝葉を正しく逞しく育てあげなければならない。(昭和28年12月) 『川柳雑誌』320号(昭和29年1月号)

第23回 国民文化祭・いばらき2008(11月9日)

本年度国民文化祭はコミュニティセンター城里で開催された。事前投句の高校・一般の部は2458名、ジュニアの部は6956名、当日参加は450名。大会各賞は次の通り。

◎高校・一般の部

文部科学大臣賞

靡絶の核を信じてホタル舞う

奈良県 菱木 誠

国民文化祭実行委員会会長賞

ゆつたりと生きて命を遊ばせる

東京都 今井ゆずる

茨城県知事賞

生きているだけで交響曲になる

愛媛県 田辺 進水

第23回国民文化祭茨城県実行委員会会長賞

米を研ぐ母にやさしい水の音

長野県 石田 一郎

茨城県教育委員会教育長賞

左遷地で上げる拳を鍛えてる

宮城県 仁多見千絵

城里町長賞

納豆を食わずに水戸は語れない

兵庫県 舟辺 隆雄

第23回国民文化祭城里町実行委員会会長賞

両の手ですくうと甘い水になる

三重県 橋倉久美子

城里町教育委員会教育長賞

クール便昨日の海がノックする

栃木県 大橋 芳明

(社)全日本川柳協会会長賞

猪の地図に曲がった道がない

神奈川県 五十嵐 修

茨城文化団体連合会会長賞

核家族母屋に残る古い二人

栃木県 古谷野とみ子

茨城文芸協会会長賞

阿弥陀にも夜叉にもなれる核の顔

岩手県 新里 山歩

茨城県川柳協会会長賞

ごくごくと咽を鳴らして命飲む

茨城県 須藤 桜花

◎小中学生の部

文部科学大臣賞

全力で走って風を感じよう

山口県 伊藤 司

国民文化祭実行委員会会長賞

水節やくエコにつながる第一歩

群馬県 春山 薫

茨城県知事賞

遊んでる時の時計が早すぎる

茨城県 安田 恵菜

第23回国民文化祭茨城県実行委員会会長賞

なつとうはげんきパワーのものになる

茨城県 園部 凜

茨城県教育委員会教育長賞

この地球共存しあう水と人

山口県 竹中 悠起

城里町長賞

うまかつべ水戸納豆は日本一

茨城県 三谷 優奈

第23回国民文化祭城里町実行委員会会長賞

納豆は朝のごはんのパートナー

広島県 小林 一美

城里町教育委員会教育長賞

スピードを出していらつくお父さん

広島県 西村 侑起

(社)全日本川柳協会会長賞

みずくさい全部話せよ友達だ

山口県 河村慎一郎

茨城文化団体連合会会長賞

なつとうでみんなにこにこあさこはん

茨城県 飯塚 愛梨

茨城文芸協会会長賞

ホタルが来るときれいな水のしょうこだよ

山口県 増山 京祐

茨城県川柳協会会長賞

ちぢまないあと一秒の高き壁

新潟県 水戸部美穂

柳界展望

念全国川柳大会、10月12日(日)、なら100年会館にて開催された。出席1033名、同人の秀句。

存分におはぎをどうぞお仏さま
木本 朱夏

○第58回岸和田市民川柳大会は10月19日、岸和田市福祉総合センターに於て77名の参加により開催。同人天

○第44回雀郎まつり川柳大会、第2部全国誌上大会312名参加。特選句
バラ2本ごきげんになる妻といる 川名 洋子

○第62回長野県川柳大会、第2部。参加138名。特選句
曲がつても曲がつてもヒマワリの迷路 播本充子

○第35回沼津市芸術祭めぐづ文芸 川柳部門市長賞
ファッションの街へ裸の犬を連れ 播本 充子

○第29回栃木市文化祭・川柳大会は10月12日開催、同人の特選句として
個性キラキラ家系図を塗り変える 播本 充子

○番傘川柳本社創立100年記

理想郷きつと退屈するだらう 西出 楓楽

百歳になればのんびりするつもり 西出 楓楽

寂聴の繋ぐロマンス千年紀 村上 直樹

○10月26日、島根県平田川柳句会大会秀句。

ペンツ 新家 完司
初めての賞状何度も読んでいる 富田 蘭水

○第59回西宮市民文化祭川柳大会は、西宮市民会館に於て139名参加。同人の秀句。
定年で社保庁やめてもう五年 堀 正和

○京都文芸柳壇平成20年度毎日賞を榎本安子さんが受賞10月19日の第26回川柳大会に於て表彰された。当日の秀句として
青い炎が身体の芯で燃えている 山田 葉子

○和歌山県第50回記念文芸まつりに次の句が入賞。
流されぬように私の杭を打つ 三宅 保州

秋の風家族いっぱい欲しくなる 楠見 章子

▽出 版△

○藤井正雄氏(理事・茨木市)は朝日なわ柳壇入選川柳句集「私の百句」パートⅢを発刊。B6判69頁。

朝日新聞11月8日大阪版にて写真入りで紹介された。

▼計 報▲

●仲川たけし氏(日川協初代会長・松山市)10月18日逝去92歳。密葬10月21日、本葬は10月30日松山市の正宗寺に於て行われた。

●長谷川春蘭氏(同人・八尾市)10月14日逝去、98歳追悼文91頁。

●早川清生氏(同人・吹田市)11月4日逝去、同6日葬儀。近親者のみ。

▽同人動向△

○奥田みつ子さん(相談役西宮市)9月29日、国民文化祭いばらき2008の打合せの為水戸市行。

▽削除並びに訂正お詫び△

○11月号8頁下段24行目、寄せ書の国旗と……の句本人申出により削除。

○79頁上段5行目、福元英子↓福本英子。同中段9行目生誕百年→生誕百二十年

○102頁下段4行目、飲んで欲しややめても↓飲んで欲しややめても。同18行目午郎↓午朗。

▽新誌友紹介△

河内長野市 山室 光弘
紹介者 板尾 岳人

大阪市 阿野 壽子
紹介者 河内 天笑

仙台市 鈴木 桂
常任理事会(臨時)11月24日、出席者19名①14回川柳塔まつりの反省→同人総会・記念句会・懇親宴についてそれぞれ反省②川柳塔まつり会計報告③今期役割分担について④大阪川柳大会⑤定例確認事項⑥各部報

▽新誌友紹介△

河内長野市 山室 光弘
紹介者 板尾 岳人

大阪市 阿野 壽子
紹介者 河内 天笑

仙台市 鈴木 桂
常任理事会(臨時)11月24日、出席者19名①14回川柳塔まつりの反省→同人総会・記念句会・懇親宴についてそれぞれ反省②川柳塔まつり会計報告③今期役割分担について④大阪川柳大会⑤定例確認事項⑥各部報

告事項⑦その他

常任理事会 11月7日(金)出

席20名①提案事項の検討②

大阪川柳大会最終確認③高

野山合祀祭関連④定例確認

事項⑤各部報告事項⑥その

他 次回12月8日(月)10時

田辺聖子さん文化勲章受章

おめでとーございます。

川柳の良き理解者であり、川柳界との御縁も深く、橋

高薫風前主幹と親交のあつ

た作家の田辺聖子さんが此

の度文化勲章を受章され11

月3日皇居での親授式に臨

まれました。川柳塔社では

電報により祝意を表しまし

た。

身近な「怒り」の川柳コンクール

公共正義の立場から感じるいきどおり、身の回りの出来事に対する明るい怒りを川柳にして下さい。

締 切 り 1月31日

審査委員長 木津川 計

投句用絵馬 1枚400円(切手付) 2枚セ

ット 600円(一枚は切手付)

大賞一句 (10万円と賞品) 他賞多数

発 表 3月14日

(HP・入賞者は本人直接)

お問い合わせ (主催)

〒678-0239 赤穂市加里屋68-9

赤穂商工会議所内

TEL 0791-432727

お 知 ら せ

10月24日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定しましたのでお知らせします (太字は部長)

総務部	村上 玄也	鴨谷瑠美子
企画事業部	井伊 東吉	村上 直樹
編集部	山本希久子	穴吹 尚士
	籠島 恵子	木本 朱夏
	山岡富美子	山口 光久
句会部	長浜 美籠	河内 月子
	古今堂蕉子	
同人・誌友部	穴吹 尚士	古今堂蕉子
渉外部	坊農 柳弘	河内 月子
	松原 寿子	
会計部	鶴田 遠野	山口 光久
発送部	川端 一步	鴨谷瑠美子
事務局	鶴田 遠野	山岡富美子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	14日(日)午後2時締切 謎・温泉・るんるん・「店」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳ふ うもん 吟社	14日(日)没句川柳供養大会 縄張り・ロスタイム・学歴・空回り 逆ギレ・千の風・遺言・敗者復活吟	全労済ビル5F 大ホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
豊中も くせい 川柳会	15日(月)午後1時50分締切 続ける・お金・ぎりぎり 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
松露川 柳会	15日(月)午後7時半から 12月・どっさり・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
和歌山 三幸柳 川柳会	20日(土)午後1時から もう・お互い・じわじわ	勤労者総合センター4F 会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
岸和田 川柳会	20日(土)午後1時半 縁談・煽てる・がちり グルメ	岸和田市立福祉センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳ね やがわ	21日(日)午後1時15分締切 戻る・つぶやく・意見・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半締切 いらいら・生きる・暗示	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳藤 井寺	21日(日)午後2時締切 足音・ミシン・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
京都塔 の会	22日(月)午後2時締切 そそくさ・強い・行方	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
南大阪 川柳会	22日(月)午後6時から 露骨・別れる・うるさい ブルー	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区王造1-16-13-304 前たもつ
川柳さ んだ	23日(火)午後1時より 結ぶ・予感・ひらめき・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前9時半より 居酒屋・地獄・蹴る・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 すみよし	27日(土)午後2時45分締切 席題・自然・扉・流れ	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
東大阪市 川柳同 好会	27日(土)午後7時締切 化粧・ムード・打つ・道	東大阪市社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	4日(木)午後1時から 仕舞う・暮・厄介	奈良市立中部公民館 近鉄奈良駅徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	6日(土)午後1時開場 素朴・丸い・キッチン・自由吟	旭老人福祉センター 地下鉄「千林大宮駅」3番出口隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	6日(土)午後2時締切 知・時効・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	6日(土)午後2時締切 歳末・もしも・落ちる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	7日(日)午後2時締切 透明・燥ぐ・どんどん・雑詠	山本コミュニティセンター3F(近鉄大阪線山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時開場 明・無口・ゆらぐ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川柳塔 唐津	8日(月)午後1時半から 騒ぐ・未練・猫	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時半締切 返事・粒・ほいほい	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼崎 尾浜 川柳会	9日(火)午後2時締切 忙・暮れる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
堺川柳会	13日(土)午後1時から 女・回る・(おわり「折句」)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	13日(土)午後1時から 細工・光・ケジメ	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	13日(土)午後2時締切 舞台・困る・続く ボランティア	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 打吹	13日(土)午後2時締切 鬼・広げる・こそこそ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 みちのく	13日(土)午後5時半締切 床・雑巾・唐辛子	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
はびきの 市民 川柳会	14日(日)午後2時締切 牛・酔う・おーい・リサイクル	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

編集後記

☆初歩教室欄の担当が1月号から交替をいたしました。永年に亘り添削指導の紙面を担当していただいた三宅保州さんにはたいへんお世話になりました。バトンを引き継いでいただく鈴木公弘さんよろしくお願い致します。誌友のみさんのこの欄への投句をお待ちしています。

☆今年も「ごま」のテーマで川柳を募集しています。昨年同様たくさんのお句をお寄せ下さい。詳細は裏表紙に掲載しております。

☆今月号からこの欄のメンバーに新常任理事の富美子さん、光久さんが加わりました。編集部一同益々充実の紙面を目指していますので投句、エッセイ、その他「意見、ご希望、或は苦言等」としお寄せ下さい。

☆同人最長老の長谷川春蘭さんが98歳で亡くなられました。句風は俳句調、96歳頃まで本社句会に出席、外出に意欲的だった春蘭さんはよく旧事務所へも足を運んでおられました。今年3月、新事務所を訪ねようとして、天王寺付近で道に迷われたらしくバトカーに送られて事務所に着されたそうです。ご冥福をお祈りいたします。(希)

□十月から常任理事として正式に編集部員に任命されました。従来からお手伝いをしておりましたので、ハケンから正社員になったというところでしょうか。

□執筆のお願い、原稿についての問い合わせ等、同人誌友の皆様にご協力を仰ぐことが多々あると思います。その節は是非お力添えの程、よろしくお願い申し上げます。

ひとこと

国語再生

智に蓋をすると言われている漢字制限も、字種類のわずか一割り増しにも満たない見直しの結果となったようです。国語が乱れているという国民の意識の中には、若い人の言葉遣い、敬語を含む国語力の全体が著しく低下している点にあるようです。

国語の習得は学ぶこと(まねをする)と習うこと(なれる)ことが基本になります。その言葉づかいのモデルとなるテレビが、現実

に一番悪影響を及ぼすと大人は懸念しています。

余りにも少ない漢字なので義務教育の期間中、漢字の語感だけで覚えてしまう習慣がついています。テレビなどで観る若いタレントの漢字競技などでも、語感だけで平気で答えている姿を見かけます。国語力の強化には、幼少時代から言葉の学び習う機会を多く与えてやることです。さらには慣用語やことわざ古典の美文など暗唱教育の評価を望みたいものです。

(井上 桂作)

□「読みたくなる雑誌」を作っていくのは同人、誌友の皆様の原稿であり、編集者はそれを分かり易く見やすくまとめていく、裏方に過ぎません。

○編集部の一員となり編集業務に携わることになりました。宜しくご指導ご支援をお願い致します。

○五十年前程前、労働組合の文化活動として小冊子を発行その手伝いをしていました。業務に携わることになりました。宜しくご指導ご支援をお願い致します。

○初心者の頃は誰でも同じですが身辺を詠む句が始まると単なる説明句、報告句になっていました。最近はその心音が詠み込まれ進歩の後が窺えます。(光)

□同人誌という枠の中でどれ位そのお手伝い出来るか分かりませんが、楽しい紙面づくりの為に精一杯頑張る所存でございます。ご協力の程、よろしく申し上げます。

(蠶)

り、神戸で川柳の勉強会を

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)」

地名

都道府県
市

姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「鍵」 (12月15日締切)

2月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B A

--	--

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

地名
市都 道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
		〒 —	—	
年	年		—	
月	月		—	
から	から			
一年	半年			
9	5			
8	0			
0	0			
0	0			
円	円			
該当の方に○をつけて下さい				

〒543
-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑選
 水煙抄 (8句) 小島蘭幸選
 愛染帖 (3句) 新家完司選
 檸檬抄 (2句) 高瀬霜石共選
 木本朱夏選
 一路集 (3句) 牛尾緑良選
 「未猫練」 岡本花匠選
 「豆」 (3句) 鈴木公弘担当
 初歩教室 「豆」 (3句) 鈴木公弘担当

2月号発表 (12月15日締切)

3月号
 檸檬抄「刻む」
 一路集「揺れる」「内緒」
 「熱」
 初歩教室「移る」

本社12月句会

とき 12月8日(月) 午後1時開場・2時締切り
 開催時間が変わりましたので、ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「初歩教室を担当して」三宅保州
 兼題「新しい」井伊東吉選
 「鐘」平松かすみ選
 「馴染む」江見清選
 「コンピニ」吉川見美選
 「無口」松原寿子選
 河内天笑選 (各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円(切手可)

本社1月句会
 7日(水) 午後1時から
 兼題「一(老)」 「もしも」 「目立つ」
 「宝」 「人 気」

第27年度 夜市川柳募集

第7回「旗」前田咲二選
 ハガキに3句 12月末日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌誌込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇八年(平成二十年)十二月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アト

大阪市天王寺区大道一四一七

〒543-0052 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題

「ごま」川柳塔社主幹 河内天笑 選

・応募要領 郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品

・発表 本紙4月号にて発表いたします。

・締切り 2009年1月31日(当日消印有効)

・投句先 〒5430052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

手作りの味わいに
こだわり続けて五十余年

オニザキの

すりごま



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

診療時間

・放射線科・ホスピス

月～金 8:30～16:00

・デイサービスセンター

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)